

2022 年 1 月

食料安全保障月報

(第 7 号)



令和 4 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 1 月食料安全保障月報（第 7 号）

目 次

概要編

I	2022 年 1 月の主な動き	1
II	2022 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 南米の乾燥と穀物生産・輸出への影響	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	9
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	11
5	FAO 食料価格指数の推移	15
6	食品小売価格の動向	16

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2022/23 年度の冬小麦の播種面積は前年度に比べ増加する見込み
	＜カナダ＞	2022/23 年度の播種面積は前年度に比べ増加する見込み
	＜豪州＞	2021/22 年度の生産量、輸出量は史上最高の見込み
	＜EU＞	2021/22 年度の EU27 の飼料用消費量は前月に比べ減少する見込み
	＜中国＞	2021/22 年度の輸入量は前年度に比べ 23.3%減少する見込み
	＜ロシア＞	ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠 800 万トンを設定
2	とうもろこし	8
	＜米国＞	生産量史上第 2 位、エタノール用需要増、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し
	＜アルゼンチン＞	高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高、輸出税は継続
	＜中国＞	生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し
3	コメ	13
	＜米国＞	前月から下方修正されるも単収は史上最高
	＜インド＞	2021/22 年度の輸出量が上方修正
	＜中国＞	インドからの碎米輸入が急増
	＜タイ＞	2020/21 年度の輸出量が上方修正
	＜ベトナム＞	生産量や輸出量などが上方修正

Ⅱ 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
＜米国＞ 生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量は史上最高の見通し	
＜アルゼンチン＞高温・乾燥で収穫面積・単収下方修正、輸出税は継続	
＜中国＞ 収穫面積の減少で減産見通し、輸入量は史上最高の1億トン	
＜カナダ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し	

特別編「ロシアの農産物貿易とコロナ感染拡大の影響」

※ 農林水産政策研究所 研究成果報告会

「ロシア、ブラジル・アルゼンチン、オーストラリアーコロナ禍と農業ー(2021年11月30日)」での長友 謙治 総括上席研究官(国際領域長)の報告を基に作成。

http://www.maff.go.jp/primaff/koho/seminar/2021/attach/pdf/211130_02.pdf

【利用上の注意】

表紙写真：

黒海沿岸に位置するロシアの主要穀物輸出港「ノボロシスク港」2015年8月撮影

(概要編)

I 2022 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、これから作付け・収穫が行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、1 月の米国農務省 (USDA) の需給報告では、小麦については、生産量はアルゼンチン等で上方修正され史上最高となるものの、米国やカナダの減産により世界の期末在庫率は前年度を下回っていること等から、国際相場は高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、米国で大豆が史上最高の生産量となるも、南米の乾燥の影響で、生産量が下方修正されたため、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数 (最新値: 12 月) については、主に植物油 (185→179) 及び砂糖 (120→116) の下落の影響により、11 月から下落 (135→134) したものの、引き続き高い水準で推移。

海上運賃については、バルチック海運指数 (穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数) は、10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降、下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、1 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 米国産大豆は史上最高の豊作も、小麦は19年ぶりの低水準

米国農務省（USDA）の1月需給報告によれば、2021/22年度の米国のとうもろこし及び大豆の生産量はいずれも前年度より増産となり、それぞれ3億8,390万トン（2016/17年度に次ぐ史上第2位）、1億2,070万トン（史上最高）となる見通し。一方、小麦は春小麦が高温乾燥の影響を受けたことで、小麦全体で前年度より10%減の4,480万トンと2002/03年度以来の低水準となる見通し。

一方、米国の期末在庫率は、とうもろこし及び大豆については増産により前年度より改善されたが、それぞれ過去5年平均と比較すると10.4%、8.0%と低水準になっている。また小麦については、減産に伴い前年度より低下し、32.0%となっている。

2 ロシアは2月半ばから6月まで穀物輸出枠を設定

ロシアは、2021年6月から小麦、大麦及びとうもろこしに、同年9月からひまわり油に可変輸出関税を導入しており、現在も継続中。中でも小麦の関税額は2021年6月上旬の29.7ドル/トンから大幅に上昇し、2022年1月14日決定時点では97.5ドル/トンとなっている。

さらにロシアは、2022年2月15日から6月30日まで、小麦800万トン並びに、とうもろこし、大麦及びライ麦の合計で300万トンの輸出枠の設定について2021年12月31日付けにて公布した。なお、1月31日からは輸出価格に応じた3段階の可変輸出関税が適用され、2月15日から枠内に適用される。枠外については税率50%（最低100ユーロ/トン）が適用されることとなっている。

一方、ウクライナでは、2021/22年度の小麦の輸出上限数量を2,530万トンとすることで、政府と業界との間で合意がされている。さらに、その内数として製粉用小麦の輸出上限数量を設定することについて議論されている。

3 中国の穀物生産目標と輸入動向

国際穀物理事会（IGC）の情報によれば、中国農業農村部は、食料安全保障を確保するために、2025年までに食糧（穀物、豆類、いも類の計）生産量については6億5,000万トン以上を保持し、できれば7億トンの大台に引き上げる、作付面積は1億1,700万ヘクタール以上で安定させるとの目標を発表した。

品目別の生産量目標は、コメ2億1,500万トン（もみベース）、小麦1億4,000万トン、とうもろこし2億7,750万トン、大豆2,300万トン、菜種1,800万トンとなっている。

一方、需要増に伴う輸入に関しては、アフリカ豚熱（ASF）からの豚肉生産の回復に伴い、過去と比較して穀物の輸入量がここ2年間は高水準で推移している。

中国海関総署の速報によると、2021年の小麦及び小麦製品の輸入量は980万トン（対前年比17%増）、とうもろこしの輸入量は、2,840万トン（対前年比152%増）と前年より増加している。

なお、2020年に輸入量が1億トンを超えた大豆については、2021年は9,650万トン（対前年比4%減）と高水準ながらも前年よりは減少している。

また、2021年は小麦、とうもろこし、大豆とも、米中通商協議1次合意の影響もあり、前年と比較して米国産の輸入比率が高まっている。

Ⅱ 2022 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月末、280ドル/トン台前半で推移。1月に入り、アルゼンチン産小麦の豊作や、米国産冬小麦の作付面積が市場予想を上回ったこと、USDAの1月需給報告での世界の期末在庫量が市場予想を上回ったこと等から270ドル/トン台前半まで下落した。その後、米国中西部の寒波の影響懸念や、ロシア、ウクライナの政治的緊張等から値を上げ、1月下旬現在、290ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、12月末、230ドル/トン台前半で推移。1月に入り、南米の短期的な降雨予報等はあったものの、原油価格の上昇、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念等から価格は小幅に上昇し、1月下旬現在、240ドル/トン前後で推移。

コメは、12月下旬、410ドル/トン台前半で推移。1月に入り、アフリカ諸国からの新規需要や貿易業者による輸出成約済みの数量を確保するための買いが進み、更にバーツ高が価格を下支えしたことで、1月上旬には430ドル/トン台半ばまで値を上げた。その後もバーツ高により若干値を上げ、1月中旬現在、440ドル/トン台前半で推移。

大豆は、12月末、480ドル/トン台後半で推移。1月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念等から1月上旬に510ドル/トン台半ばまで値を上げた。その後、南米の短期的な降雨予報等から一旦490ドル/トン台後半まで値を下げたものの、再び乾燥懸念の高まりにより値を上げ、1月下旬現在、520ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から180万トン下方修正され 27.9 億トン。消費量は、前月から180万トン下方修正され 27.9 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.4%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され 27.9 億トン の見込み。

消費量は、前月予測から、とうもろこしで上方修正、小麦とコメで下方修正され、穀物全体で下方修正され 27.9 億トン の見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、5.1 億トン の見込み。

期末在庫量は、7.9 億トン と前月予測から下方修正、期末在庫率は前月からわずかに下方修正された。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.2 億トン。消費量は前年度を上回り 6.2 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.2%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：南米の乾燥と穀物生産・輸出への影響

2021年10月以降、ラニーニャ現象が発生している中、12月以降、ブラジル中西部は降雨に恵まれているが、ブラジル南部からアルゼンチンにかけて乾燥傾向となっており、とうもろこしや大豆の生産に影響を及ぼす恐れがあるとみられている。アルゼンチンは、国内向けの穀物の確保のため、小麦とうもろこしに輸出上限数量を設定した。最近のブラジル及びアルゼンチンの生産・輸出動向をまとめた。

1 ブラジル

(1) 生産動向

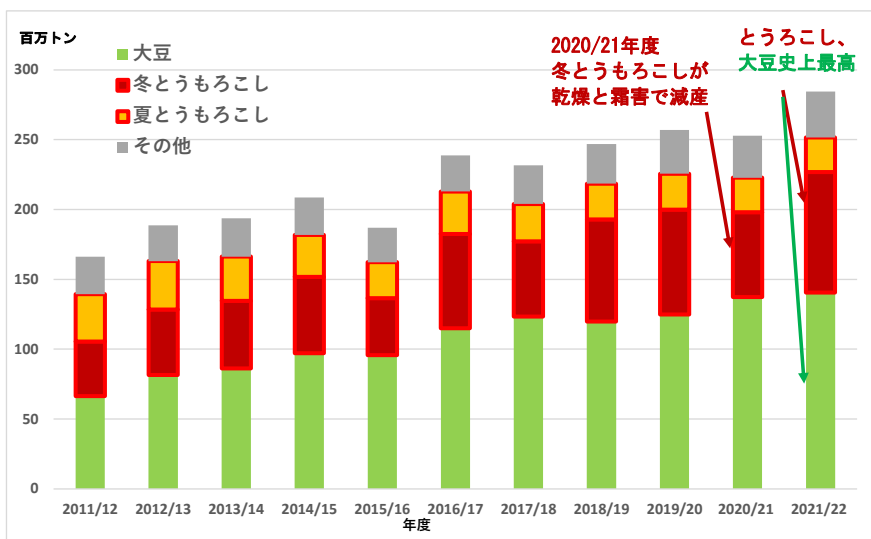
2021年12月以降、大豆の最大生産州である中西部のマット・グロッソ州及び北東部では、降雨が多く、一部で降雨過多による病害等の懸念はあるものの、土壌水分は恵まれており、おおむね順調に生育している。マット・グロッソ州の一部の圃場では、降雨による中断はあるものの、収穫が開始された。前年度は作

付けが遅れた冬とうもろこしの作付けが順次開始されるとみられる。

一方、ラニーニャ現象が2021年10月ごろから発生している中、南部では2021年11月から12月の降水量が平年の半分となっており、特にパラナ州では、12月の降水量が歴史的な低水準であった。このような状況から、大豆や夏とうもろこしの作柄に影響があるとみられている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の1月穀物レポートによれば、2021/22年度の穀物等（穀物及び、油糧種子）の生産量は、対前年度比12.5%増の2億8,440万トンとなる見通し。そのうち、ブラジルの主要作物である大豆は、南部の乾燥により前月から230万トン下方修正されたが、マット・グロッソ州での増産等から、前年度を2.3%上回る1億4,050万トンとなる見通し。とうもろこしは、同様に南部の乾燥で夏とうもろこしが430万トン下方修正され2,480万トンとなるも、冬とうもろこしが8,810万トンとなり、合わせて干ばつや霜害で減産となった前年度を29.7%上回る1億1,290万トンとなる見通し。大豆、とうもろこしも現時点では史上最高の生産量となる見通し。

図1 過去10年間のブラジルの穀物・油糧種子生産量の推移



出典: CONAB の資料を農林水産省で加工

表 2000年～21年春のラニーニャ・エルニーニョ現象

エルニーニョ現象		ラニーニャ現象	
発生期間	季節数	発生期間	季節数
2002年夏～2002/03年冬	3	2005年秋～2006年春	3
		2007年春～2008年春	5
2009年夏～2010年春	4	2010年夏～2011年春	4
2014年夏～2016年春	8	2017年秋～2018年春	3
2018年秋～2019年春	3	2020年夏～2021年春	4

出典：気象庁

写真 ブラジル パラナ州の大豆
2月には収穫を迎える



(2) 輸出動向

大豆の輸出については、米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、前月予測から変更はなく9,400万トン(対前年度比15%増)と見込まれている。なお、2021/22年度は作付けが順調に行われたことから、降雨不足で作付け遅れとなった2020/21年度と比較して、2月以降、収穫が順調に行われるとみられる。その結果、新穀大豆の輸出が順調に開始され、中国の輸入も、米国産からブラジル産へ順次シフトするとみられる。

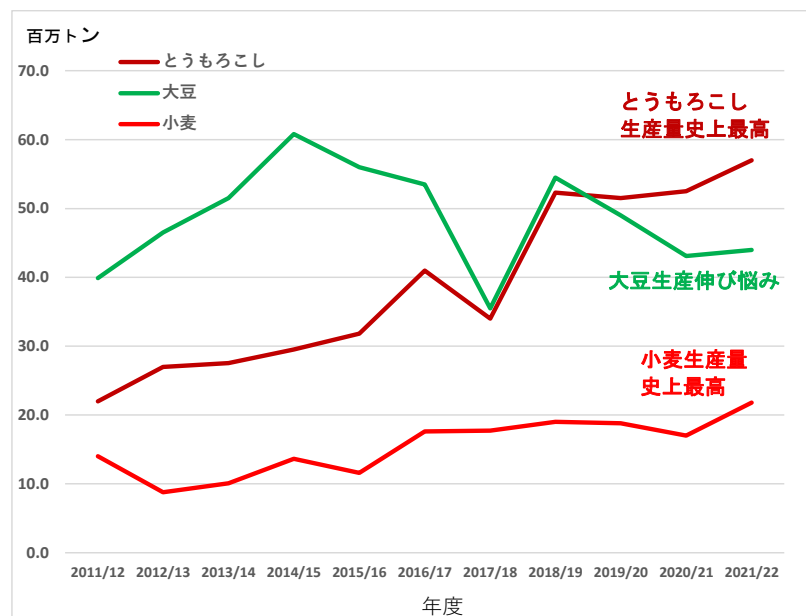
とうもろこしについては、USDAの1月見通しによれば、前月予測から変更はなく4,300万トン（対前年度比2.2倍）とみられている。主に輸出に回るのは大豆の収穫後に栽培される全体の7割を占める冬とうもろこしであり、輸出は、その収穫が終了する7月以降になるとみられる。

2 アルゼンチン

図2 過去10年間のアルゼンチンの小麦、大豆、とうもろこしの生産量の推移

(1) 生産動向

ブエノスアイレス取引所の1月13日付け週報によれば、収穫が終了した2021/22年度の小麦の生産量は天候に恵まれ、史上最高の2,180万トンが見込まれている。一方、ラニーニャ現象が発生する中、1月以降乾燥傾向の継続による土壌水分不足から、大豆やとうもろこしの作付けは前年度より遅れ気味となっている。同取引所の20日付け週報によれば、大豆の作付進捗率



94.8%、とうもろこしは87.9%となった。出典：ブエノスアイレス取引所の資料を農林水産省で加工している。同取引所では、大豆、とうもろこしの生産量を当初それぞれ、4,400万トン、5,700万トンと見込んでいたが、この数値については12月から1月の乾燥の影響を受け更新される可能性があるとみられる。

(2) 輸出動向

アルゼンチンでは、穀物や油糧種子、牛肉等の輸出において、財政赤字の補填等のため、2022年1月現在、大豆に最大33%、小麦及びとうもろこしに12%の輸出税が付加されている。さらに、最近の食品価格の高騰に対する国内向け穀物の確保のため、政府は、2021年12月17日付けで、2021/22年度産のとうもろこし4,160万トン、小麦1,250万トンの輸出上限数量を設定することを公表した。

3 国際貿易や米国の 2022 年産の作付けへの影響

近年、中国の旺盛な穀物輸入に伴い、南米では穀物等の生産量を増加させてきた。ブラジルでは中国向けの大豆とその裏作の冬とうもろこしを中心に穀物等の生産量を伸ばしてきた。特に大豆については米国を抜き、世界 1 位の生産・輸出国となった。

一方、アルゼンチンでは、最大 33% という高い輸出税のため、大豆の生産量は伸び悩み、大豆と比べ輸出税が 12% と低いとうもろこし及び小麦の生産量が増加している。なお、今般設定されたアルゼンチンの輸出上限数量については、とうもろこし及び小麦ともに前年度の輸出数量（USDA によれば、とうもろこし 3,950 万トン、小麦 1,150 万トン）を上回っており、現時点では国際穀物需給に大きな影響はないとみられる。

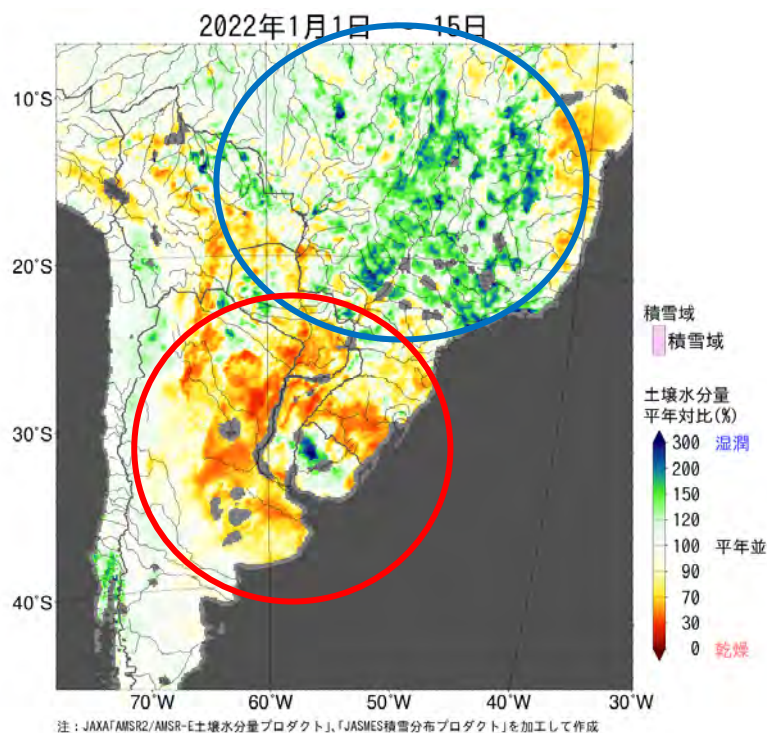
ラニーニャ現象に伴うとみられる南米の乾燥が、2 月以降も継続するかは現在のところ不透明ではあるが、今後、南米の生産量や輸出量が乾燥の影響を受けて減少すれば、米国農家の作付け意欲が刺激され、2022/23 年度の米国大豆及びとうもろこしの作付面積は増加するとみられる。ただし、肥料価格が高騰していることにより、肥料投入量が少ない大豆の方が有利とみられることや、2021 年の中国の大豆輸入量が前年より減少したこと等がどの程度米国の作付けに影響するか、今後注視していく必要があるとみている。

図3 ブラジル、アルゼンチンの 1 月前半の土壌水分量の平年対比

ブラジル中西部：土壌水分量は平年より多い(青丸)、

ブラジル南部からパラグアイ、アルゼンチン北部：土壌水分量は平年より少ない(赤丸)

<https://jasmai.maff.go.jp/>

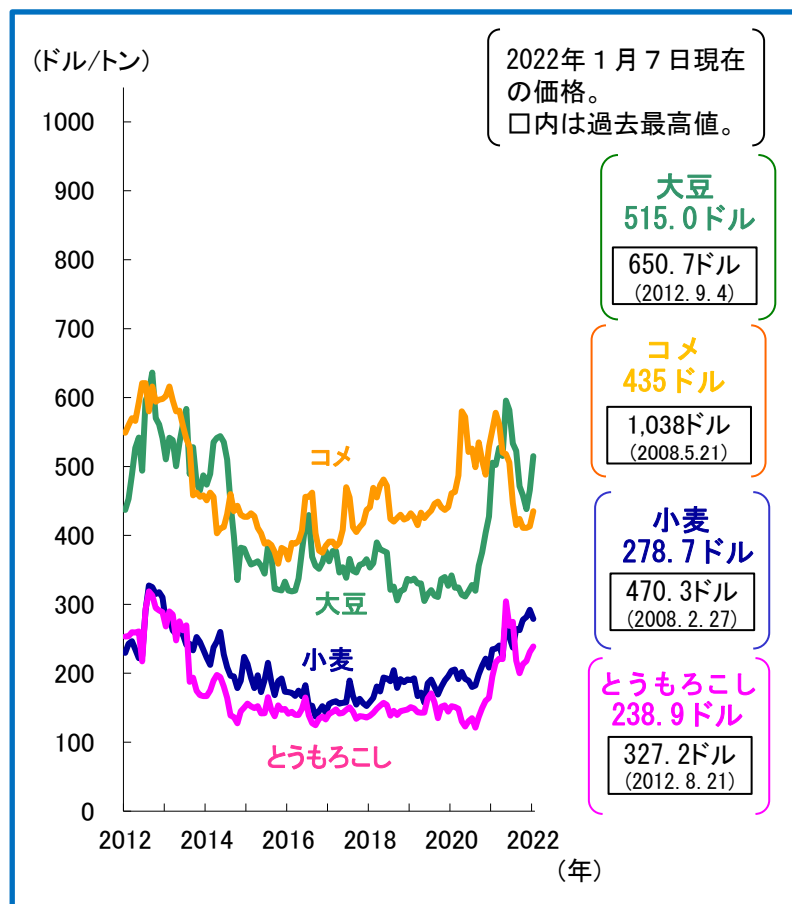
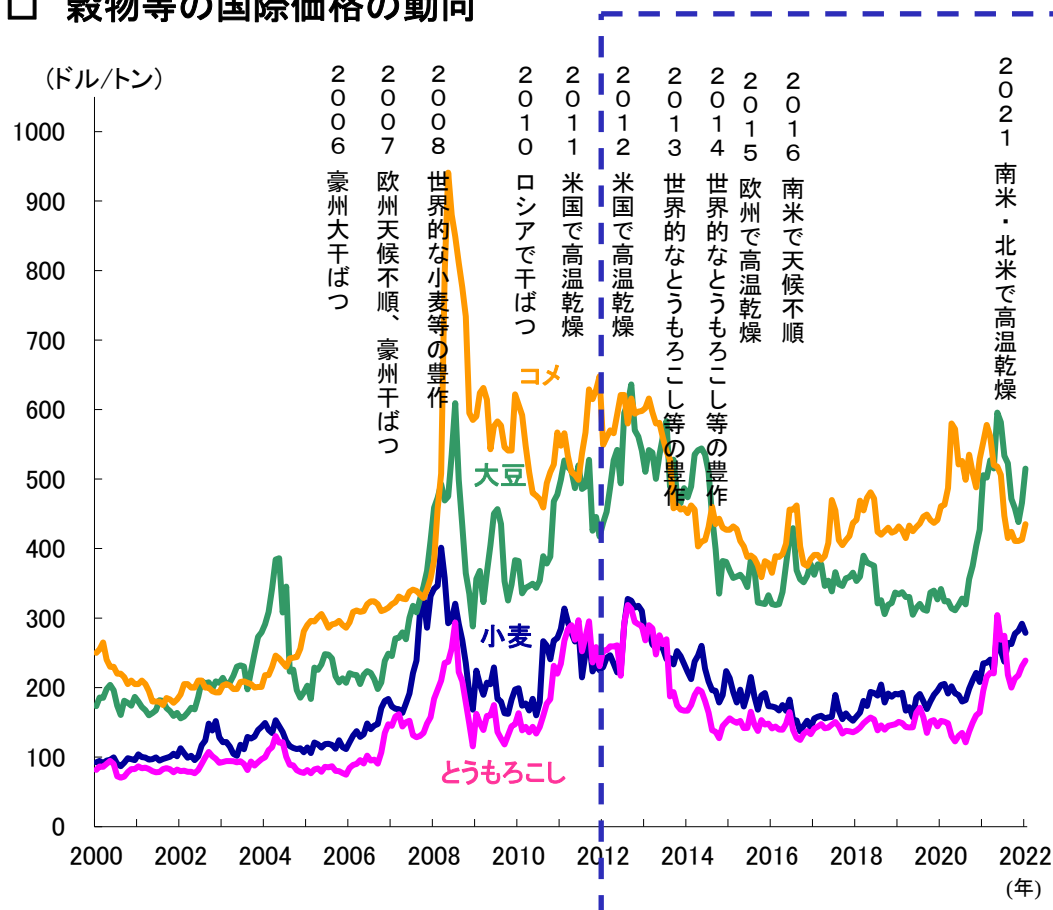


資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



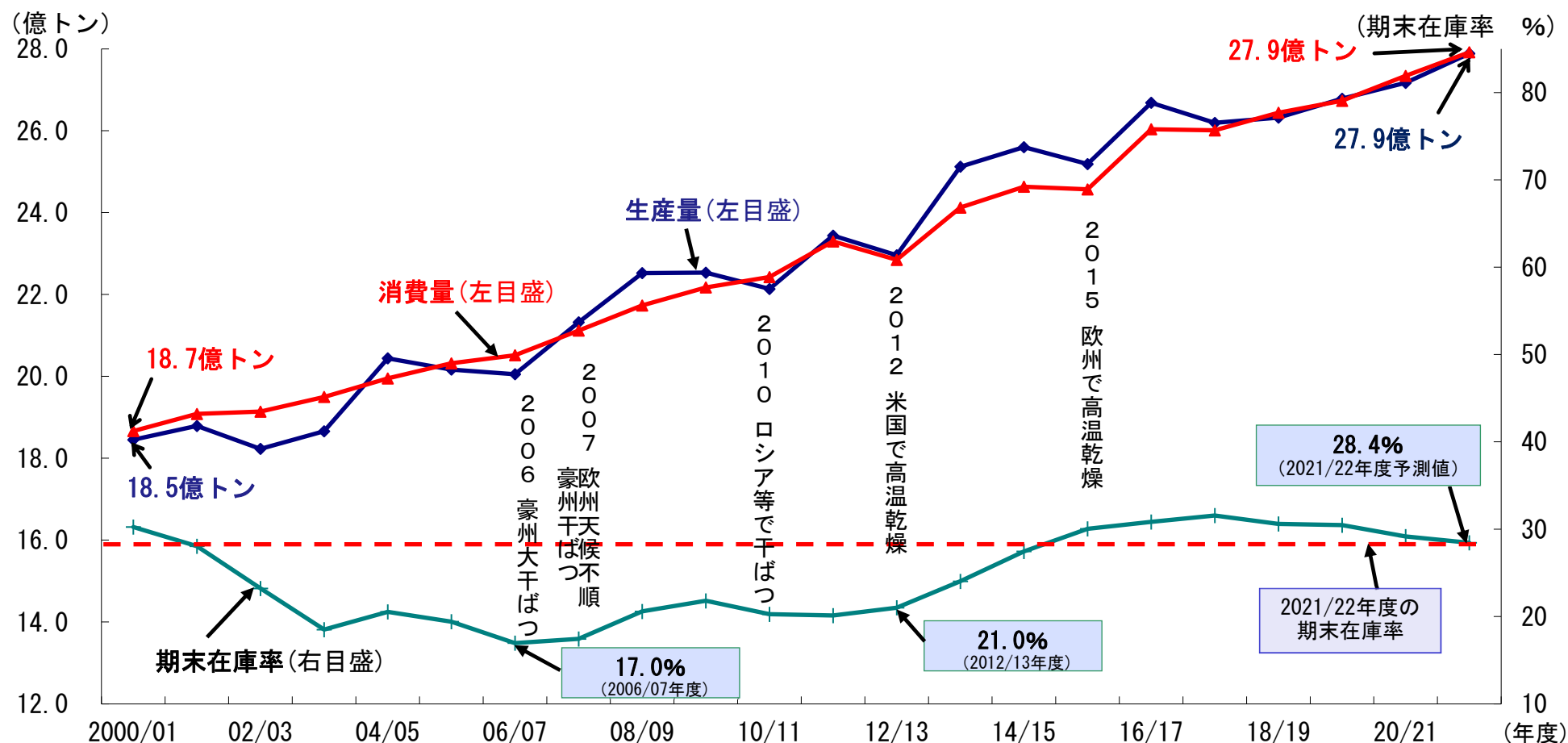
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

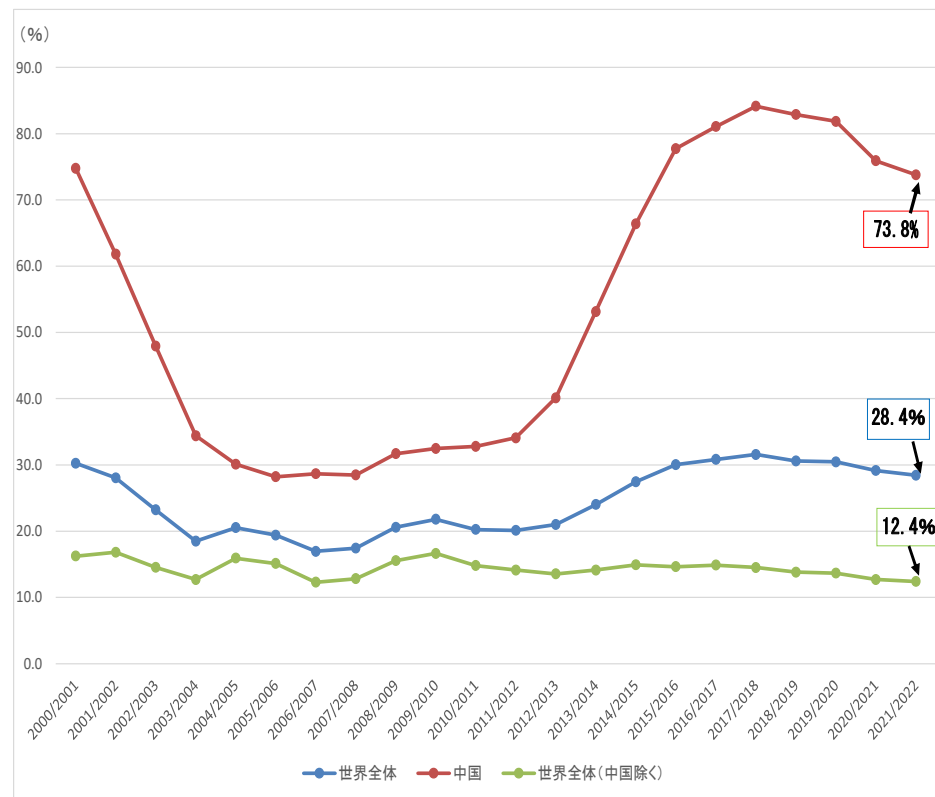


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2022)、「PS&D」

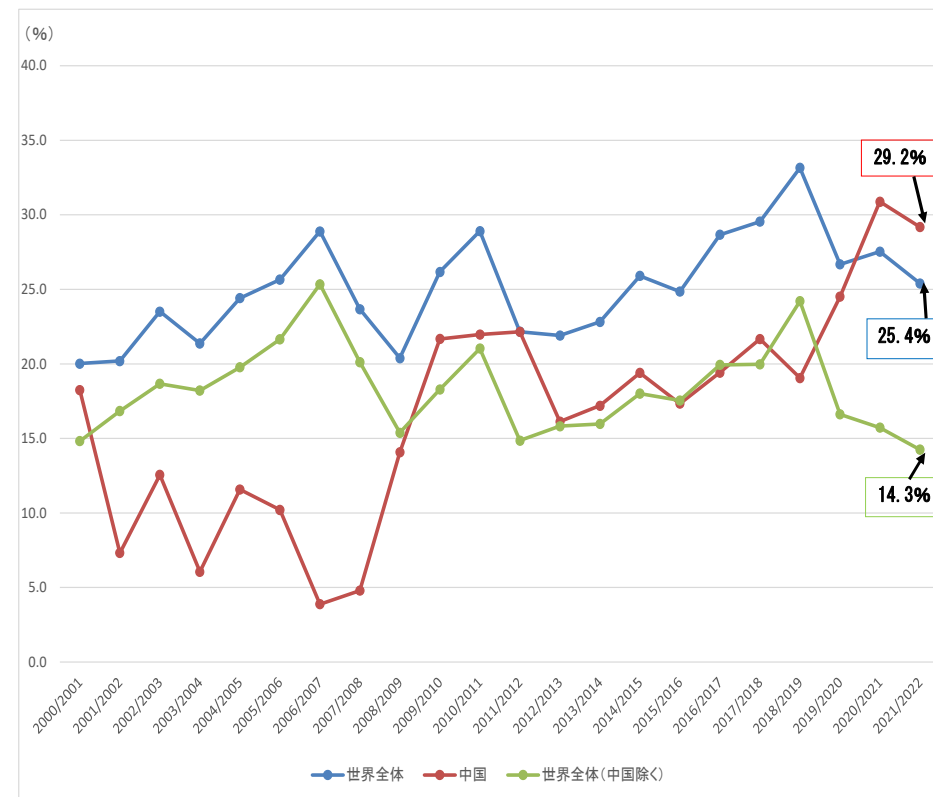
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

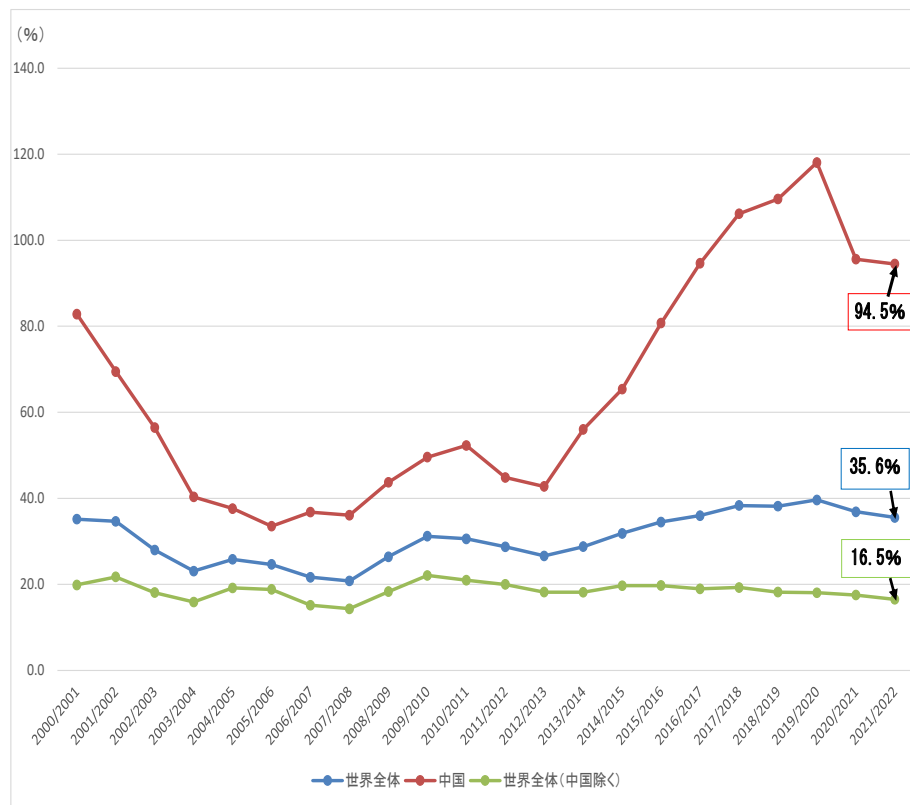
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

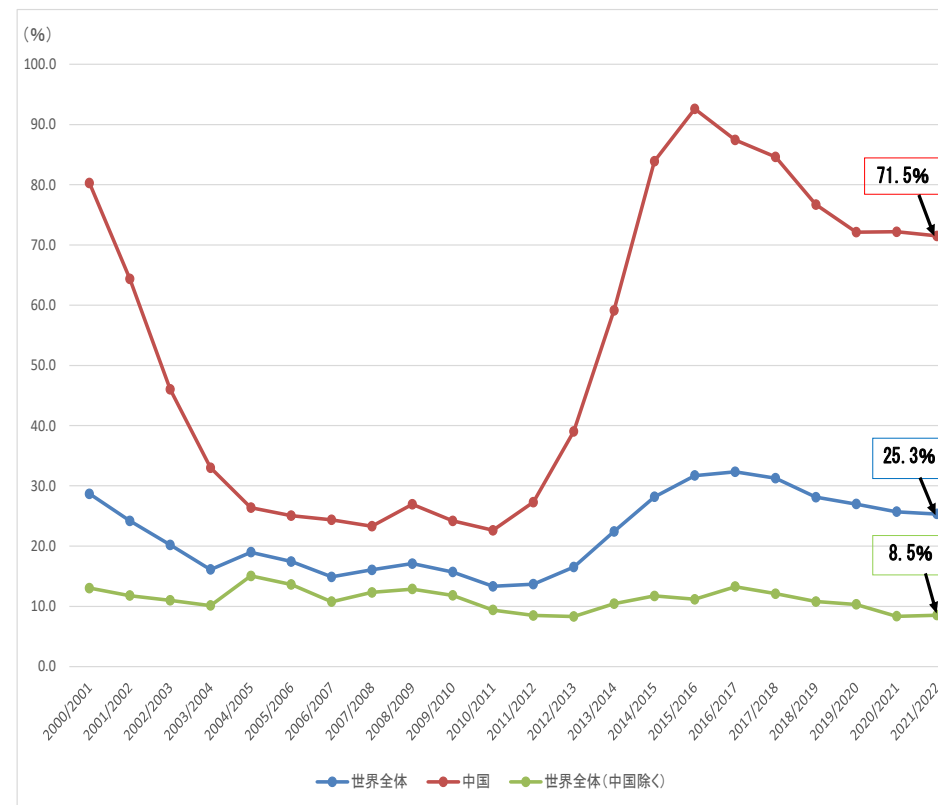
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2022)

注: 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

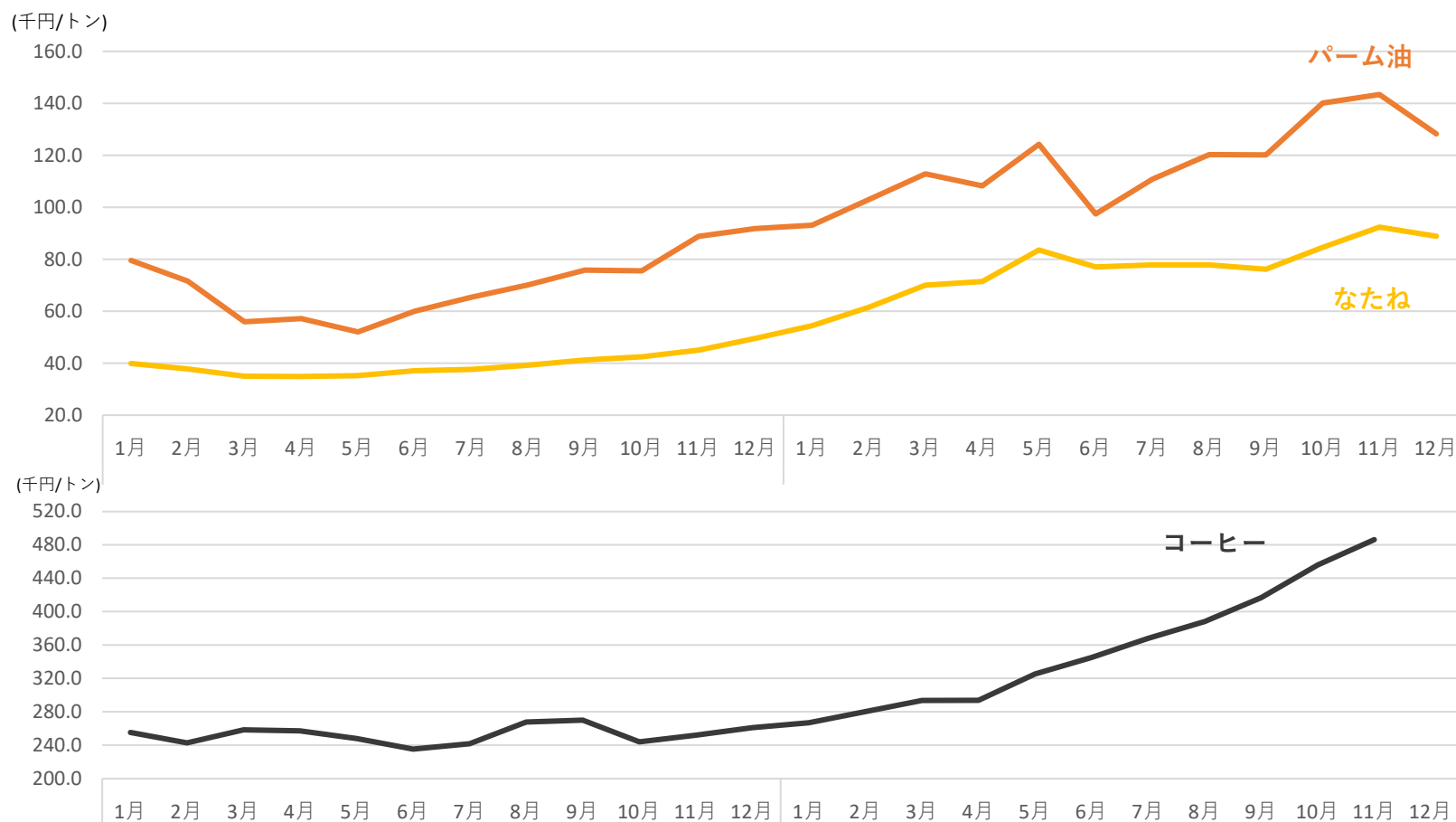
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年1月18日現在
□内は2020年1月以降の最高値。

パーム油
128.2千円/トン
143.4千円/トン
(2021.11)

なたね
88.8千円/トン
92.4千円/トン
(2021.11)

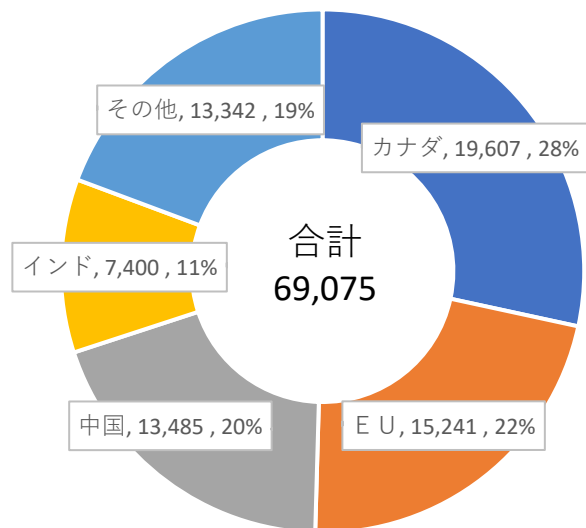
コーヒー
486.3千円/トン
486.3千円/トン
(2021.11)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

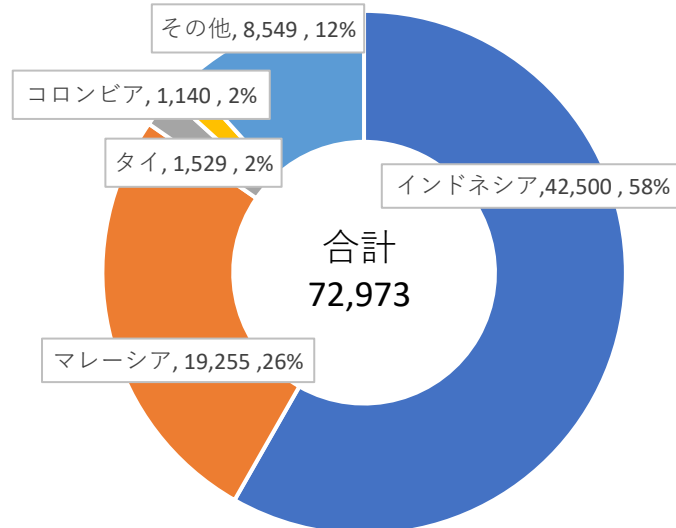
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



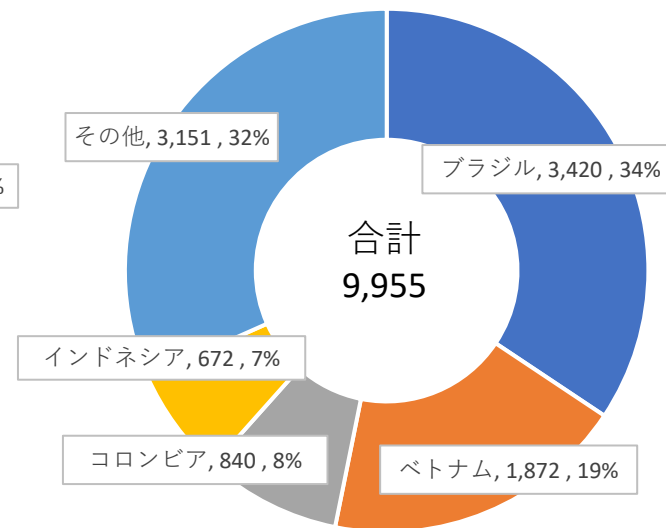
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	39.9	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8
前月比	103.9	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2
前年同月比	101.0	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	79.5	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2
前月比	105.5	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4
前年同月比	134.5	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	

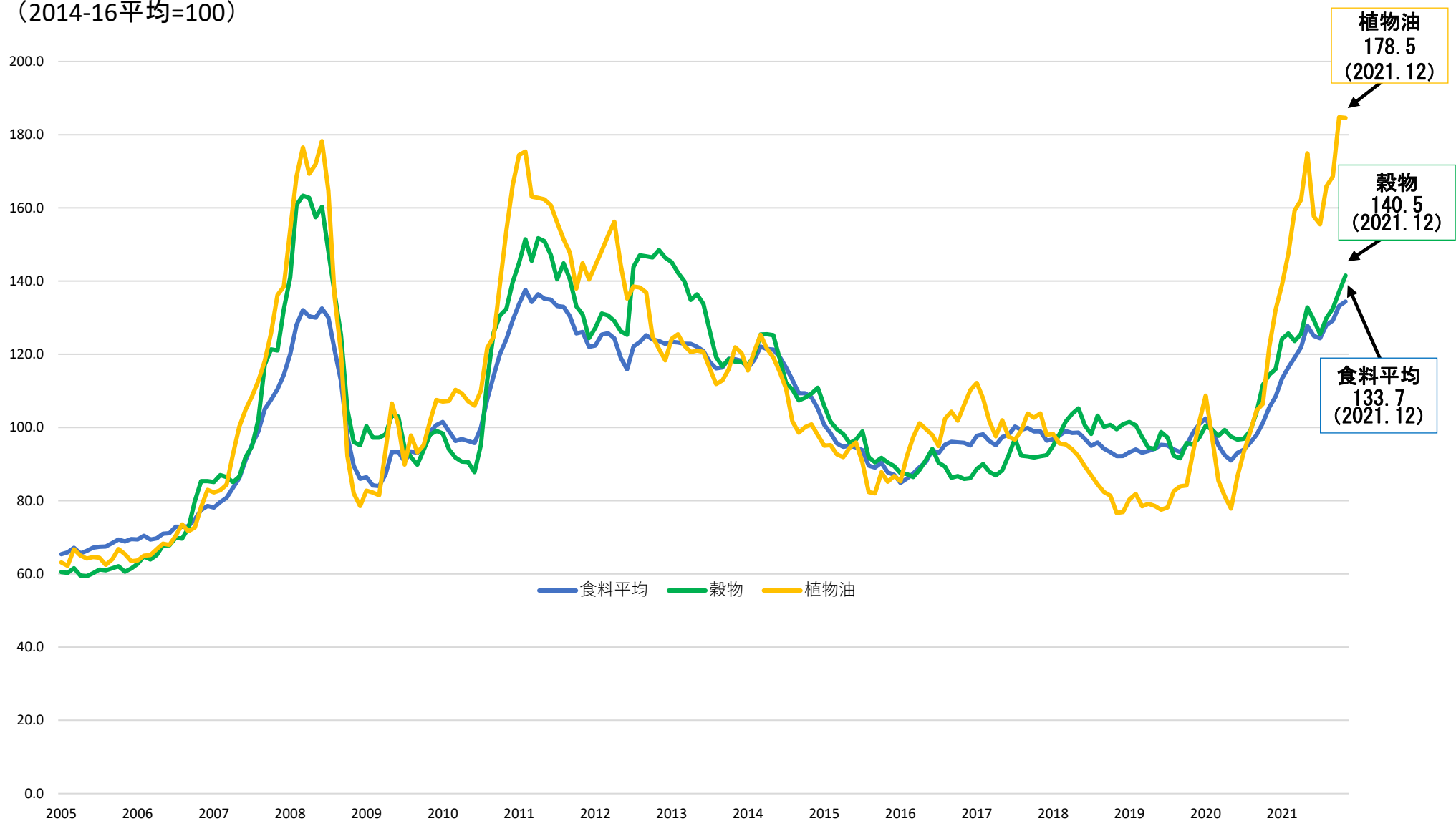
大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和3年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は95.3～121.6（前年同月比で－3.9%～22.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和3年7月～令和3年12月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.3	99.4	99.3	99.6	99.7	100.0	0.8%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	100.4	100.2	99.6	100.9	101.0	98.5	-0.4%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	101.0	100.8	101.6	102.0	102.6	102.5	1.6%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	103.9	107.9	113.9	118.1	120.5	121.6	22.8%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	99.5	98.9	100.0	99.2	99.6	97.6	-0.7%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	108.6	110.2	111.2	112.4	112.5	112.0	13.4%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	100.6	100.6	98.4	95.9	95.3	-3.9%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.8	99.9	99.9	99.8	99.9	0.0%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.1	100.1	100.4	100.7	101.0	100.9	1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和3年7月～令和4年1月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	97.8	97.5	98.8	98.6	98.2	98.4	102.1	3.8%	2.8%
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.0	99.0	99.0	99.0	99.0	97.8	98.4	0.6%	-0.6%
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	100.3	101.1	105.0	100.7	101.1	100.7	101.6	0.9%	1.8%
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	100.7	106.1	109.0	112.8	115.3	116.3	119.1	2.4%	21.3%
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	98.1	99.0	102.7	98.4	98.8	97.5	97.7	0.2%	-1.3%
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	104.5	105.9	106.6	106.6	106.6	105.6	105.9	0.3%	7.0%
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	99.5	99.1	103.0	98.6	93.6	92.1	98.6	7.1%	-1.4%
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.5	99.5	99.5	99.9	99.7	99.7	99.7	0.0%	-0.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2021/22 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・ブラジル等で下方修正も、アルゼンチン、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

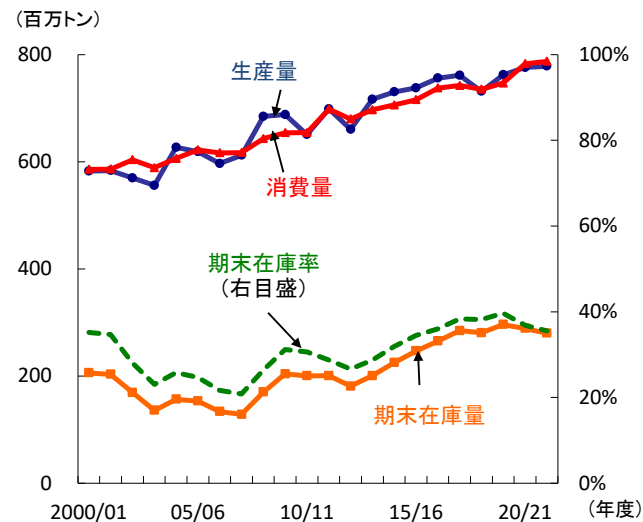
消費量 前年度比 前月比

- ・米国、EU、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正されたものの、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・EU 等で上方修正も、ロシア、米国等で下方修正され、前月から下方修正されたものの、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



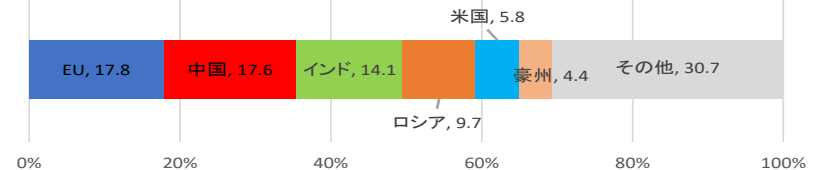
◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

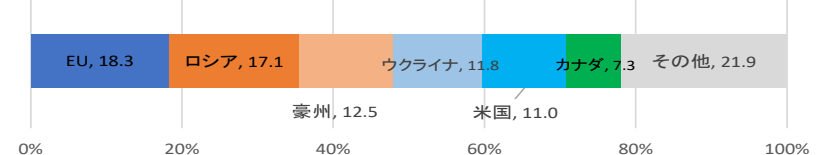
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	762.2	775.9	778.6	0.7	0.4
消 費 量	746.9	783.0	787.5	▲ 1.9	0.6
うち飼料用	139.2	157.7	159.6	▲ 1.0	1.2
輸 出 量	194.4	202.5	204.4	▲ 1.1	0.9
輸 入 量	188.2	194.0	202.6	▲ 0.4	4.4
期末在庫量	296.0	288.8	280.0	1.8	▲ 3.1
期末在庫率	39.6%	36.9%	35.6%	0.3	▲ 1.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 January 2022)

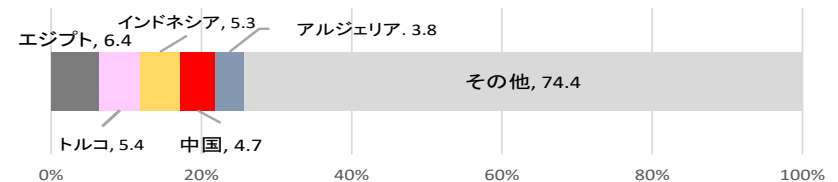
○ 2021/22年度の世界の小麦の生産量(778.6百万トン) (単位：%)



○ 2021/22年度の世界の小麦の輸出量(204.4百万トン)



○ 2021/22年度の世界の小麦の輸入量(202.6百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2022/23 年度の冬小麦の播種面積は前年度に比べ増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、44.8 百万トンの見込み。そのうち、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ 34.8 百万トン(対前年度比 9.0%増)、9.0 百万トン(同 43.6%減)、1.0 百万トン(同 46.1%減)である。

同「Winter Wheat and Canola Seeding」(2022.1.12)によれば、2022/23 年度の冬小麦の播種は、最近 5 年平均よりひと月早く 2021 年 9 月に開始され、11 月末にほぼ終了した。播種面積は前年度より 2%増加の 13.9 百万ヘクタールの見込み。秋期の高水準の小麦価格で小麦の播種が促進された。冬小麦の播種面積は、2021/20 年度に 111 年で最低の播種面積に落ち込んでから 2 年連続で上昇している。品種別の播種面積は、ハード・レッド・ウインター(HRW)が 9.6 百万ヘクタール(対前年度比 1%増)、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が 2.9 百万ヘクタール(同 6%増)、ホワイト・ウインターが 1.4 百万ヘクタール(同 2%増)等となっている。

生育状況は、1 月 11 日現在、冬小麦生産地の 69%で干ばつとなっている。「Crop Progress—State Stories」(2022.1.4)によれば、1 月 2 日時点で、カンザス州、オクラホマ州、ネブラスカ州、コロラド州等の 2022/21 年度の冬小麦主要生産地の生育条件は、11 月末の予想よりも悪化しており、作柄評価は、カンザス州では、良からやや良の割合が 33%(2021.11.29 時点 62%)、コロラド州 33%(同 48%)となっている。しかしながら、冬小麦にとっては、冬期の生育条件が生産量の主要な決定要素ではなく、春期の生育条件が単収に大きな影響を与える傾向がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、輸出量は、前月予測から 0.4 百万トン下方修正され、前年度に比べ 16.8%減少の 22.5 百万トンの見込み。米国産の価格が高く競争力が低いため、輸出が低調となった。特に HRW は、主要な小麦輸出国の小麦価格より割高なことから、前月から 0.4 百万トン減少の 9.1 百万トンの見込み。12 月の輸出先国(輸出検証高)は、メキシコが 0.3 百万トン(23.4%)、日本が 0.2 百万トン(18.7%)、ナイジェリアが 0.1 百万トン(13.6%)の順。

2021/22 年度の期末在庫量は、前月予測より 0.8 百万トン上方修正され 17.1 百万トンとなるものの、2013/14 年度以降最小の見込み。

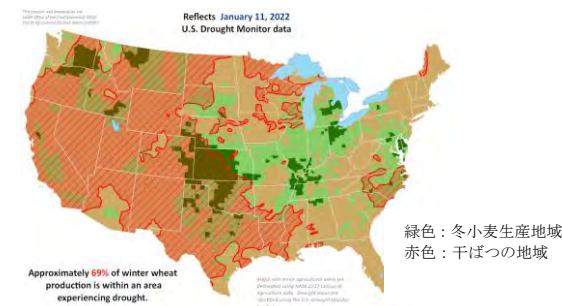
小麦—米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位: 百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	52.6	49.8	44.8	-	▲ 10.0
消費量	30.4	30.5	31.0	▲ 0.7	1.6
うち飼料用	2.6	2.6	3.0	▲ 0.7	15.0
輸出量	26.4	27.0	22.5	▲ 0.4	▲ 16.8
輸入量	2.8	2.7	2.7	▲ 0.3	▲ 0.4
期末在庫量	28.0	23.0	17.1	0.8	▲ 25.7
期末在庫率	49.3%	40.0%	32.0%	2.1	▲ 8.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.13	14.89	15.04	-	1.0
単収(t/ha)	3.47	3.34	2.98	-	▲ 10.8

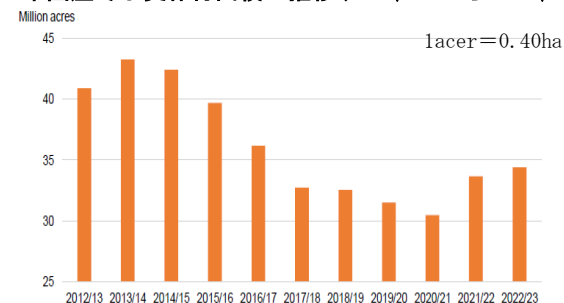
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 January 2022)

図 米国産冬小麦産地と干ばつ状況(1 月 11 日時点)



資料: USDA「U.S. Agriculture in Drought」(2022.1.11)

図 米国産冬小麦作付面積の推移(2012/13 から 2022/23)



資料: USDA「National Agricultural Statistics Service」

＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の播種面積は前年度に比べ増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 21.7 百万トンと、前年度に比べ 38.5%減少し、2008/09 年度以降最低水準。

カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook For Principal Field Crops」(2021.1.21)によれば、生産量は前月予測からの変更はなく 21.7 百万トンで、デュラム小麦は前年度から 60%減少の 2.7 百万トン、普通小麦は前年度から 34%減少の 19.0 百万トンの見込み。カナダ穀物委員会(CGC:Canadian Grain Commission)の 12 月 13 日までのサンプル調査の結果、品質は良好で、デュラム小麦の調査対象の 70%が 1 等から 2 等に格付けされ、平均タンパク質含有量は 15.7%(前年 13.9%)である。また、普通小麦も 90%が 1 等から 2 等に格付けされ、平均タンパク質含有量は 14.7%(同 13.3%)と最近 5 年平均を超えている。

また、2022/23 年度の播種面積は、前年度(9.49 百万ヘクタール)から 10.4%増加の 10.05 百万ヘクタール。生産量は前年度(21.7 百万トン)から 43.9%増加の 31.2 百万トンとなる見込み。そのうち、デュラム小麦は価格が高く、世界の需要も堅調であること等から播種面積は前年度から 9 %増加の 2.45 百万ヘクタール。干ばつで減少した単収が回復すると生産量は前年度(2.7 百万トン)の約 2 倍の 5.5 百万トンと最近 5 年平均並となる見込み。また、普通小麦も価格の高さや、在庫量の逼迫から、播種面積は前年度から 5 %増加の 7.60 百万ヘクタール。生産量は前年度から 35.0%増加し 25.6 百万トンと最近 5 年平均を上回る見込み。普通小麦のうち、春小麦の播種面積は前年度から 6 %増加し 7.05 百万ヘクタール、冬小麦は前年度から 1 %増加し 0.55 百万ヘクタール。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 15.0 百万トンの見込みで、2005/06 年度以降最低の見込み。CGC によれば、11 月の輸出量は普通小麦が 1.0 百万トン、デュラム小麦は 0.2 百万トンの計 1.2 百万トンで、輸出先国は、普通小麦は日本(16.8%)、インドネシア(15.1%)、コロンビア(13.9%)、デュラム小麦はモロッコ(31.8%)、イタリア(31.0%)、ベルギー(17.6%)の順。期末在庫量は 5.1 百万トンと 2013/14 年度以降最低の見込み。

現地情報によると、カナダ西部で発生した 11 月中旬の集中豪雨による物流障害では、普及が遅れていたカナディアン・ナショナル鉄道は 12 月 21 日に完全復旧した。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	32.7	35.2	21.7 (21.7)	-	▲ 38.5
消費量	9.3	9.1	7.9 (7.9)	-	▲ 13.5
うち飼料用	4.1	4.2	2.8 (3.8)	-	▲ 33.0
輸出量	24.6	26.4	15.0 (16.3)	-	▲ 43.2
輸入量	0.7	0.6	0.7 (0.3)	-	27.3
期末在庫量	5.5	5.7	5.1 (3.5)	-	▲ 9.7
期末在庫率	16.2%	16.0%	22.4% (14.2%)	-	6.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.66	10.02	9.25 (9.25)	-	▲ 7.7
単収(t/ha)	3.38	3.51	2.34 (2.34)	-	▲ 33.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 January 2021)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量、期末在庫量の推移

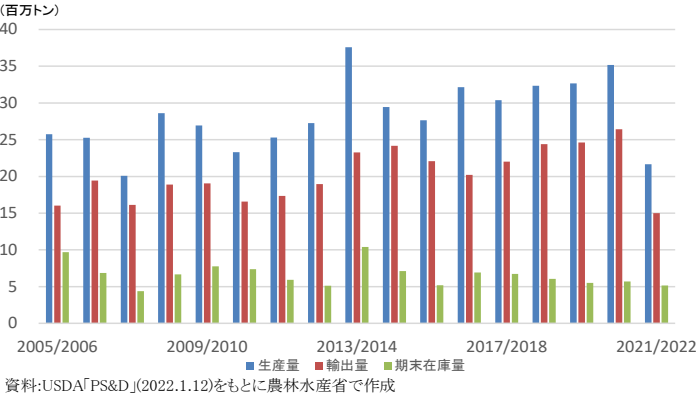


表 カナダ産普通小麦及びデュラム小麦の輸出先国(2021年11月)
＜普通小麦＞ ＜デュラム小麦＞

国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
日本	16.3	16.8	モロッコ	6.6	31.8
インドネシア	14.7	15.1	イタリア	6.4	31.0
コロンビア	13.5	13.9	ベルギー	3.6	17.6
フィリピン	6.9	7.1	チュニジア	1.9	9.2
ガーナ	6.0	6.2	インドネシア	0.7	3.2
その他	39.6	40.8	その他	1.5	7.2
	97.0	100.0	計	20.6	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2 普通小麦の品種はNo.1-3Canada Western Red Spring No.1Canada Western Red Winter
No.2Canada Eastern Red Spring No.2Canada Eastern Oter,デュラムはCanadaWestern Amber Durum Other
資料: Canadian Grain Commission 「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」をもとに作成。

< 豪州 > 2021/22 年度の生産量、輸出量は史上最高の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、史上最高の 34.0 百万トン。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2021.11.30)によれば、2021/22 年度の生産量は 2 年連続して過去最高を更新し、34.4 百万トンの見込み。主要生産州別の生産量は、西オーストラリア(WA)州は、前年度より 23%増加の 11.7 百万トンと史上最高の見込み。ニューサウスウェールズ(NSW)州では、生産量は前年度より 7%減少するものの、5年平均の約 2 倍の 12.2 百万トンの見込み。同州では、11 月に大雨が降り続き、収穫が遅れ、収穫時の品質が低下した。また、現地情報会社によれば、クイーンズランド州(QLD)、ビクトリア州(VIC)でも降雨で品質低下が生じている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、25.5 百万トンの見込み。2 年続きの豊作から、史上最高の見込み。

豪州統計局によれば、11 月の輸出量は、前月(1.5 百万トン)に比べ 1.6 百万トンと 9%増加。輸出先国は、中国(41.5%)、インドネシア(15.9%)、フィリピン(11.1%)の順。また、2021 年 1 月から 11 月の輸出先国はインドネシア(20.2%)、ベトナム(12.4%)、中国(9.8%)で、輸出先国の上位はアジア向けとなっている。11 月の中国向け輸出の割合は前月(17%)から大幅に増加したが、現地情報会社によれば、中国の豪州産小麦への輸入需要は、北米の減産と、中国が他地域産に比べ距離的に近い豪州産を選択し原油高等により増大した輸送コストを削減するためと見られている。また、北米の高品質小麦の減産により豪州産の需要が高まっているが、豪州産小麦は一部で品質が低下しており輸出機会は限定的と見られている。一方、飼料用小麦の需要が強いインドネシア、フィリピン、ベトナムでは低品質小麦の需要は高く、地理的に近い豪州は輸送コストが低く競争力が強い。なお、豪州産小麦は価格競争力があるものの、アフリカ、南アジア向け輸出は、地理的な要因から黒海周辺諸国や欧州諸国の輸出もあり輸出機会は限定的である。

本年度は収穫量が多いため、サプライチェーンの随所で物流問題が生じている模様。また、カナダ、米国の生産量の減少に伴う豪州産穀物への需要集中で港湾能力が追いつかない状況が続いており、輸出コストの上昇にも注視が必要である。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	14.5	33.3	34.0 (35.5)	-	2.1
消費量	8.0	8.0	8.5 (9.5)	-	6.3
うち飼料用	4.5	4.5	5.0 (5.7)	-	11.1
輸 出 量	9.1	23.9	25.5 (24.0)	-	6.9
輸 入 量	0.9	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	2.7	4.3	4.5 (6.6)	-	4.6
期末在庫率	15.6%	13.6%	13.3% (19.7%)	-	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	9.86	12.90	13.10 (13.0)	-	1.6
単収(t/ha)	1.47	2.58	2.60 (2.47)	-	0.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

写真 収穫の進む豪州(NSW 州)の圃場(2022. 1. 3)



12 月中旬から 3 週間乾燥した天候が続いたため、作業が進んだ。単収は想定を超える 6.5 トン/ha となり、収穫量が急増。NSW 州の殆どでは高単収となり収穫量が増加し、配送トラックが逼迫している。
なお、同州では、昨年 11 月の降雨後に収穫された小麦のうち 60%は、降雨のため飼料等級に格下げられとみられる。

表 豪州の小麦輸出先国別輸出量

(万トン)

2021年11月			2021年1月～11月		
国名	輸出量	シェア(%)	国名	累積輸出量	シェア(%)
中国	67.0	41.5	インドネシア	474.5	20.2
インドネシア	25.7	15.9	ベトナム	290.2	12.4
フィリピン	17.8	11.1	中国	229.0	9.8
マレーシア	11.3	7.0	フィリピン	190.0	8.1
ベトナム	7.1	4.4	日本	104.2	4.4
その他	32.6	20.2	その他	1057.5	45.1
合計	161.5	100.0	合計	2,345.4	100.0

資料: 豪州統計局のデータをもとに農林水産省で加工

< EU > 2021/22 年度の EU27 の飼料用消費量は前月に比べ減少する見込み

【生育・生産状況】EU 委員会「EU Cereals Production Area and Yield」(2021.12.16)によれば、2021/22 年度の EU27 ヶ国の生産量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、139.1 百万トン。

このうち、普通小麦は前月に比べ 0.2 百万トン上方修正され、131.6 百万トンとなり、前年度を 10.4%上回る見込み。国別には、フランス等で下方修正されたものの、デンマーク等で上方修正された。一方、デュラム小麦は、前月に比べ僅かに下方修正され 7.5 百万トンとなり、前年度を 1.1%上回る見込み。国別には、ポルトガル等で上方修正されたものの、ギリシャ等で下方修正された。また、英国環境・食料・農村地域省(DEFRA)「First estimates of 2021 UK wheat and barley production」(2021. 10.11)によれば、英国の 2021/22 年度の実産量は、14.0 百万トンの見込み。

この結果、EU27 ヶ国と英国の合計生産量は 153.1 百万トンとなる見込み。

冬小麦は、スペイン・イタリア等欧州南部を除く大部分において休眠期に入っている。12 月中旬まで欧州全体で乾燥した気候であったが、同月下旬以降はイベリア半島西部で、その後、欧州ほぼ全域で降雨・降雪があり、土壌水分量が補われた。他方、欧州全体で気温が高い状態が継続しており、スノーカバー(土壌を保温する効果がある積雪)が欧州北東部及びバルカン半島を除いて溶けてしまい、今後気温が低下すると冬枯れが発生する懸念がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の EU の飼料用小麦の消費量は、他の飼料用穀物に比べ相対的に小麦価格が高いことから前月に比べ 0.3 百万トン下方修正され、52.9 百万トンの見込み。輸出量は、前月予測に比べ 0.5 百万トン上方修正され、38.2 百万トンの見込み。輸出税の賦課や輸出枠設定によるロシアの輸出量の減少に伴い、ロシアの主要輸出国であるエジプト市場等では価格競争力のある EU が輸出を伸ばすと見られている。また、2021 年 5 月から 9 月まで実績のなかったフランスの中国向け輸出が、10 月から再開されている。1 月 10 日現在 EU の輸出価格(FOB)は、主要輸出先国であるアルジェリアの需要が予想を下回ったことから、12 月 6 日現在の 336 ドルから 17 ドル低下し 319 ドルとなった。アルジェリアは製粉用小麦の大半をフランスから輸入していたが、フランス産小麦の品質悪化により、ドイツ等に輸入先をシフトしていると見られる。

EU27 ヶ国の期末在庫量は、9.9 百万トンと 1999/00 年度以降最低の見込み。

小麦－EU (冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	154.4	136.6	153.2 (152.0)	0.2	12.2
消 費 量	122.5	118.2	123.0 (121.0)	▲ 0.3	4.0
うち飼料用	53.2	48.5	52.9 (48.8)	▲ 0.3	9.1
輸 出 量	41.4	30.2	38.2 (35.3)	0.5	26.5
輸 入 量	7.3	8.6	7.2 (7.2)	-	▲ 16.3
期末在庫量	15.6	12.4	11.6 (14.0)	▲ 0.0	▲ 6.1
期末在庫率	9.5%	8.3%	7.2% (9.0%)	▲ 0.1	▲ 1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	26.16	24.36	25.93 (25.49)	0.04	6.4
単収(t/ha)	5.90	5.61	5.91 (5.96)	0.23	5.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 January 2022)

IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

表内及び () 内のデータは EU27 ヶ国+英国のデータ

図 EU27 ヶ国の小麦生産量の推移(普通小麦、デュラム小麦)

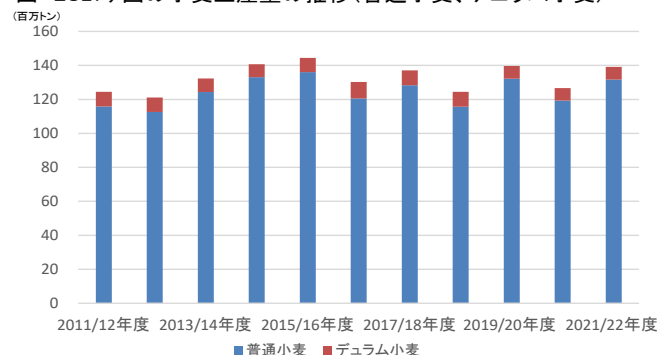


図 小麦主要輸出国の輸出価格(FOB)の推移



＜ 中国 ＞ 2021/22 年度の輸入量は前年度に比べ 23.3%減少する見込み

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.1.6)によれば、2021/22 年度の生産量は、播種面積予測が減少したため、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され 136.9 百万トンとなるものの、史上最高の見込み。作期別には、冬小麦が同 0.1 百万トン下方修正され 129.2 百万トン、春小麦はわずかに下方修正され 7.7 百万トン。

中国中央气象台(2022.1.5)によれば、2022/23 年度の冬小麦は、全国的に日照条件が良好、土壌水分量も適量であった。山西省等の河北地域、山東省等の華東地域、湖北省等の華中地域、四川省西南地域で、分けつ期から越冬期、陝西省等の西北地域で越冬期に入っている。中国糧油情報センター(2022.1.6)によれば、生育状況は、中国全土の冬小麦の 22%が一類苗(※)、78%が二類苗に格付けされている。前月同期に比べると、一類苗は 1 ポイント上昇し、二類苗は 1 ポイント低下した。なお、前年同時期は、一類苗は 20%、二類苗は 79%であった。

(※一類苗：生育が正常な苗、二類苗：通常の苗よりやや小さく弱っている苗)

中国農業農村部は、食料安全保障の観点から、食糧生産量を 6.5 億トン以上に安定させる目標を定めた。そのうち、小麦は 2025 年までに単位面積当たりの収量を引き上げることにより、生産量を 1.4 億トン以上にするとしている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、2021/22 年度の輸入量は前月予測からの変更はなく 8.0 百万トンで、前年度に比べ 23.3%減少する見込み。中国海関統計によれば、2021 年 1 月から 11 月の小麦輸入量は、前年同時期(7.3 百万トン)を 20.5%上回る 8.8 百万トン。同期間の輸入量は 7 月から 10 月にかけて減少傾向であったが、11 月に増加に転じた。また、輸入先国は、米国(31.0%)、カナダ(28.9%)、豪州(25.0%)の順で、この 3 カ国で全体の 84.9%を占めている。一方、10 月よりフランス産の輸入が再開されている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 11 月号」によれば、11 月の国内小麦価格は、歴史的な高値が続いている。今後、備蓄小麦の入替により供給量が増えるとともに、小麦粉の需要も減少に転じ、加工企業の稼働率が低下するため、国内小麦価格は高水準ではあるが、安定に向かうと見られる。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	133.6	134.3	137.0 (137.1)	-	2.0
消費量	126.0	150.0	148.5 (146.5)	-	▲ 1.0
うち飼料用	19.0	40.0	36.0 (33.4)	-	▲ 10.0
輸出量	1.1	0.8	0.9 (1.3)	-	18.4
輸入量	5.4	10.6	9.5 (10.6)	-	▲ 10.5
期末在庫量	150.0	144.1	141.2 (128.3)	-	▲ 2.0
期末在庫率	118.1%	95.6%	94.5% (86.8%)	-	▲ 1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.73	23.38	23.57 (23.8)	-	0.8
単収(t/ha)	5.63	5.74	5.81 (5.76)	-	1.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

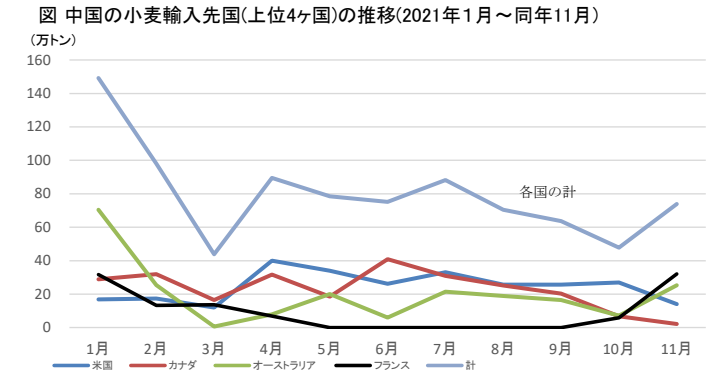


表 中国の小麦輸入先国(2021年11月、2021年1月～2021年11月、2020年1月～2020年11月)

2021年11月			2021年1月～2021年11月			2020年1月～2020年11月		
国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
フランス	32.1	43.4	米国	272.0	31.0	カナダ	212.2	29.2
豪州	25.2	34.1	カナダ	253.6	28.9	フランス	200.6	27.6
米国	14.1	19.1	豪州	219.8	25.0	米国	148.0	20.3
カナダ	2.2	2.9	フランス	103.4	11.8	豪州	108.2	14.9
カザフスタン	0.3	0.4	カザフスタン	18.3	2.1	リトアニア	33.3	4.6
その他	0.0	0.0	その他	6.6	0.8	その他	25.3	3.5
計	73.9	100.0	計	878.5	100	計	727.6	100.0

出典：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠 800 万トンを設定

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の生産量(クリミア分を含まない)は、前月予測からの変更はなく、75.5 百万トンと前年度に比べ 11.5%減の見込み。

ロシア農業省の速報値によれば、2022/23 年度の冬穀物の播種面積は、12 月 17 日時点で 18.4 百万ヘクタール(前年度比 4.4%減)。ロシア気象センターによれば、冬小麦は越冬期に入った。12 月に一時的に急激に気温が低下したが、スノーカバーにより影響はなかった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、可変輸出関税による輸出競争力の低下や輸出枠の設定により、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、35.0 百万トンの見込み。ロシア産小麦は、エジプト市場でウクライナ産や EU 産に代替される一方、2021 年に不作となったトルコ、イラン向けの輸出量は増加した。

なお、可変輸出関税額は、前年 7 月から 8 月にかけて低下し輸出を下支えしたが、8 月末から上昇を続け、12 月中旬には 90 ドル/トンを超えた。輸出量は、前年 8 月から 9 月にかけて 5.0 百万トン台まで増加したものの、10 月には 2.0 百万トン台に減少した。その後、11 月に輸出量は再び増加し 3.2 百万トンとなった。

ロシア政府は 12 月 31 日、穀物輸出関税を 3 段階の累進式にすると公表。算定方式は次の通り。

①第 1 段階：指標価格(※)が 1 トン当たり 200 ドルを超え 375 ドルまでの場合。

指標価格と 200 ドルの差に 70%の関税率を適用し税額を算出。

②第 2 段階：同価格が 1 トン当たり 375 ドルを超え 400 ドルまでの場合。

指標価格と 375 ドルの差に 80%の税率を適用した税額を①の税額に加算。

③第 3 段階は、同価格が 1 トン当たり 400 ドルを超えた場合。

指標価格と 400 ドルの差に 90%の税率を適用した税額を①及び②の税額に加算。

同時に、2022 年 2 月 15 日から 6 月 30 日までの小麦の輸出枠を 800 万トンとすると公表。なお、前年と同様にユーラシア経済同盟加盟国等への輸出は対象外で、輸出枠の設定は毎年実施するとされている。また、ロシア政府は 12 月 14 日、ロシア農業省と中国検疫当局が、中国におけるロシア産穀物(小麦と大麦)の輸入規制の緩和に向け協議を行うと明らかにした。

※指標価格：ロシア連邦農業省が毎週金曜日に前週の FOB(ノボロシスク港)価格の平均値として算出し、輸出関税額とともに公表

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	73.6	85.4	75.5 (75.0)	-	▲ 11.5	
消費量	40.0	42.5	41.8 (42.4)	-	▲ 1.8	
うち飼料用	17.0	19.0	18.5 (18.0)	-	▲ 2.6	
輸出量	34.5	39.1	35.0 (33.4)	▲ 1.0	▲ 10.5	
輸入量	0.3	0.4	0.5 (0.2)	-	25.0	
期末在庫量	7.2	11.4	10.6 (12.2)	0.4	▲ 6.6	
期末在庫率	9.7%	13.9%	13.9% (16.1%)	0.7	▲ 0.1	

(参考)

収穫面積(百万ha)	27.31	28.68	27.60 (28.0)	-	▲ 3.8
単収(t/ha)	2.70	2.98	2.74 (2.68)	-	▲ 8.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

図 ロシア産小麦の可変輸出関税額の推移(6月2日から1月19日)

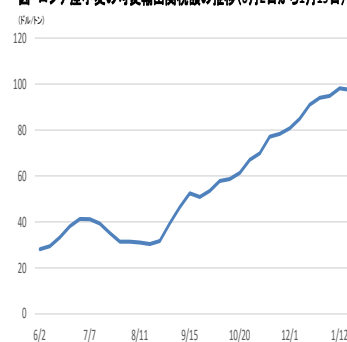
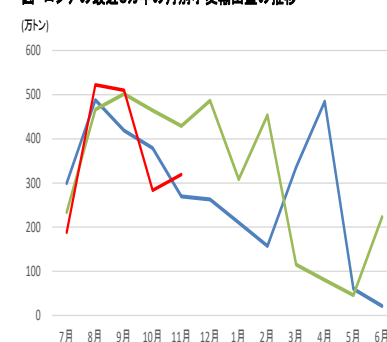


図 ロシアの最近3カ年の月別小麦輸出量の推移



資料：ロシア農業省の公表資料をもとに農林水産省で作成 資料：ロシア税関統計をもとに農林水産省で作成

新方式の穀物輸出関税額の具体例

例1 小麦の指標価格が390^Fの場合
第1段階分が122.5^F (375-200)*0.7=122.5
第2段階分が12^F (390-375)*0.8=12
の合計で輸出関税額は134.5^F/トとなる。
(現行の算定方式なら133^F)。

例2 小麦の指標価格が420^Fの場合
第1段階分が122.5^F
第2段階分が20^F
第3段階分が18^F (420-400)*0.9=18
の合計で、輸出関税額は160.5^F/トとなる
(現行の算定方式なら154^F)。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2021/22 年度

生産量 前年度比  前月比 

・ウクライナ、米国等で上方修正も、ブラジル、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

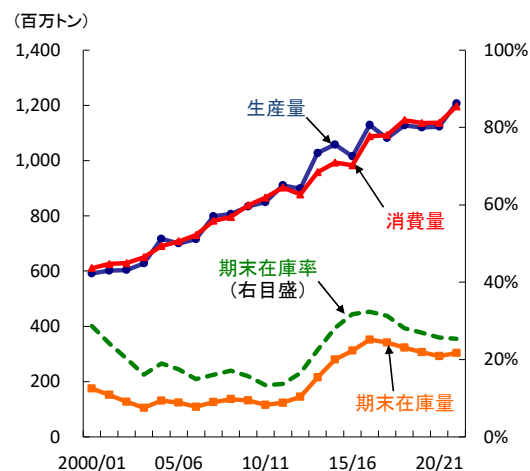
消費量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で下方修正も、米国、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ウクライナ等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2022. 1. 12）をもとに農林水産省にて作成

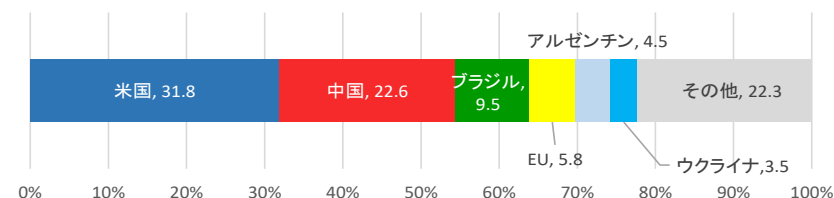
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

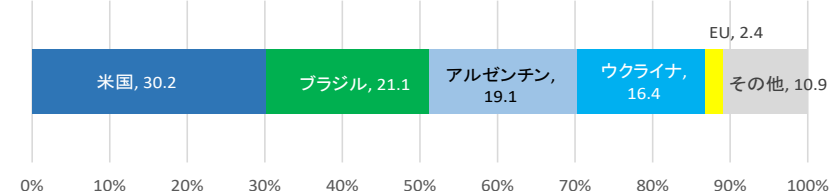
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	1,119.7	1,122.8	1,207.0	▲ 1.8	7.5
消費量	1,135.8	1,136.9	1,196.1	0.2	5.2
うち飼料用	715.8	722.9	751.1	0.3	3.9
輸出量	172.3	179.4	204.2	▲ 0.7	13.8
輸入量	167.8	186.3	186.8	1.4	0.3
期末在庫量	306.3	292.2	303.1	▲ 2.5	3.7
期末在庫率	27.0%	25.7%	25.3%	▲ 0.2	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 January 2022）

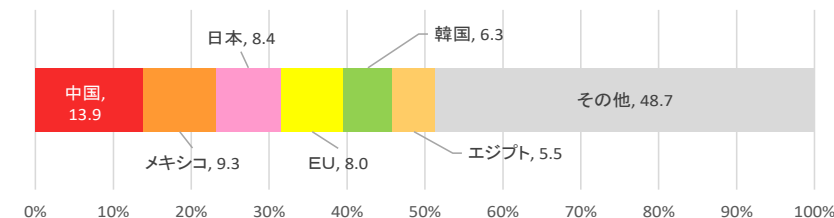
○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,207.0百万トン) (単位：%)



○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの輸出量(204.2百万トン)



○ 2021/22 年度 世界のとうもろこしの輸入量(186.8百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 生産量史上第2位、エタノール用需要増、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、史上最高の単収に加え、アイオワ州、インディアナ州等で収穫面積が上方修正されたことから前月予測から 1.4 百万トン上方修正され、前年度より 7.1%増の 383.9 百万トンと 2016/17 年度に次ぐ史上第2位の見込み。前年 11 月末時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要動向】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、主にエタノール用消費量の上方修正により前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度より 2.8%増の 315.2 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、ウクライナ、ブラジル及びアルゼンチンとの輸出競争激化の見通しにより前月予測から 1.9 百万トン下方修正され、史上最高の輸出量となった前年度より 11.9%減の 61.6 百万トンの見込み。前年度の輸出は中国向け大量輸出が中心であったが、2021/22年度は輸出先が広がり、特にメキシコとカナダの北米市場向けが拡大している。

USDAによれば、2021年輸出検証高(2021年1月7日～2022年1月6日)は、64.4 百万トンであり、内訳は中国(18.4 百万トン)、メキシコ(15.6 百万トン)、日本(11.3 百万トン)、コロンビア(3.9 百万トン)、韓国(3.2 百万トン)の順である。

USDAによれば、2021/22年度の期末在庫量は、消費量の上方修正は輸出量の下方向修正でほぼ相殺されたことから、主に生産量の上方修正により前月予測から 1.2 百万トン上方修正され、前年度より 24.7%増の 39.1 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 10.4%で依然として低水準の見込み。

とうもろこし—米国

(単位：百万トン)

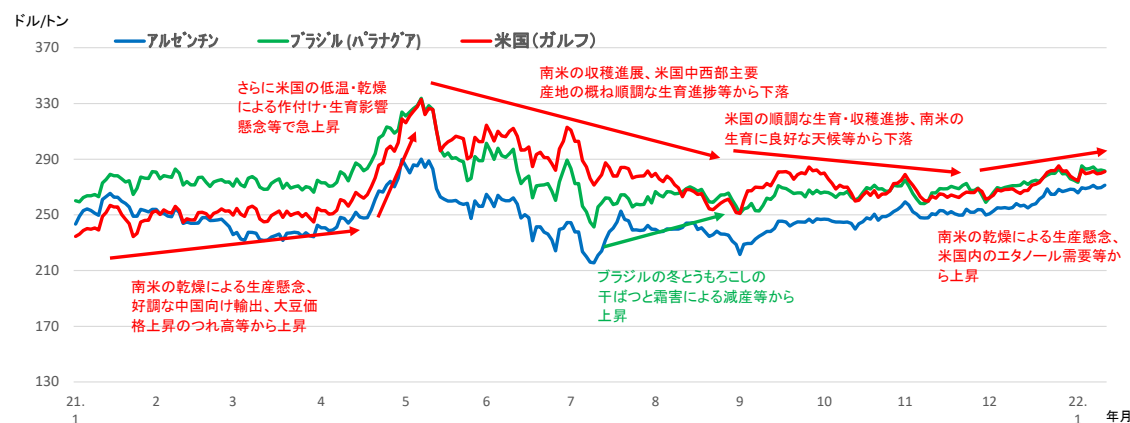
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	346.0	358.5	383.9	1.4	7.1
消費量	309.6	306.5	315.2	2.0	2.8
うち飼料用	149.9	142.3	143.5	-	0.9
エタノール用等	123.4	127.7	135.3	1.9	5.9
輸 出 量	45.1	69.9	61.6	▲ 1.9	▲ 11.9
輸 入 量	1.1	0.6	0.6	-	3.2
期末在庫量	48.8	31.4	39.1	1.2	24.7
期末在庫率	13.7%	8.3%	10.4%	0.3	2.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	32.92	33.31	34.56	0.13	3.8
単収(t/ha)	10.51	10.76	11.11	-	3.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前年11月から12月の南部の主要産地（パラナ州西部、リオ・グランデ・ド・スール州）の高温・乾燥の影響で生育中の夏とうもろこしの単収が下方修正されたことから前月予測から3.0百万トン下方修正されたものの、大豆収穫後、作付けされる冬とうもろこしの生産増見通しにより前年度より32.2%増の115.0百万トンとなり、史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.1.11）によれば、生育期を迎えた2021/22年度の夏とうもろこしの生産量は、南部産地で高温・乾燥の影響を受け前月予測から4.3百万トン下方修正されたものの、作付面積の増加により、前年度比0.3%増の24.8百万トンの見込み。一方、冬とうもろこしの生産量は、干ばつ・霜害の影響で大幅減産となった前年度に比べ41.4%増の88.1百万トンが見込まれ、合計では前年度比29.7%増の112.9百万トンで史上最高の見込み。（P.21 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部の主産地では1月上旬に降雨があったものの、高温・乾燥が続き、生育が悪化している。一方、1月中旬までブラジル中西部から北東部で広く降雨が継続し、この地域の生育は順調である。夏とうもろこしは、南部のパラナ州で1月10日現在、多くが充実段階、南部のリオ・グランデ・ド・スール州で1月13日現在、95%が作付け完了、開花から成熟段階が35%となっている。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より2.8%増の73.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、大幅減産となった前年度より2.2倍の43.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2021年12月の輸出量は3.4百万トンで、前年同月（4.8百万トン）に比べ、29.7%減。2021年1～12月の輸出量は20.4百万トンで、前年同期（34.4百万トン）と比べ40.7%減となっている。内訳は、1位がエジプト3.3百万トン、2位がイラン3.2百万トン、3位がスペイン2.1百万トンとなっている。

とうもろこし－ブラジル

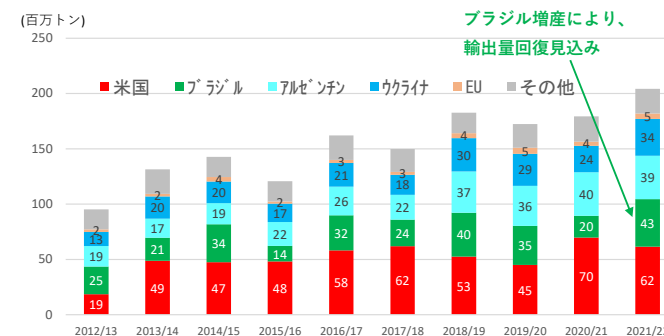
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	102.0	87.0	115.0	(112.9)	▲ 3.0	32.2
消 費 量	68.5	71.0	73.0	(74.1)	－	2.8
うち飼料用	58.5	60.0	62.0	(53.8)	－	3.3
輸 出 量	35.2	19.5	43.0	(39.0)	－	120.5
輸 入 量	1.7	3.5	2.0	(0.5)	0.3	▲ 42.9
期末在庫量	5.2	5.2	6.2	(6.4)	▲ 2.7	19.1
期末在庫率	5.0%	5.8%	5.4%	(5.7%)	▲ 2.3	▲ 0.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	18.50	19.90	20.80	(20.94)	－	4.5
単収(t/ha)	5.51	4.37	5.53	(5.39)	▲ 0.14	26.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022. 1. 12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、2021/22 年度の実産量は、前年 11 月から 12 月の主産地（サンタフェ州、エントレリオス州、ブエノスアイレス州北部）での高温・乾燥の影響で早植えとうもろこしの単収が下方修正されたことから前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、前年度より 6.9%増の 54.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.1.20）によれば、1 月中旬に降雨があったものの、早植えとうもろこしの作柄は悪化し続けている。作付進捗率は 88%で、過去 5 年平均より 6 ポイント遅れている。ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要である。

【需給状況】USDA によれば、2021/22 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 3.7%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度より 1.3%減の 39.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2021 年 1～11 月の輸出量は 37.8 百万トンで、前年同期（36.0 百万トン）より 4.7%増。内訳は、1 位がベトナム 6.2 百万トン、2 位が韓国 4.5 百万トン、3 位がエジプト 3.1 百万トン。前年 7 月 26 日に前年末まで 180 日間の渇水の緊急事態宣言が発令されたパラナ川の水位は、依然として低下傾向が続き、アルゼンチンの穀物等の輸出への影響に注視が必要である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣が 2021/22 年度のとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。同省プレスによれば、とうもろこしの輸出上限数量は 4,160 万トンで国内需給に影響しない量としている。

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの生育風景

（前年 12 月 31 日撮影）

前年 12 月の高温・乾燥の影響を受けたものの、
1 月上旬の降雨で成熟が進んでいる。

収穫は 3 月上旬の予定。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	51.0	50.5	54.0	(61.0)	▲ 0.5	6.9
消 費 量	13.5	13.5	14.0	(21.2)	▲ 0.5	3.7
うち飼料用	9.5	9.5	10.0	(16.3)	▲ 0.5	5.3
輸 出 量	36.3	39.5	39.0	(37.0)	-	▲ 1.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	3.6	1.1	2.1	(8.0)	▲ 0.5	90.2
期末在庫率	7.3%	2.1%	4.0%	(13.7%)	▲ 0.9	1.9
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.30	6.40	6.80	(8.30)	-	6.3
単収(t/ha)	8.10	7.89	7.94	(7.35)	▲ 0.07	0.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC 「Grain Market Report」(13 January 2022)



< 中国 > 生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、大豆から収益性の良いとうもろこしの作付けにシフトしたことで収穫面積が増加したことから、前年度より4.6%増の272.6百万トンと史上最高の見込み。前年11月上旬時点で、収穫は終了。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より3.2%増の294.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より11.9%減の26.0百万トンの見込み。なお、2020/21年度の輸入量は、29.5百万トンと史上最高の見込み。

中国の貿易統計によれば、2021年1～11月の輸入量は27.0百万トンで、前年同期の3.0倍となり、前年の年間輸入量の2.4倍。内訳は、米国産19.6百万トン（72%）、ウクライナ産7.3百万トン（27%）で、前年同期はウクライナ産が58%を占めたが、米国産の輸入が大幅に増加している。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報11月号」によると、11月の国内流通価格は、東北地区での11月中下旬のみぞれ天候により、物流に支障が生じたこと、養豚利益の回復により豚飼育頭数が上昇し、とうもろこし消費需要が向上したこと、とうもろこし加工業者の黒字転換で、稼働率が向上し、一時的な供給不足となったことで、2,880元/トンと前月（2,740元/トン）から上昇し、前年より高水準で推移した。一方、11月の外国産価格は2,560元/トンと前月（2,600元/トン）から下落した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

とうもろこしー中国

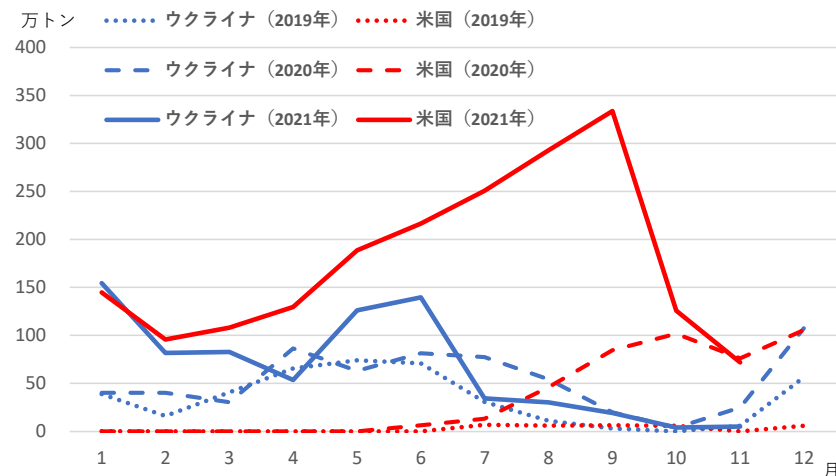
(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.8	260.7	272.6 (272.6)	-	4.6	
消 費 量	278.0	285.0	294.0 (293.2)	-	3.2	
うち飼料用	193.0	203.0	214.0 (191.0)	-	5.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	7.6	29.5	26.0 (16.5)	-	▲ 11.9	
期末在庫量	200.5	205.7	210.2 (190.2)	-	2.2	
期末在庫率	72.1%	72.2%	71.5% (64.8%)	-	▲ 0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.28	41.26	43.32 (43.32)	-	5.0	
単収(t/ha)	6.32	6.32	6.29 (6.29)	-	▲ 0.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)

IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：中国におけるウクライナ・米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2021/22 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正されたことから前月から下方修正されたものの史上最高の見込み。

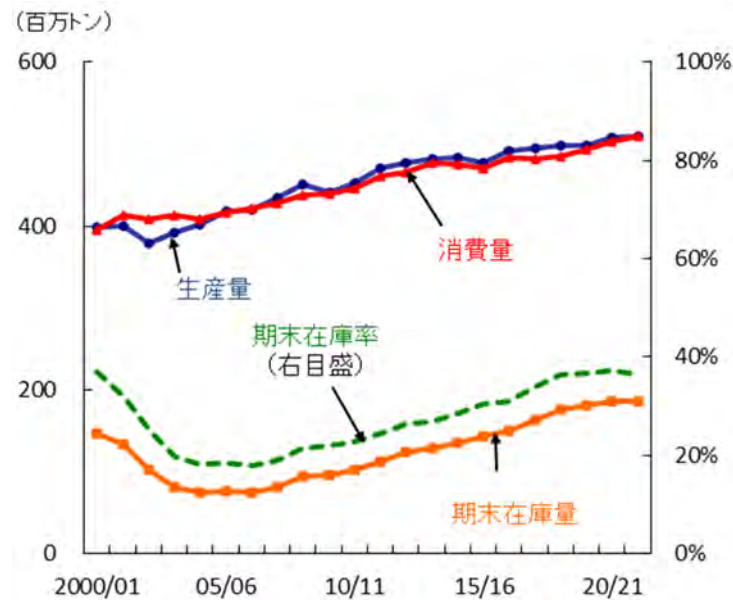
消費量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正されたことから前月から下方修正されたものの史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・インド等で上方修正されたことから前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2022.1.12）をもとに農林水産省にて作成

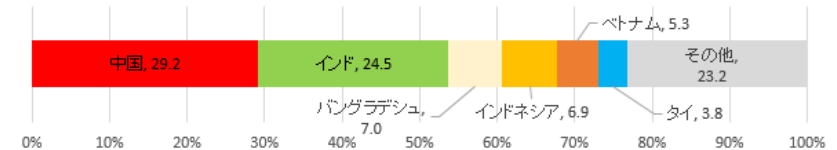
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

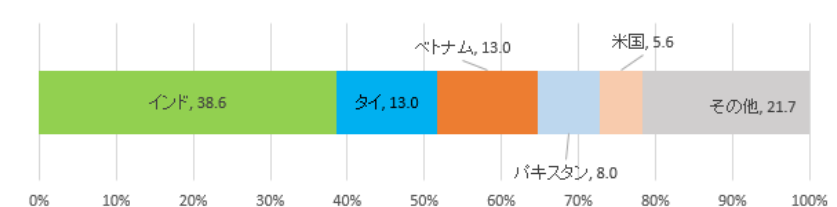
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	498.8	507.2	509.9	▲ 0.9	0.5
消費量	493.7	502.5	510.3	▲ 0.6	1.6
輸出量	43.4	50.3	49.9	0.1	▲ 0.9
輸入量	42.4	46.3	48.6	0.8	5.0
期末在庫量	181.7	186.5	186.1	▲ 0.7	▲ 0.2
期末在庫率	36.8%	37.1%	36.5%	▲ 0.1	▲ 0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2022)

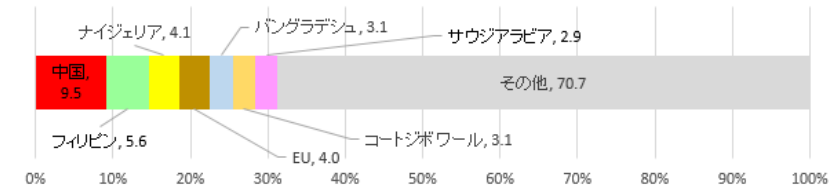
○ 2021/22年度 世界のコメの生産量(509.9百万トン)(単位：%)



○ 2021/22年度 世界のコメの輸出量(49.9百万トン)



○ 2021/22年度 世界のコメの輸入量(48.6百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 前月から下方修正されるも単収は史上最高

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、1月12日に公表（USDA「Crop Production 2021 Summary」）された収穫面積や単収に基づき、前月予測から下方修正され、対前年度比15.7%減の6.1百万トンの見込み。なお、単収は8.64もみトン/ヘクタールとなり史上最高。中・短粒種の生産量はコメ全体の約25%を占める。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量や輸入量の減少見込みから0.1百万トン下方修正され、対前年度比4.7%減の4.6百万トンの見込み。

2021/22年度の輸出量は、11月の船積みのペースが予測していたよりも遅かったこと等により、前月予測からわずかに下方修正され、対前年度比6.4%減の2.8百万トンの見込み。

2021/22年度の輸入量は、歴史的な高値の海上運賃や世界的なコンテナ不足、その他供給網の混乱により、想定よりも遅いペースで輸入が行われていることから、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比9.3%減の1.0百万トンの見込み。

2021/22年度の期末在庫量は、消費量が下方修正された一方で、生産量と輸入量も下方修正されたことから、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比24.5%減の1.1百万トンの見込み。

同「Rice Outlook」（2022.1.14）によれば、1月11日までの週の地中海向けカリフォルニア米（1等、砕米4%混入、国内精米）の価格は、2021年12月7日までの週より75ドル上昇し、2009年6月以来の高値となる1,200ドル/トン。1月11日までの週のイラク向け長粒種（2等、砕米4%混入）の価格については、2021年12月7日までの週から5ドル上昇し、605ドル/トン（P18の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは約25%
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

(単位: 百万精米トン)

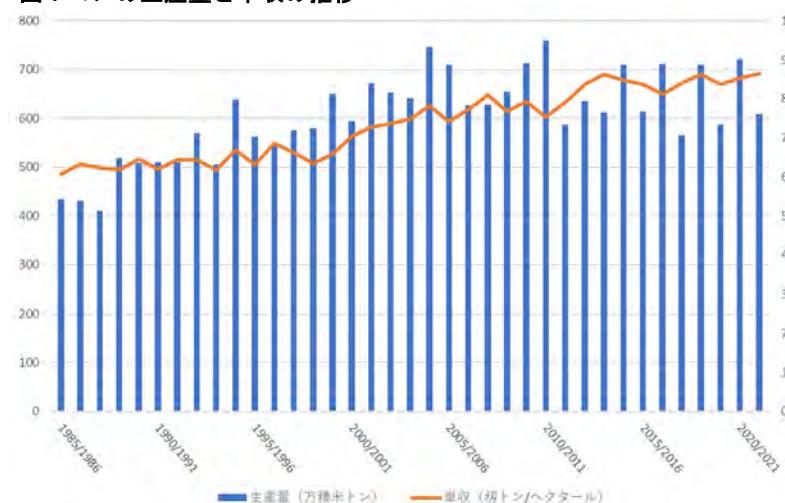
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	5.9	7.2	6.1	▲ 0.1	▲ 15.7
消費量	4.6	4.9	4.6	▲ 0.1	▲ 4.7
輸出量	3.0	3.0	2.8	▲ 0.0	▲ 6.4
輸入量	1.2	1.1	1.0	▲ 0.1	▲ 9.3
期末在庫量	0.9	1.4	1.1	▲ 0.1	▲ 24.5
期末在庫率	12.0%	17.8%	14.2%	▲ 0.5	▲ 3.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.00	1.21	1.01	-	▲ 16.5
単収(もみt/ha)	8.38	8.54	8.64	▲ 0.06	1.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)

図: コメの生産量と単収の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.1.12)をもとに農林水産省にて作成

< インド > 2021/22 年度の輸出量が上方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.2%増の 125.0 百万トンで史上最高の見込み。

インド農業農民福祉省「Minutes of the meetings of CWWG as on 31.12.2021」（2021.12.31）によれば、ラビ作は例年 425 万ヘクタールほど作付されており、12 月 31 日時点のラビ作の作付済み面積は、前月時点より 43.1 万ヘクタール増加し、140.5 万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 3.5%増の 103.5 百万トンで史上最高の見込み。2021/22年度の輸出量は、2022 年も引き続きインド産米の価格競争力の高さが継続するとの見込みから、中国やベトナム、サブサハラ・アフリカ諸国等への輸出が続くとの予測により、0.3 百万トン上方修正され、対前年度比 4.6%減も 2 年連続で高水準の 19.3 百万トンの見込み。世界シェアの約 4 割を占める。2020/21 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 62%増の 20.2 百万となり史上最高となる見込み。2021/22 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、対前年度比 6.3%増の 38.3 百万トンで史上最高の見込み。なお、インドの期末在庫量は世界全体の約 2 割を占める見通し。

インド商務省の輸出量データによれば、2021 年 4 月～10 月の累積輸出量は 1,179.3 万トンであり、輸出量の多い国の上位はバングラデシュ（147.5 万トン）、中国（74.4 万トン）、ベナン（72.0 万トン）になっている。

USDA「Rice Outlook」（2022.1.14）によれば、インド産米（碎米 5 %混入）の 1 月 11 日までの週の価格は、12 月 7 日までの週より 5 ドル上昇して 345 ドル/トンとなったが、アジアの主要輸出国である、タイやベトナム産より低価格なパキスタンの同時期の同等クラスの輸出価格 365 ドル/トンと比較しても、引き続いてアジアの中で最も競争力のある価格になっている（P18 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメーインド

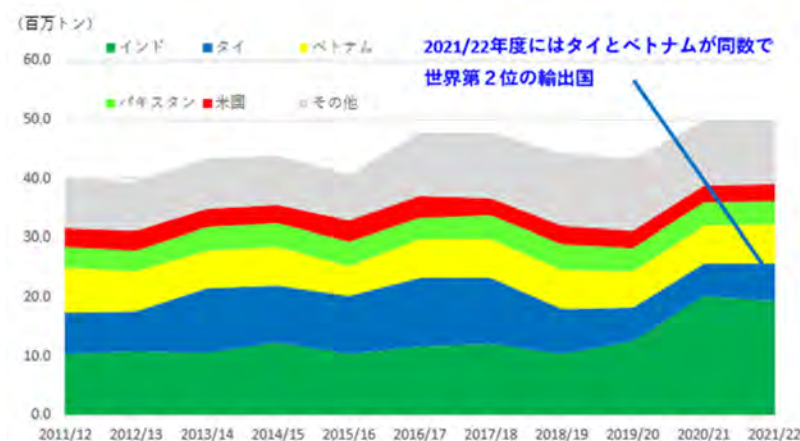
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	118.9	122.3	125.0 (124.5)	-	2.2	
消 費 量	102.0	100.0	103.5 (104.0)	-	3.5	
輸 出 量	12.5	20.2	19.3 (17.8)	0.3	▲ 4.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	33.9	36.0	38.3 (38.8)	▲ 0.3	6.3	
期末在庫率	29.6%	30.0%	31.2% (31.8%)	▲ 0.3	1.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.66	45.00	45.50 (45.75)	-	1.1	
単収(もみt/ha)	4.08	4.08	4.12 (2.72)	-	1.0	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.1.12)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > インドからの碎米輸入が急増

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.5%増の149.0百万トンで史上最高の見込み。

中国国家糧油情報センター（2022.1.6）の2021年の全国のコメ生産データ（もみベース）によれば、2021年の生産量は11年連続で200百万トンを超えて対前年比0.5%増の212.8百万トンになっている。作付面積は299.2百万ヘクタールで対前年比0.5%減少した。単収は、7.11kg/ヘクタールで対前年比1.0%増となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比2.9%増の154.9百万トンで史上最高の見込み。2021/22年度の輸入量は、11月にミャンマーとの貿易が再開されたことによる輸入の増加やインドからの碎米の輸入が継続されるとの予測により、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対前年度比2.2%増の4.6百万トンの見込み。2021/22年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比3.0%減の113.0百万トンの見込み。なお、中国の期末在庫量は世界の約6割を占める見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.1.12）によれば、中国がインドからの碎米輸入を急増させている。中国は歴史的に大半のコメをベトナムやミャンマーなどの東南アジア諸国から輸入しており、これまではインドから年間5万トン以上のコメを輸入していなかったところ、2021年には100万トン輸入した。輸入した碎米は、主に飼料用、米を原料とした酒類製造及び菓子類に使用される。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 11月号」によれば、11月、主産地で政府備蓄買付が始まり、稲もみ市場の売買ペースが速まったことから、稲もみ価格の下落傾向が収まりインディカもみ価格は安定した。供給は充分であり需要が低迷しているため、早稲インディカ米価格は安定し、晩稲インディカ米価格は下落した。一方、東北地方がみぞれ天候にみまわれ、物流の支障による一時的な供給不足からジャポニカもみ価格が上昇したことで、ジャポニカ米価格はやや上昇した。2021年11月の全国平均品種別米卸売価格は、早稲インディカ米は3,800元/トン（前月同）、晩稲インディカ米4,060元/トン（前月より1.9%下落）、一期作ジャポニカ米4,000元/トン（前月より2.0%上昇）になっている。

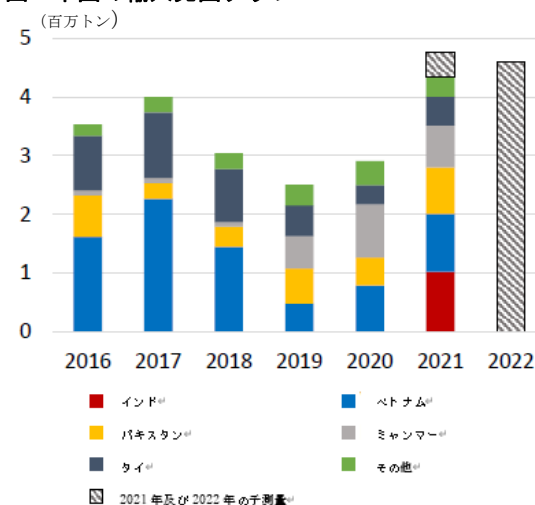
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22 (単位: 百万精米トン)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	146.7	148.3	149.0 (149.5)	-	0.5	
消 費 量	145.2	150.6	154.9 (150.5)	-	2.9	
輸 出 量	2.6	2.2	2.2 (2.6)	0.1	▲ 0.9	
輸 入 量	2.6	4.5	4.6 (3.7)	0.1	2.2	
期末在庫量	116.5	116.5	113.0 (109.5)	-	▲ 3.0	
期末在庫率	78.8%	76.2%	71.9% (71.6%)	▲ 0.0	▲ 4.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	29.69	30.08	29.92 (30.00)	-	▲ 0.5	
単収(もみt/ha)	7.06	7.04	7.11 (4.98)	-	1.0	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図: 中国の輸入先国グラフ



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2022.1.12)

< タイ > 2020/21 年度の輸出量が上方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22 年度(2022 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.3%増の 19.3 百万トンの見込み。2020/21 年度(2021 年 1 月～同年 12 月)の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 6.8%増の 18.9 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 10.2%増の 6.5 百万トンとなることでベトナムの輸出量(6.5 百万トン)と並び、インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。2020/21 年度の輸出量は、11 月に予想よりも早いペースで船積みが進んだことやサブサハラ・アフリカ地域、イラク及び中国等への輸出が伸びたことで 0.2 百万トン上方修正され、対前年度比 3.5%増の 5.9 百万トンになる見通し。

タイ米輸出業協会は、2021 年 12 月に約 70 万トン輸出出来ると発表し、2021 年の年間輸出量が 600～610 万トンとなる見込みで、僅かながら目標としていた年間輸出量の 600 万トンを達成出来るとみている。

同協会によれば、2021 年 1 月から 10 月までの輸出量は、前年同期比 12.8%減少の 459.1 万トン。輸出先国は、南アフリカ(64.1 万トン)、米国(43.6 万トン)、中国(43.0 万トン)の順となっている。

USDA「Rice Outlook」(2022.1.14)によれば、1 月 10 日までの週のタイ産米(長粒、2 等丸米)の輸出価格は、輸出先国の休暇期間中の需要低迷をバツ高が補ったことで前月からほぼ横ばいとなり、12 月 6 日の週の価格より 2 ドル高い 397 ドル/トンとなっている(P18 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	17.7	18.9	19.3	(19.3)	-	2.3
消 費 量	12.3	12.7	13.0	(11.9)	-	2.4
輸 出 量	5.7	5.9	6.5	(7.7)	-	10.2
輸 入 量	0.3	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	4.0	4.4	4.4	(6.7)	▲ 0.2	-
期末在庫率	22.1%	23.9%	22.8%	(34.0%)	▲ 1.0	▲ 1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.89	10.51	10.40	(10.40)	-	▲ 1.0
単収(もみt/ha)	2.70	2.72	2.81	(1.86)	-	3.3

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

写真: タイ中部のナコンパトム県での乾季米栽培風景



この圃場では、乾季作の播種から 11 日後にあたる 12 月 21 日に除草剤の散布作業が行われた。

< ベトナム > 生産量や輸出量などが上方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2020/21年度(2021年1月～同年12月)の生産量は、台風による洪水が引き起こした塩害により収穫面積が下方修正された一方で、単収が史上最高に上方修正されたことにより、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対前年度比1.1%増の27.4百万トンの見込み。2021/22年度(2022年1月～同年12月)の生産量は、収穫面積が前月予測より下方修正される一方で、単収が上方修正されたことで、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対前年度比0.7%減の27.2百万トンの見込み。ベトナムの農家では、土壌の塩分濃度上昇や水の供給量の減少を理由に、コメ作から他の作物や非農業用途への転換が進んでいる。

ベトナム農業・農村開発省によれば、2021年の総生産量は43.9百万もみトンの見込みであり、内訳は冬春作が20.6百万もみトン(47.0%)、夏秋作が15.2百万もみトン(34.6%)、ムア作(雨季作)が8.1百万もみトン(18.4%)になる見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、2021/22年度の豊作見通しによる豊富な供給量により、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対前年度比4.0%増の6.5百万トンの見込み。2020/21年度の輸出量は、2021年にフィリピンや中国への船積みが見込みより早いペースで進んだことにより、前月予測からわずかに上方修正され、対前年度比1.6%増の6.3百万トンの見込み。2021/22年度の輸入量は、2022年も引き続いてベトナムがインドからコメを輸入するとの見込みにより、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対前年度比66.7%減の0.6百万トンの見込み。なお、2020/21年度にベトナムが例外的に大量のコメを輸入したことで、2021/22年度の対前年度比は大幅に減少している。

USDA「Rice Outlook」(2022.1.14)によれば、ベトナム産米(長粒種、5%碎米混入)の1月11日までの週の価格は、輸出先国の休暇時期における需要の低迷により、12月7日までの週より10ドル下落し、400ドル/トンとなっている。ベトナム産米の価格は、同じグレードや品質の競合するアジア諸国のコメの中で最も高くなっている。

ベトナム税関総局によれば、2021年1月～11月の輸出量は578万トンであり、そのうちジャポニカ米は対前年同期比33.0%減の15.2万トンになっている。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位:百万精米トン)

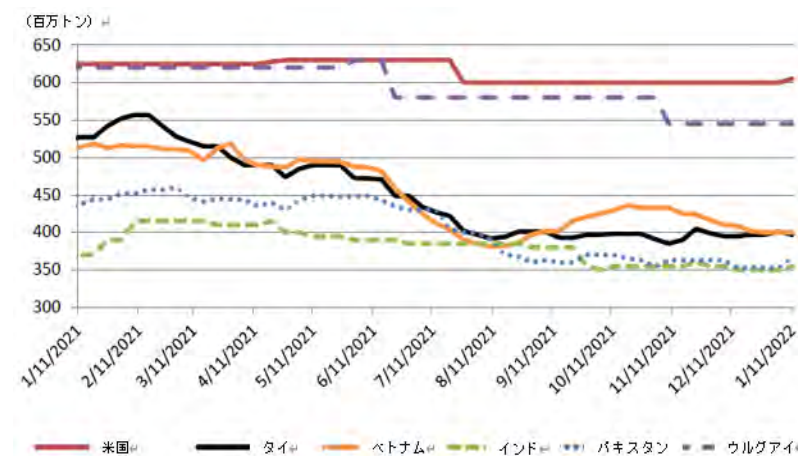
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.1	27.4	27.2 (28.3)	0.1	▲ 0.7	
消 費 量	21.3	21.5	21.5 (23.1)	0.1	0.2	
輸 出 量	6.2	6.3	6.5 (6.4)	0.1	4.0	
輸 入 量	0.4	1.8	0.6 (1.0)	0.1	▲ 66.7	
期末在庫量	1.2	2.7	2.5 (3.1)	0.1	▲ 7.5	
期末在庫率	4.3%	9.6%	8.8% (10.4%)	0.2	▲ 0.8	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.38	7.31	7.30 (7.45)	▲ 0.05	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	5.88	6.00	5.96 (3.80)	0.06	▲ 0.7

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022) (単収は精米t/ha)

図: 長粒種の FOB 価格の推移 (ベトナム産とタイ産の価格が同程度)



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2022.1.12)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2021/22 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル、アルゼンチン、パラグアイで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

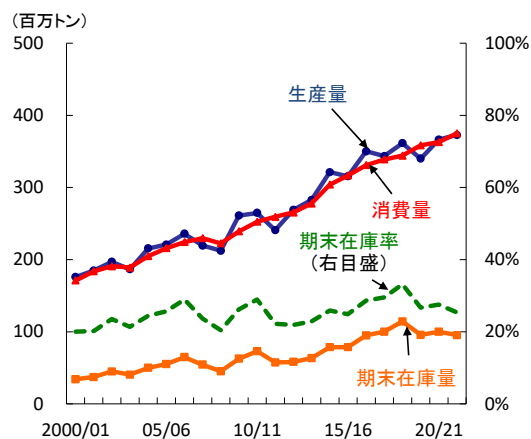
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・パラグアイ、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.1.12）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

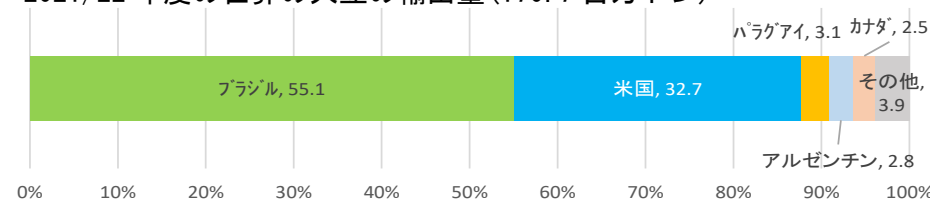
年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	339.9	366.2	372.6	▲ 9.2	1.7
消 費 量	358.4	362.8	374.9	▲ 2.1	3.3
うち搾油用	312.4	315.6	325.7	▲ 2.0	3.2
輸 出 量	165.1	164.7	170.7	▲ 1.6	3.6
輸 入 量	165.0	165.6	168.4	▲ 1.3	1.7
期末在庫量	95.6	99.9	95.2	▲ 6.8	▲ 4.7
期末在庫率	26.7%	27.5%	25.4%	▲ 1.7	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 January 2022）

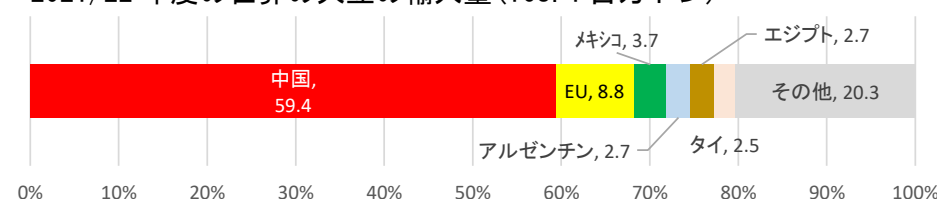
○ 2021/22 年度の世界の大豆の生産量 (372.6 百万トン) (単位：%)



○ 2021/22 年度の世界の大豆の輸出货量 (170.7 百万トン)



○ 2021/22 年度の世界の大豆の輸入量 (168.4 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は史上最高、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、収穫面積がわずかに下方修正されたものの、アイオワ州、インディアナ州で単収が上方修正されたことから前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度より5.2%増の120.7百万トンと史上最高の見込み。なお、単収は2016/17年度に次ぐ史上第2位となっている。前年11月末時点で、収穫は例年並みのペースでほぼ終了した。

【需要動向】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からわずかに上方修正され、前年度より3.1%増の62.8百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、史上最高の輸出量となった前年度より9.5%減の55.8百万トンの見込み。

USDAによれば、2021年輸出検証高(2021年1月7日～2022年1月6日)は、51.0百万トンであり、内訳は中国(27.3百万トン)、メキシコ(4.6百万トン)、エジプト(2.9百万トン)、日本(2.0百万トン)、インドネシア(1.9百万トン)の順。

USDAによれば、2021/22年度の期末在庫量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度より36.2%増の9.5百万トンの見込み。期末在庫率は8.0%で依然として低水準の見込み。

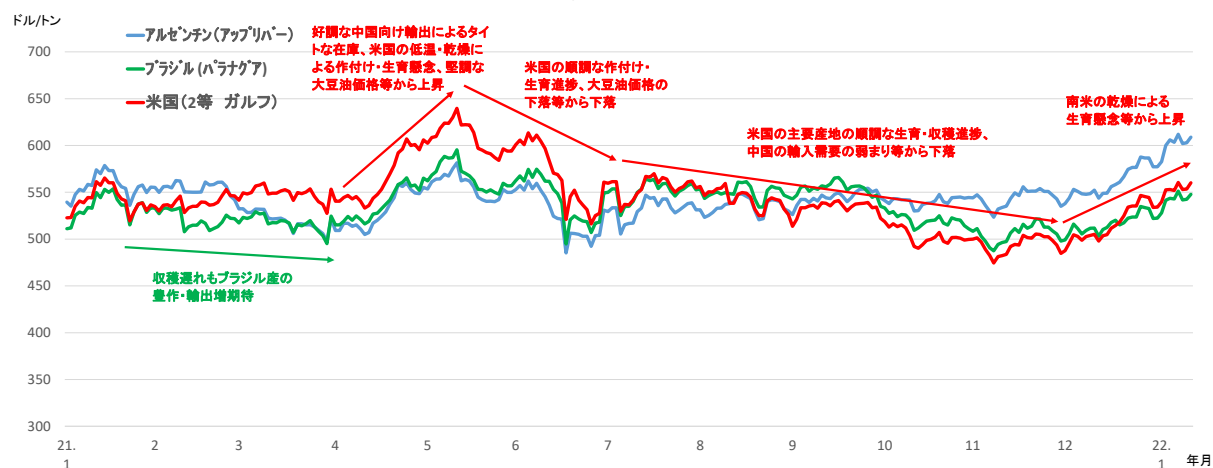
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	96.7	114.8	120.7	0.3	5.2
消 費 量	61.9	60.9	62.8	0.0	3.1
うち搾油用	58.9	58.3	59.6	-	2.3
輸 出 量	45.7	61.7	55.8	-	▲ 9.5
輸 入 量	0.4	0.5	0.4	-	▲ 24.1
期末在庫量	14.3	7.0	9.5	0.3	36.2
期末在庫率	13.3%	5.7%	8.0%	0.2	2.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.33	33.43	34.94	▲ 0.04	4.5
単収(t/ha)	3.19	3.43	3.45	0.01	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前年12月の南部での高温・乾燥の影響で生育中の大豆の単収が下方修正されたことから前月予測から5.0百万トン下方修正されたものの、前年度より0.7%増の139.0百万トンで史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.1.11)によれば、2021/22年度の生産量は、南部で高温・乾燥の影響を受け前月予測から2.3百万トン下方修正されたものの、前年度より2.3%増の140.5百万トンで史上最高の見込み。

南部では1月上旬に降雨があったものの、高温・乾燥が続き、生育が悪化している。一方、1月中旬までブラジル中西部から北東部で広く降雨が継続し、この地域の生育は順調である。最大生産州である中西部マット・グロッソ州では1月14日現在、収穫率は4%となっている。南部のパラナ州では1月10日現在、収穫率は2%となっている。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から搾油用消費量が0.5百万トン下方修正されたものの、前年度より0.9%増の49.9百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度より15.1%増の94.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2021年12月の輸出量は2.7百万トンで、前年同月(0.3百万トン)に比べ9.9倍。うち、2.1百万トン(77%)が中国向け。2021年1～12月の輸出量は86.1百万トンで、前年同期(83.0百万トン)に比べ3.8%増となっている。内訳は、1位が中国で前年並みの60.5百万トン、2位がスペインで3.6百万トン、3位がオランダで2.9百万トンとなっている。

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022年2月以降大豆の収穫が行われ、その後、一部圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2021/22年度	2021年												2022年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												作付 4.5(百万ha)								
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 20.9百万ha												作付 16.4(百万ha)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												作付 40.4(百万ha)								
													収穫 140.5(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート(2022.1.11)

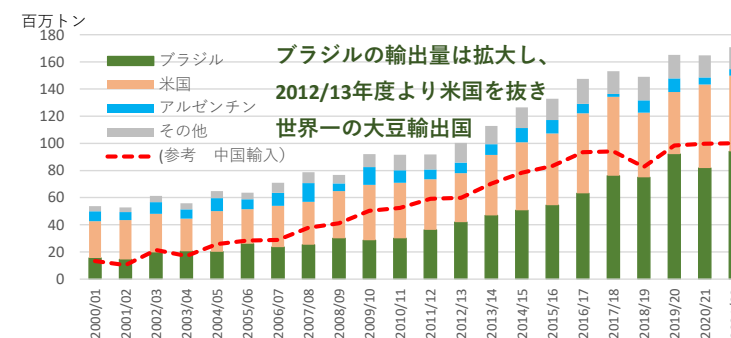
大豆ーブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	128.5	138.0	139.0 (137.0)	▲ 5.0	0.7	
消 費 量	49.4	49.4	49.9 (47.7)	▲ 0.5	0.9	
うち搾油用	46.7	46.8	47.2 (45.1)	▲ 0.5	1.0	
輸 出 量	92.1	81.7	94.0 (89.7)	-	15.1	
輸 入 量	0.6	1.0	0.5 (0.3)	▲ 0.2	▲ 55.9	
期末在庫量	20.0	28.0	23.6 (3.3)	▲ 4.7	▲ 15.7	
期末在庫率	14.1%	21.3%	16.4% (2.4%)	▲ 3.2	▲ 5.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	36.90	38.90	40.40 (40.50)	-	3.9	
単収(t/ha)	3.48	3.55	3.44 (3.38)	▲ 0.12	▲ 3.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：世界の大豆輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.1.12)のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 高温・乾燥で収穫面積・単収下方修正、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前年12月の主産地での高温・乾燥の影響で収穫面積及び単収が下方修正されたことから前月予測から3.0百万トン下方修正されたものの、前年度より0.6%増の46.5百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.1.20）によれば、長引く乾燥で一部では再作付けされている。1月中旬に降雨はあったものの、順調な生育にはさらなる降雨が必要。作付進捗率は95%で、過去5年平均より4ポイント遅れている。ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要である。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から0.8百万トン下方修正されたものの、前年度より2.5%増の48.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度より6.6%減の4.9百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2021年1～11月の輸出量は5.4百万トンで、前年同期（6.8百万トン）より21.0%減。内訳は、1位が中国374万トン、2位がエジプト60万トンとなっている。前年7月26日に前年末まで180日間の渇水の緊急事態宣言が発令されたパラナ川の水位は、依然として低下傾向が続き、アルゼンチンの穀物等の輸出への影響に注視が必要である。

アルゼンチンは、大豆輸出量よりも、搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定し、現在も継続中。

写真：北部サンタフェ州の大豆の生育風景

（前年12月31日撮影）

前年12月の高温・乾燥の影響で草丈が低い状況。

1月上旬の降雨で開花期を迎える大豆の生育が促される見通し。

収穫は4月上旬の予定。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	48.8	46.2	46.5 (44.0)	▲ 3.0	0.6	
消 費 量	45.9	47.4	48.6 (47.3)	▲ 0.8	2.5	
うち搾油用	38.8	40.2	41.2 (41.0)	▲ 0.8	2.6	
輸 出 量	10.0	5.2	4.9 (5.5)	▲ 0.5	▲ 6.6	
輸 入 量	4.9	4.8	4.5 (4.8)	▲ 0.3	▲ 6.6	
期末在庫量	26.7	25.1	22.6 (3.9)	▲ 2.0	▲ 9.8	
期末在庫率	47.7%	47.6%	42.3% (7.4%)	▲ 2.6	▲ 5.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.70	16.47	16.20 (16.25)	▲ 0.20	▲ 1.6	
単収(t/ha)	2.92	2.81	2.87 (2.71)	▲ 0.15	2.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 January 2022)

IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)



< 中国 > 収穫面積の減少で減産見通し、輸入量は史上最高の1億トン

【生産・生育状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収益性の高いとうもろこし等への作付けのシフトにより収穫面積が減少したことから、前年度より16.3%減の16.4百万トンの見込み。

前年11月上旬時点で、収穫は終了。

【需給動向】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な搾油用需要から前年度より4.6%増の116.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸入量は、前月予測から変更はなく、前年度より0.2%増の100.0百万トンで史上最高の見込み。

中国の貿易統計によれば、2021年1～11月の輸入量は87.7百万トンと、前年同期比で5.5%減。内訳は、ブラジル産56.0百万トン（64%）、米国産26.2百万トン（30%）。なお、11月の輸入量は8.6百万トンで、前年同月（9.6百万トン）より10.6%減。ブラジル産が3.8百万トン、米国産が3.6百万トンとほぼ拮抗した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報11月号」によると、11月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、東北地区での11月中下旬のみぞれ天候で、物流に支障が発生し、農家の売り惜しみにより、前月（6,140元/トン）から上昇し、6,440元/トンで高水準である。ただし、大豆価格が比較的高いため、流通業者や加工工場は仕入れに消極的で、今後、国内大豆価格の上昇の余地は限られているとみられている。一方、11月の国際価格（山東省の輸入大豆価格）は4,260元/トンと前月（4,540元/トン）から下落した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

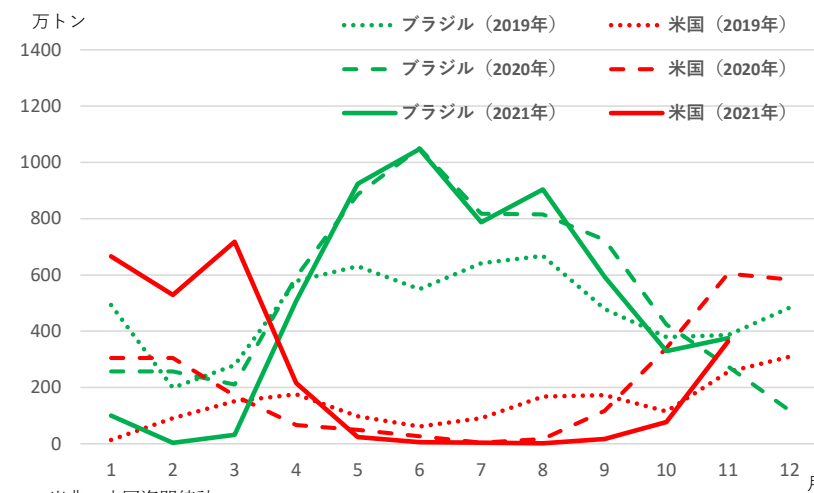
大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.1	19.6	16.4 (16.4)	-	▲ 16.3	
消 費 量	109.2	111.6	116.7 (117.7)	-	4.6	
うち搾油用	91.5	93.0	97.0 (99.1)	-	4.3	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9	
輸 入 量	98.5	99.8	100.0 (98.5)	-	0.2	
期末在庫量	26.8	34.5	34.1 (28.9)	-	▲ 1.2	
期末在庫率	24.5%	30.9%	29.2% (24.5%)	-	▲ 1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.33	9.88	8.40 (8.40)	-	▲ 15.0	
単収(t/ha)	1.94	1.98	1.95 (1.95)	-	▲ 1.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2022)
IGC「Grain Market Report」(13 January 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

＜ カナダ ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、生育期間の西部カナダでの乾燥の影響による単収の減少に伴い、前年度より1.4%減の6.3百万トンの見込み。前年11月末時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.1.21)によれば、今後作付けされる2022/23年度の実産量は、カナダ西部では土壌水分不足の懸念や小麦等の競合作物も価格が魅力的なことから作付面積の増加は抑えられるものの、高い大豆価格に支えられ、主産地のカナダ東部を中心に作付面積が増加し、前年度より4.4%増の6.6百万トンの見込み。

【需給状況】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.2%減の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より7.6%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2021年11月の輸出量は170.0万トンで、国別では、オランダ(22.6万トン)、アルジェリア(18.5万トン)、イラン(17.2万トン)、スペイン(16.3万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22			
			予測値、()はAAFC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	6.4	6.3	(6.3)	－	▲ 1.4
消 費 量	2.6	2.7	2.5	(2.3)	－	▲ 4.2
うち搾油用	1.8	1.6	1.8	(1.8)	－	6.6
輸 出 量	3.9	4.5	4.2	(4.2)	－	▲ 7.6
輸 入 量	0.3	0.5	0.5	(0.4)	－	▲ 3.1
期末在庫量	0.6	0.3	0.3	(0.5)	－	8.2
期末在庫率	9.6%	4.1%	4.7%	(6.9%)	－	0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.27	2.04	2.13	(2.14)	－	4.4
単収(t/ha)	2.71	3.12	2.94	(2.93)	－	▲ 5.8

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 January 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 January 2022)

(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2021/22年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	21年6月～22年5月	21年9月～22年8月	21年8月～22年7月	21年9月～22年8月
カナダ	21年8月～22年7月			21年8月～22年7月
豪州	21年10月～22年9月		22年3月～23年2月	
EU	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月		
中国	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月
ロシア	21年7月～22年6月	21年10月～22年9月		21年9月～22年8月
ブラジル		22年3月～23年2月	22年4月～23年3月	21年10月～22年9月
アルゼンチン	21年12月～22年11月	22年3月～23年2月		21年10月～22年9月
タイ			22年1月～12月	
インド	21年4月～22年3月		21年10月～22年9月	
ベトナム			22年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2021/22年度は、米国の小麦では2021年6月～2022年5月、ブラジルのとうもろこしでは2022年3月～2023年2月です。

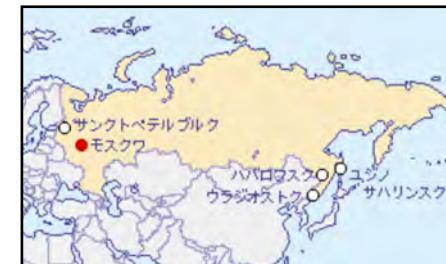
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

第7号特別分析トピック：ロシアの農産物貿易とコロナ感染拡大の影響

ロシアの農林水産概況

- 人口は、1億4573万人（2018年）。国土の大半が亜寒帯及び寒帯に属する。
- モスクワのある中央連邦管区の東南隣と南隣の沿ボルガ連邦管区及び南部連邦管区は、ロシアの穀物生産量の約6割を占める穀物地帯。
- 主要農産物は、小麦・大麦等の穀物、てん菜、ばれいしょ、ひまわりの種等。



・主要農産物の生産状況

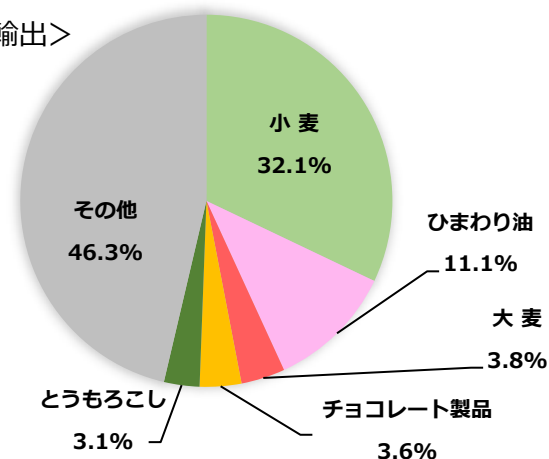
(単位：万トン)

	2015	2016	2017	2018	2019
小麦	6,179	7,335	8,600	7,214	7,445
てん菜	3,903	5,132	5,191	4,207	5,435
ばれいしょ	3,365	2,246	2,171	2,239	2,207
大麦	1,755	1,797	2,063	1,699	2,049
ひまわりの種	928	1,102	1,048	1,276	1,538
牛乳	3,052	2,953	2,992	3,034	3,109

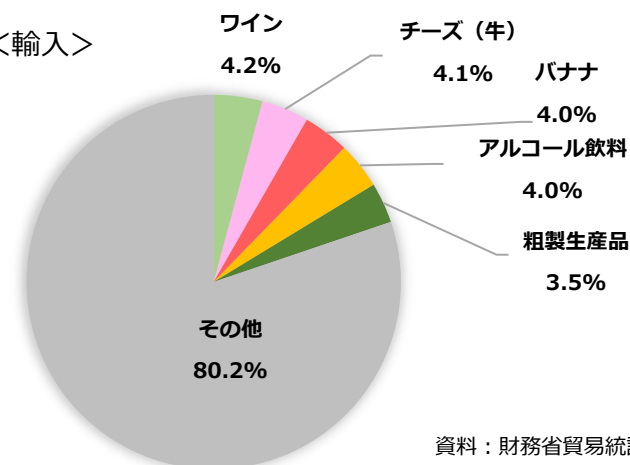
資料：FAO統計

・農林水産物貿易の概況

<輸出>



<輸入>

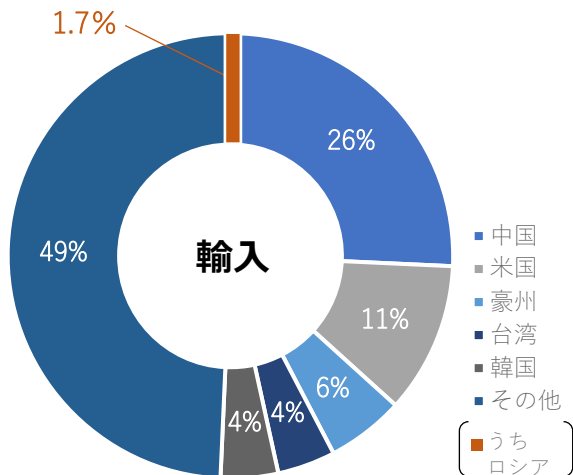
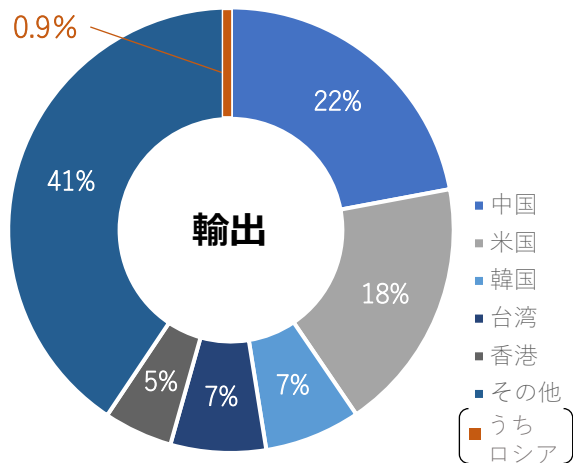


資料：財務省貿易統計

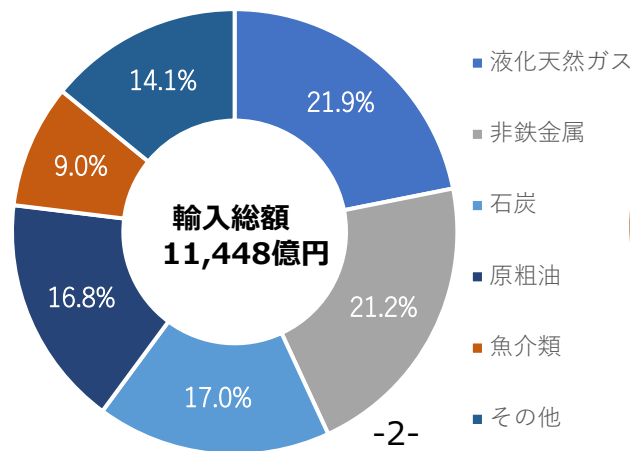
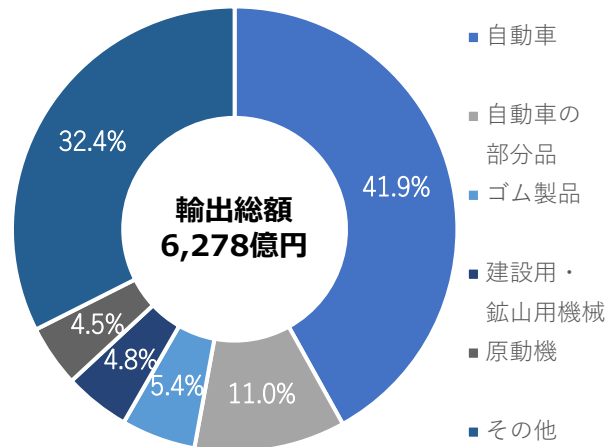
日本とロシアの貿易

- 我が国の貿易相手国としてのロシアの順位は低く、輸出入額のシェアはそれぞれ1%前後。
- また、輸出入品目で見ると、輸出は自動車、輸入は化石燃料が中心であり、農林水産物のシェアは低い。
- さらに、農林水産物の内訳を見ると、ロシアから輸入は水産物や製材、我が国からの輸出は加工食品が多い。

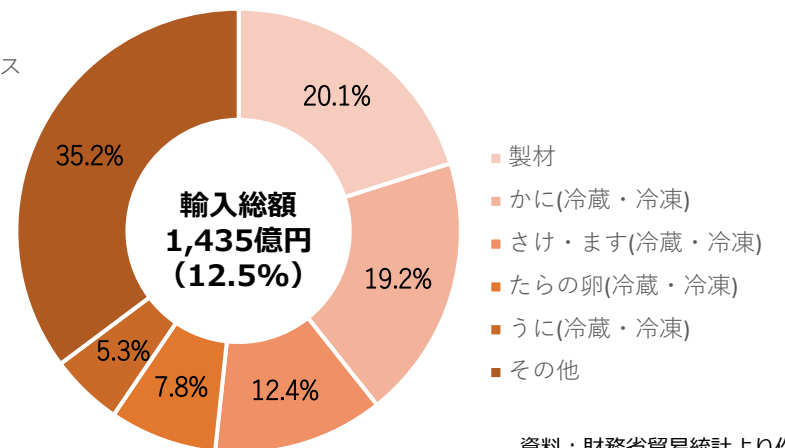
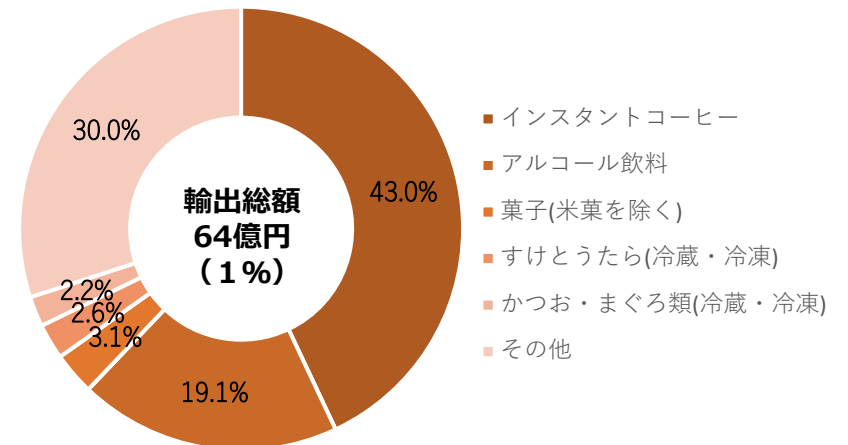
・我が国の主要な貿易相手国



・我が国とロシアとの貿易



うち農林水産物の貿易



資料：財務省貿易統計より作成

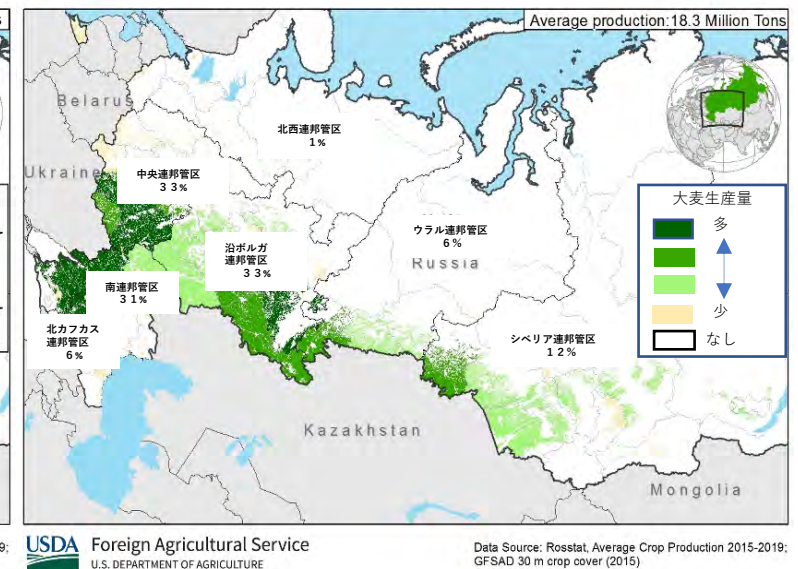
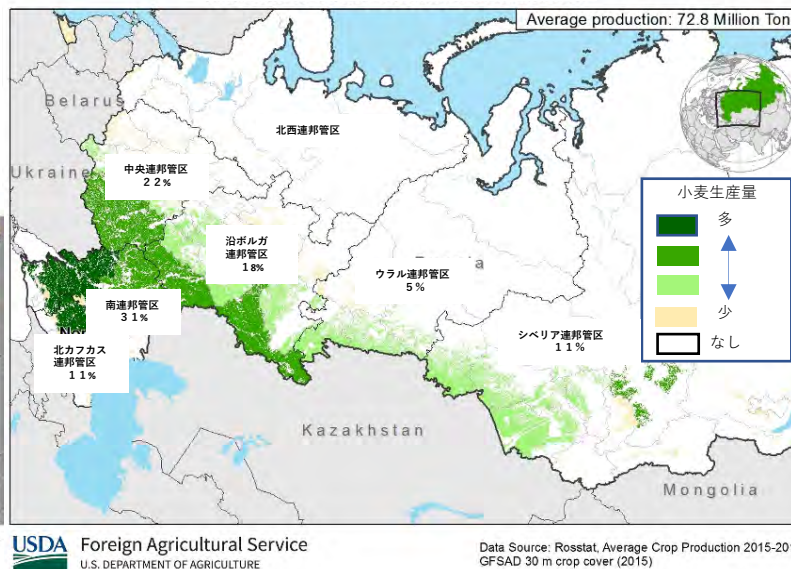
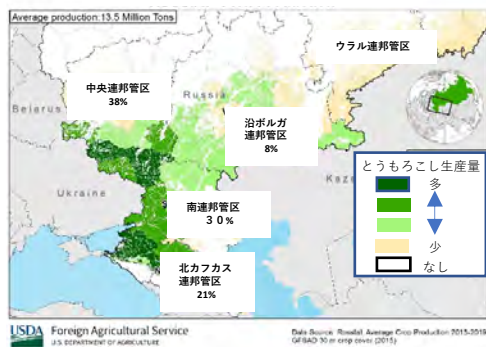
ロシアの穀物生産地域

- ロシアの穀物産地は、比較的降水量が多く土壌の肥沃な南西部に集約されている。
- 特に水分と養分を多く必要とする、とうもろこしは、南連邦管区や中央連邦管区で国内の7割近いシェアを生産している。
- 小麦、大麦は東部でも生産されているが、南連邦管区、中央連邦管区、沿ボルガ連邦管区等の南西部の生産が中心である。

小麦

大麦

とうもろこし

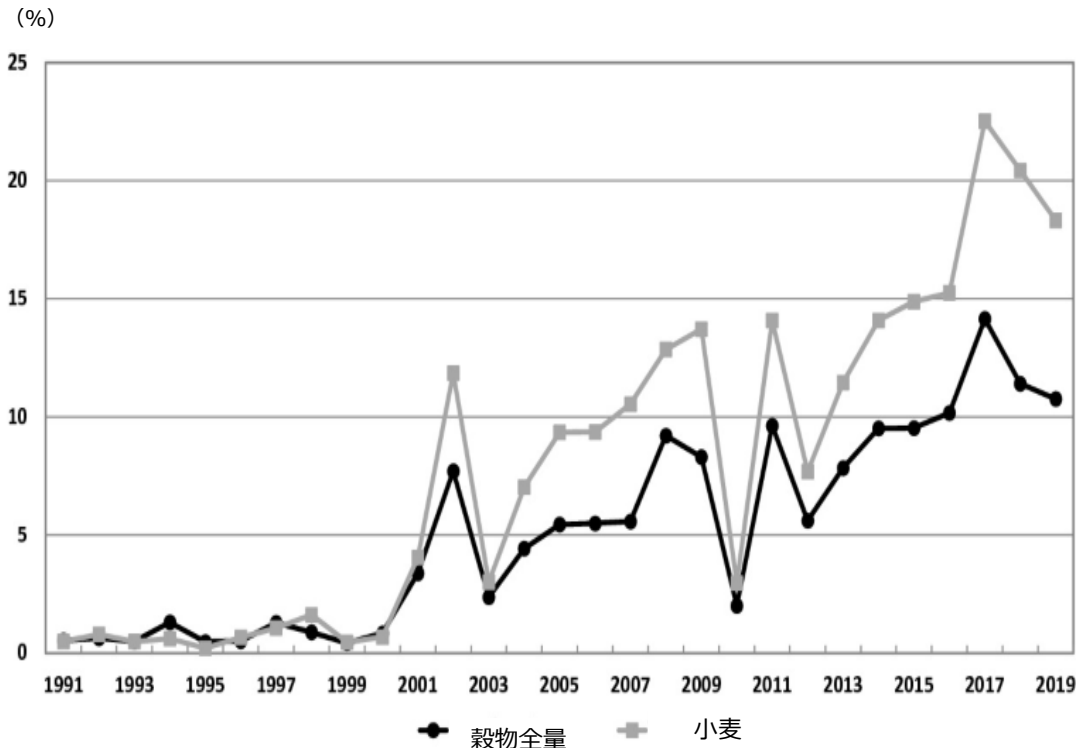


世界の穀物輸出におけるロシア

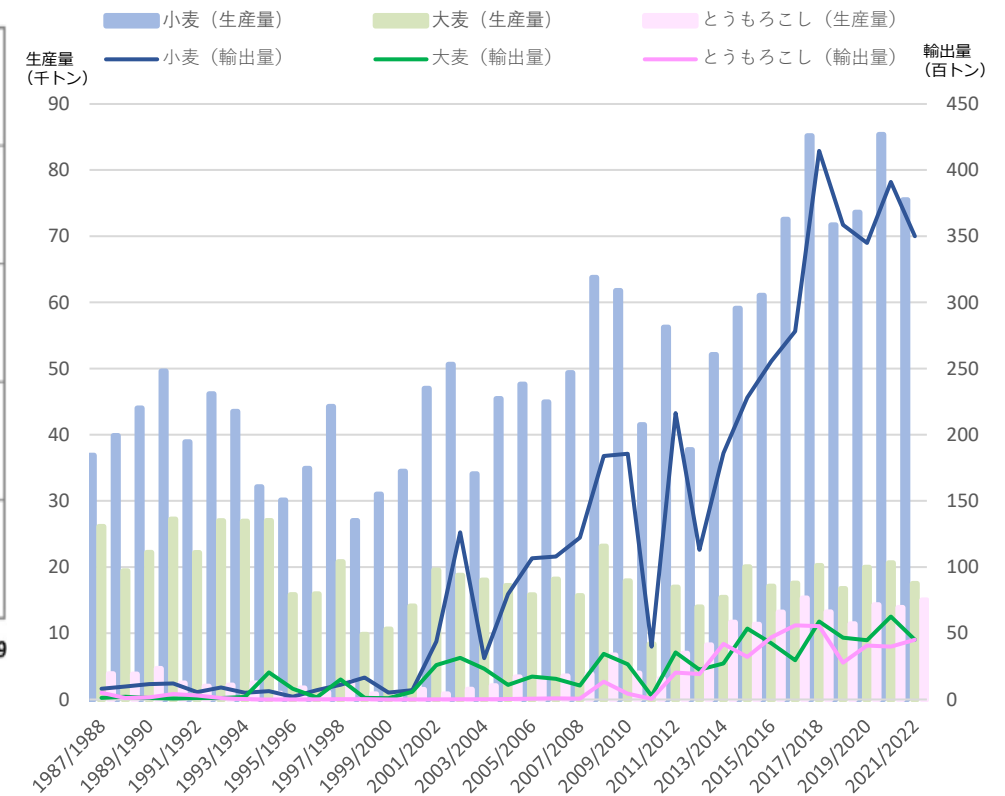
○2016年以降、世界の穀物輸出におけるロシアのシェアは急拡大し、2019年には世界全体の小麦輸出の約20%が、ロシアから供給されている。

○ソ連崩壊後、小麦やとうもろこしの生産量が大幅に増加し、輸出量も増加傾向で推移している。

世界の穀物輸出におけるロシアのシェア



小麦、大麦、とうもろこしの生産量と輸出量

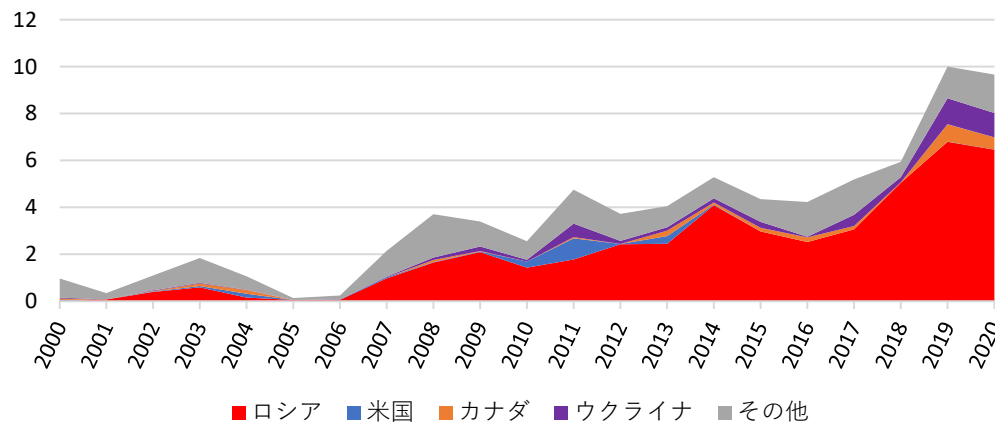


出典：USDA Production, Supply, and Distribution Online, accessed 27 July 2020
Note Exports are gross

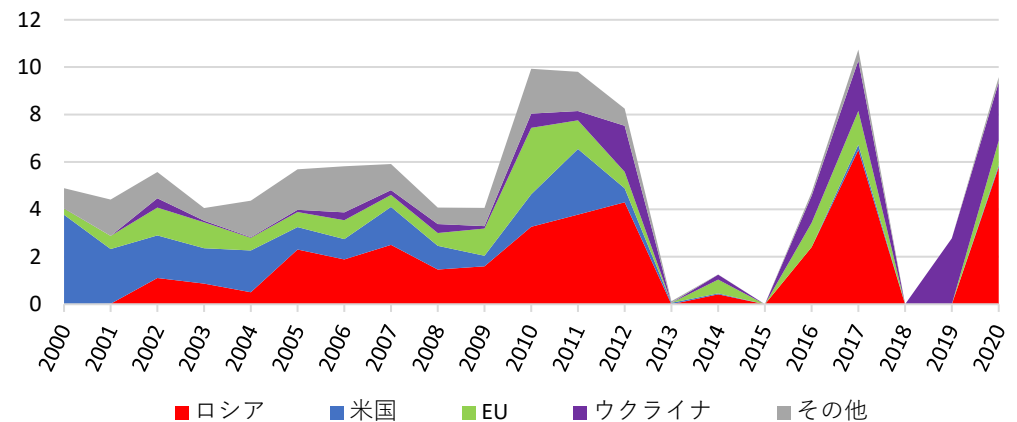
各国小麦輸入におけるロシア産シェアの拡大

- ロシアの小麦生産量増加や輸出港湾整備により、2000年代以降輸入国におけるロシア産小麦のシェアが拡大。
- 特に地理的に近いトルコやエジプトではロシア産小麦のシェアが拡大し、直近ではベトナム等東南アジアにおいても拡大傾向にある。
- なお、ベトナムやインドネシアにおいては、ロシア産やウクライナ産のシェア拡大により、豪州産は減少傾向にある。

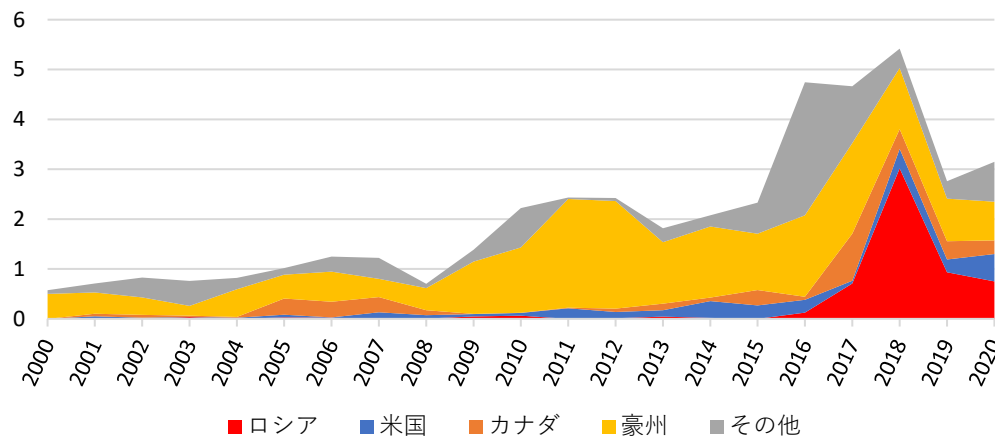
○トルコ



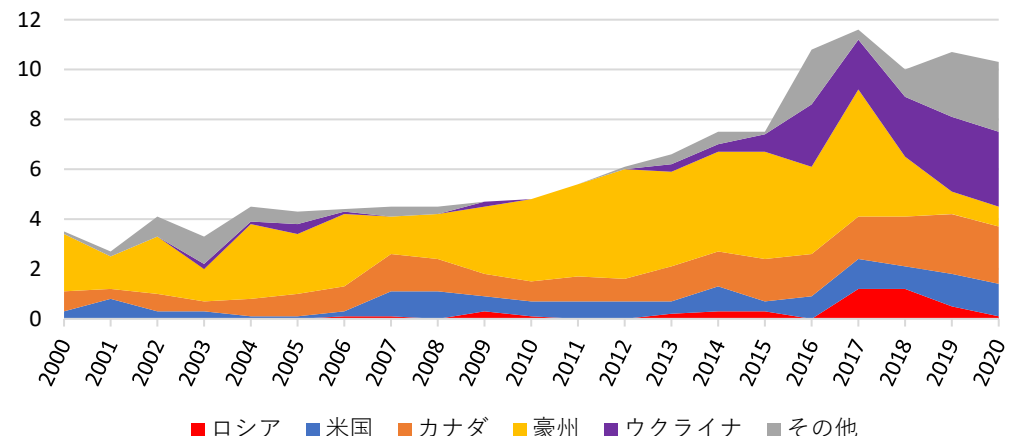
○エジプト



○ベトナム



○インドネシア

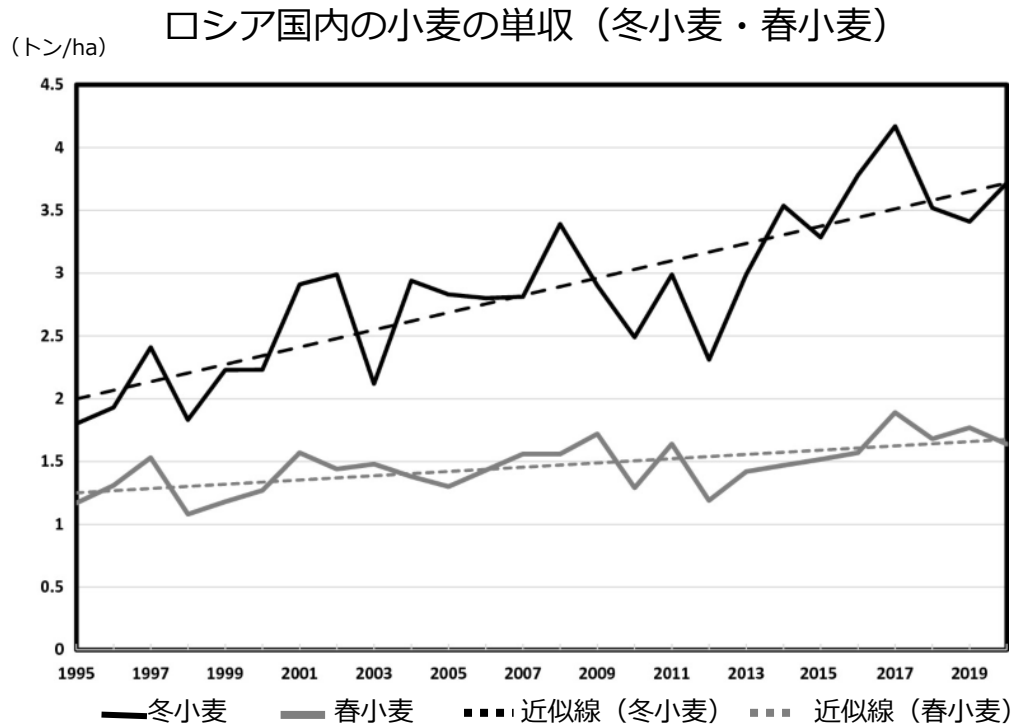


出典：Global Trade Atlas

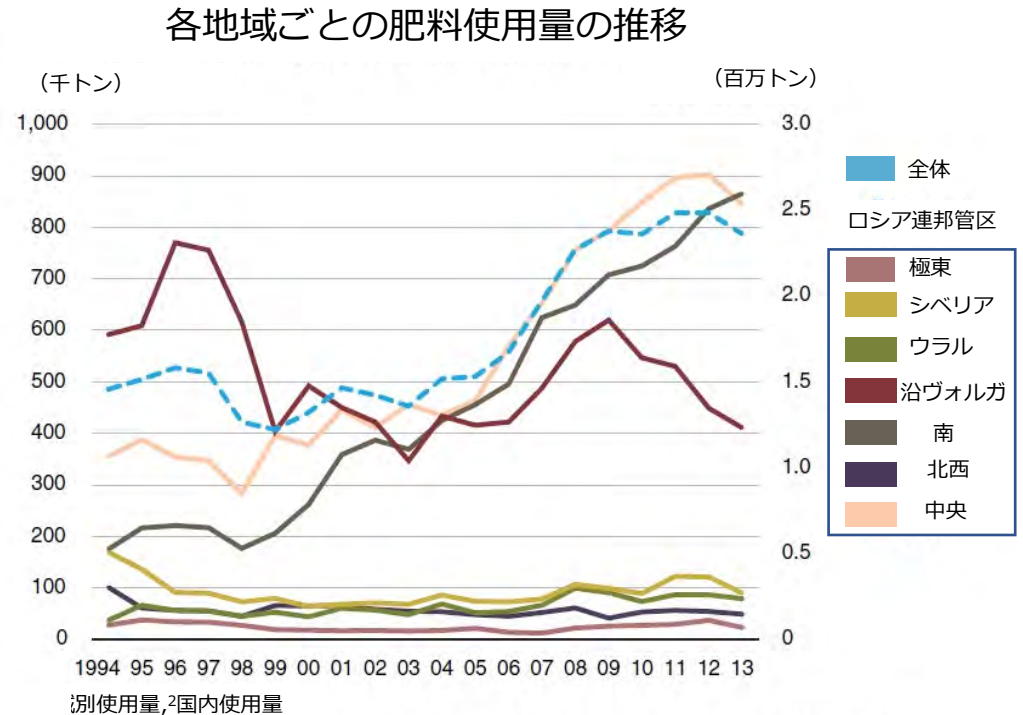
注1：数量単位は百万トン。 注2：エジプトについて一部データなし。

単収と肥料使用量

- 小麦の単収は増加しており、2000年以降、冬小麦が春小麦の2倍以上の単収となり、格差が拡大している。
- 肥料使用量は、90年代後半から増加しており、穀物の生産増加が著しい南連邦管区及び中央連邦管区を中心に増加傾向となっている。



出典：Calculated from USDA Production, Supply, and Distribution Online, accessed 27 July 2020



出典：USDA, Economic Research Service using Russian Federal State Statistics Service and Ministry of Agriculture data.

ロシアと豪州のコスト構造比較①

- 小麦輸出に必要な総コストはロシアは豪州の約6割。サプライチェーンいずれの段階のコストも、ロシアは豪州の半分～1/3程度。
- 一方、ロシアは港湾荷役のコストの割合が高く、全体コストの40%を占める(豪州は15%)。
- ロシアの面積あたりの総生産コストは豪州とほぼ同じであるが、トンあたりコストで比較するとロシアは豪州の半分程度であり、ロシアの単収が高いことでカバーされている。

ロシア・豪州のサプライチェーン費用比較

	ロシア		豪州	
	(豪州 \$/t)	(%)	(豪州 \$/t)	(%)
サイロまでの輸送費	3.46	6	7.80	9
保管	5.13	9	9.00	11
内陸荷役	9.21	17	18.40	22
港までの輸送	15.52	28	26.70	32
港湾荷役	22.19	40	13.10	15
船積み	0.19	0	6.80	8
輸出課徴金(関税等)	0.1	0	2.80	3
サプライチェーン総費用	55.79	32	84.60	28
生産費	121.16	68	216.15	72
総費用(豪州 \$/t)	176.95		300.75	

ロシア・豪州の輸出小麦生産に要する推定コスト

	ロシア			豪州
	春小麦	冬小麦	加重平均	加重平均
産出高(t/ha)	2.84	3.28	3.25	1.82
面積 % (輸出の割合)	5%	95%		
生産費(豪州 \$/ha)				
種子	27	43	43	27
肥料	80	198	192	90
農薬	29	72	70	110
機械・燃料	49	51	51	32
労働力	23	17	17	11
変動費合計	208	381	373	270
地代	9	5	5	80
その他固定費	18	16	16	43
総費用(豪州 \$/ha)	235	403	394	393
総費用(豪州 \$/t)	83	123	121	216

注: 加重平均は、輸出小麦の95%が冬小麦であると想定

資料: Boersch (2013), Rylko (2015), World Bank 2016,

USDA 2016, US Federal Reserve 2016, Planfarm/Bankwest (2015), GRDC (2015),

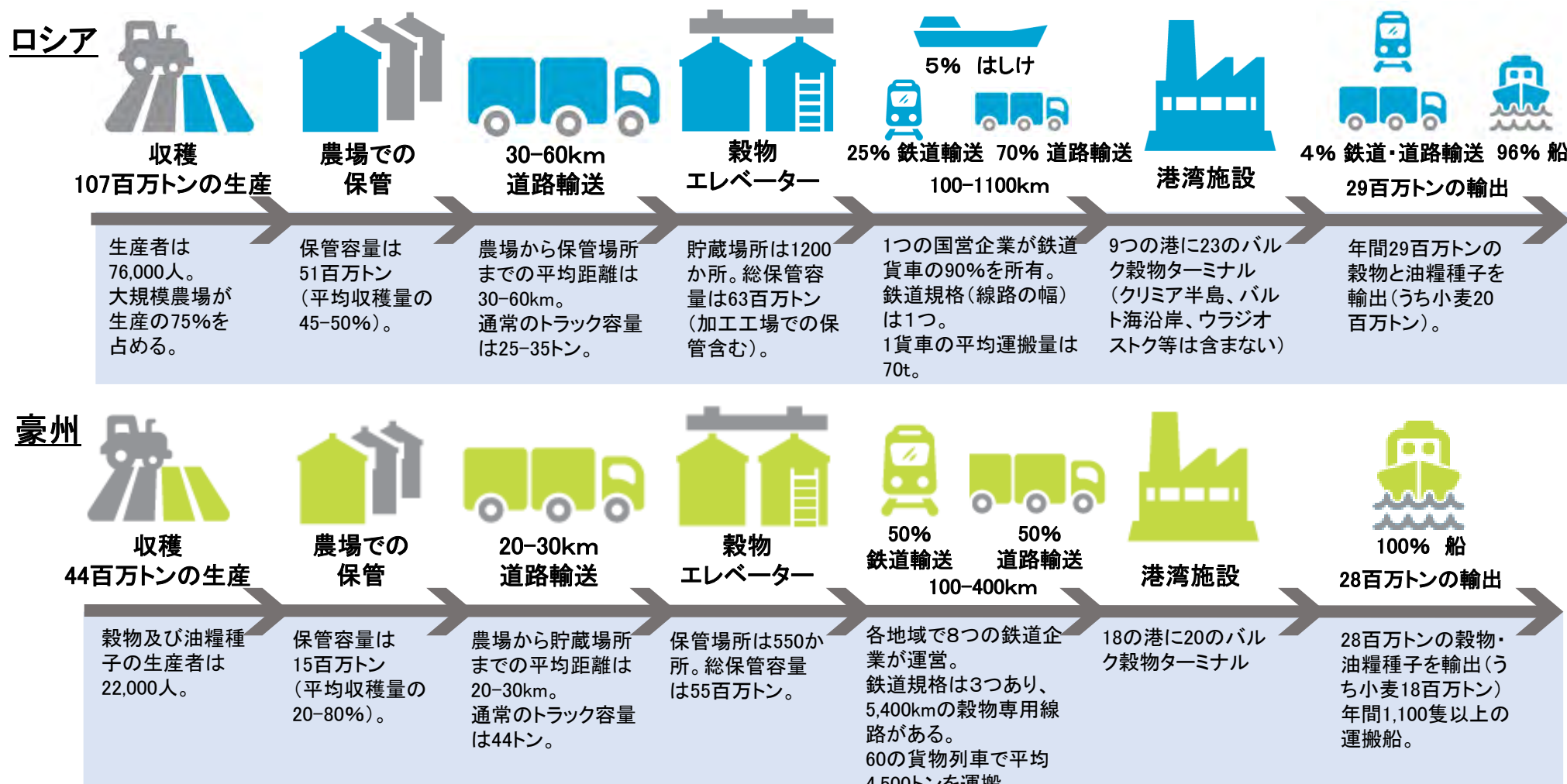
Agribenchmark (2015), Other Industry Sources.

資料: 豪州輸出穀物イノベーションセンター(AEGIC) “Russia’s wheat industry: Implications for Australia (2016)”

ロシアと豪州のコスト構造比較②

- 豪州と比較しロシアは国内の輸送距離が長いため、輸出コストの上昇要因となっている。
- その他にも、ロシアのコスト上昇要因として、①トラック輸送の割合が高い（内陸輸送の7割、豪州は5割）、②貯蔵施設数が多くかつ分散している（ロシア1200、豪州550）、などがある。

ロシアと豪州の小麦の生産～輸出状況の比較(2016年)



資料: 豪州輸出穀物イノベーションセンター(AEGIC) "Russia's wheat industry: Implications for Australia (2016)"

1. 現在のロシア農業：世界の中での位置づけ①

【世界有数の穀物生産国】

① 麦類の生産量は世界有数。(※データは2018/19年度～2020/21年度の3年度平均。年度は7月～翌年6月)

← 小麦:76.9百万トン(世界4位)、大麦:19.1百万トン(世界2位)

② トウモロコシの生産量(13.2百万トン)が増えているが、麦類ほど多くない。

← ロシアは栽培適地が限られる

(降水量が少なく、暖かい期間が短い。ウクライナの方が生産量、単収ともに大きい)。

③ ロシアの穀物生産は粗放的

← 肥料などの投入は相対的に少なく、単収が低い。年による生産量の変動も大きい。

世界の主要穀物生産国(2018/19-2020/21年度平均 生産量:千トン、単収:トン/ha)

順位	小麦			大麦			トウモロコシ		
	国名	生産量	単収	国名	生産量	単収	国名	生産量	単収
	世界計	756,203	3.51	世界計	152,596	2.99	世界計	1,120,399	5.75
1位	中国	133,097	5.48	EU	53,411	4.75	米国	356,224	10.78
2位	EU	129,287	5.44	ロシア	19,102	2.35	中国	259,541	6.25
3位	インド	103,777	3.50	豪州	10,649	2.30	ブラジル	96,333	5.18
4位	ロシア	76,883	2.92	カナダ	9,835	3.72	EU	65,166	7.46
5位	米国	51,213	3.19	ウクライナ	8,360	3.16	アルゼンチン	50,667	8.09
参考	ウクライナ(7位)	26,549	3.95				ウクライナ(6位)	33,996	6.82
							ロシア(11位)	13,187	5.20

資料：農林水産政策研究所（USDA, PSD Onlineから作成。2021年10月30日アクセス）。単収は生産量と収穫面積から計算。

1. 現在のロシア農業：世界の中での位置づけ②

【工芸作物等の生産も世界有数】

- ヒマワリ種子 (2018/19-2020/21年度平均) : ロシア13.8百万トン(世界2位)、ウクライナ15.2百万トン(1位)
 - テンサイ (2017-2019年平均) : ロシア49.4百万トン(1位)、ウクライナ13.0百万トン(7位)
 - ジャガイモ (2017-2019年平均) : ロシア22.1百万トン(3位)、ウクライナ21.7百万トン(4位)
- ← 穀物同様、生産は粗放的で単収は低い。

工芸作物等の主要生産国(生産量:千トン、単収:トン/ha)

順位	ヒマワリ種子(2018/19-2020/21年度平均)			テンサイ(2017-2019年平均)			ジャガイモ(2017-2019年平均)		
	国名	生産量	単収	国名	生産量	単収	国名	生産量	単収
	世界計	51,246	1.95	世界計	288,733	60.17	世界計	368,619	21.29
1位	ウクライナ	15,200	2.29	ロシア	49,443	43.46	中国	90,187	18.62
2位	ロシア	13,761	1.67	フランス	41,413	87.58	インド	50,035	23.11
3位	EU	9,268	2.19	ドイツ	29,993	73.20	ロシア	22,059	17.02
4位	アルゼンチン	3,497	2.07	米国	29,392	68.31	ウクライナ	21,660	16.44
5位	中国	2,430	2.66	トルコ	18,890	60.31	米国	20,019	49.44
参考				ウクライナ(7位)	13,018	48.24			

資料：農林水産政策研究所（ヒマワリ種子はUSDA, PSD Online、テンサイ・ジャガイモはFAOSTATから作成。アクセスは2021年10月30日及び2021年11月3日）。いずれも単収は生産量と収穫面積から計算。

1. 現在のロシア農業：世界の中での位置づけ③

【穀物の主要輸出国】

世界の穀物貿易においては、ロシアは小麦と大麦の主要輸出国。近年トウモロコシの輸出も増加。

【直近3年度のロシアの平均輸出量】：2018/19年度～2020/21年度の3年度平均

- ・ 小麦36.3百万トン（世界第1位）← ロシアの穀物輸出は小麦に集中。
- ・ 大麦5.1百万トン（世界第2位、ウクライナは4.2百万トンで第4位）
- ・ トウモロコシ3.6百万トン（世界第6位、ウクライナは27.7百万トンで第4位）
← ウクライナの穀物輸出はトウモロコシに重点。

主要穀物の主な輸出国（2018/19～2020/21年度平均、単位：千トン）

順位	小麦		大麦		トウモロコシ	
	世界計	190,606	世界計	30,114	世界計	177,665
1位	ロシア	36,283	EU	6,686	米国	55,863
2位	EU	31,394	ロシア	5,127	アルゼンチン	36,999
3位	米国	26,287	豪州	5,104	ブラジル	31,631
4位	カナダ	25,138	ウクライナ	4,228	ウクライナ	27,683
5位	ウクライナ	17,962	アルゼンチン	2,819	EU	4,354
参考					ロシア（6位）	3,581

資料：農林水産政策研究所（USDA, PSD Onlineより作成。アクセスは2021年11月3日）。

2. ロシアの耕種農業：生産・輸出①

(1) 生産概観(※以下、数値はロシア政府公表の統計による)

① 長期の趨勢

- ・ ソ連解体後の混乱で、ロシアの農業生産は1990年代末まで縮小。その後回復、拡大へ。
- ・ 穀物・豆類(以下「穀物」)総収穫量の5年平均値も同様の動き。2016-20年は1億2,483万トンで、ソ連末期の1986-90年を超過。

② 2020年の状況

- ・ ロシアの穀物生産は、欧露南部の一部で不作はあるも、総じて良好。総収穫量は1億3,346万トンで2017年に次ぐ史上2位。小麦の8,590万トンも同様。
- ・ 油糧作物の生産も良好。ヒマワリ種子、大豆は対前年減少も史上2位。菜種は1位。
- ・ テンサイの収穫量は低水準。近年の生産過剰・価格低下に対応した播種面積減と天候不順が原因。

③ 2021年の状況

- ・ 穀物収穫量見通しは1億23百万トン(11月10日大統領・政府会合での農業大臣報告)。

ロシアの主要耕種作物の収穫量

(単位：万トン)

	5年平均値							2016	2017	2018	2019	2020
	1986-1990	1991-1995	1996-2000	2001-2005	2006-2010	2011-2015	2016-2020					
穀物・豆類	10,426	8,795	6,510	7,883	8,518	9,351	12,483	12,068	13,554	11,325	12,120	13,346
小麦	4,355	3,817	3,430	4,495	5,226	5,354	7,837	7,335	8,600	7,214	7,445	8,590
ライ麦	1,245	876	538	488	347	277	216	255	255	192	143	238
大麦	2,202	2,377	1,421	1,777	1,660	1,683	1,940	1,797	2,063	1,699	2,049	2,094
エン麦	1,258	1,050	655	561	494	483	470	477	546	472	442	413
トウモロコシ	330	184	141	215	420	1,023	1,361	1,528	1,321	1,142	1,428	1,388
その他穀物	593	238	192	174	217	307	309	383	343	264	278	279
豆類	443	254	132	174	155	224	349	294	426	344	334	345
工業作物												
テンサイ	3,318	2,166	1,402	1,853	2,712	4,088	4,671	5,132	5,191	4,207	5,435	3,392
油糧作物		380	381	526	798	1,254	1,926	1,627	1,650	1,953	2,277	2,125
ヒマワリ種子	312	310	333	451	631	884	1,259	1,102	1,048	1,276	1,538	1,331
大豆	65	47	31	48	87	199	389	314	362	403	436	431
菜種		14	13	20	65	110	183	100	151	199	206	257
その他油糧作物		9	5	7	14	61	96	111	88	76	97	105
馬鈴薯	3,588	3,681	3,183	2,836	2,576	2,525	2,165	2,246	2,171	2,239	2,207	1,961
野菜	1,117	1,023	1,051	1,123	1,168	1,289	1,369	1,318	1,361	1,369	1,410	1,386

資料：農林水産政策研究所(ロシア連邦統計庁ウェブサイト等から作成)。

※ ロシア政府の公表するロシア連邦全体の統計値は2014年以降クリミアの値を含む一方USDAの公表するロシアの値はこれを含まない。

2. ロシアの耕種農業：生産・輸出②

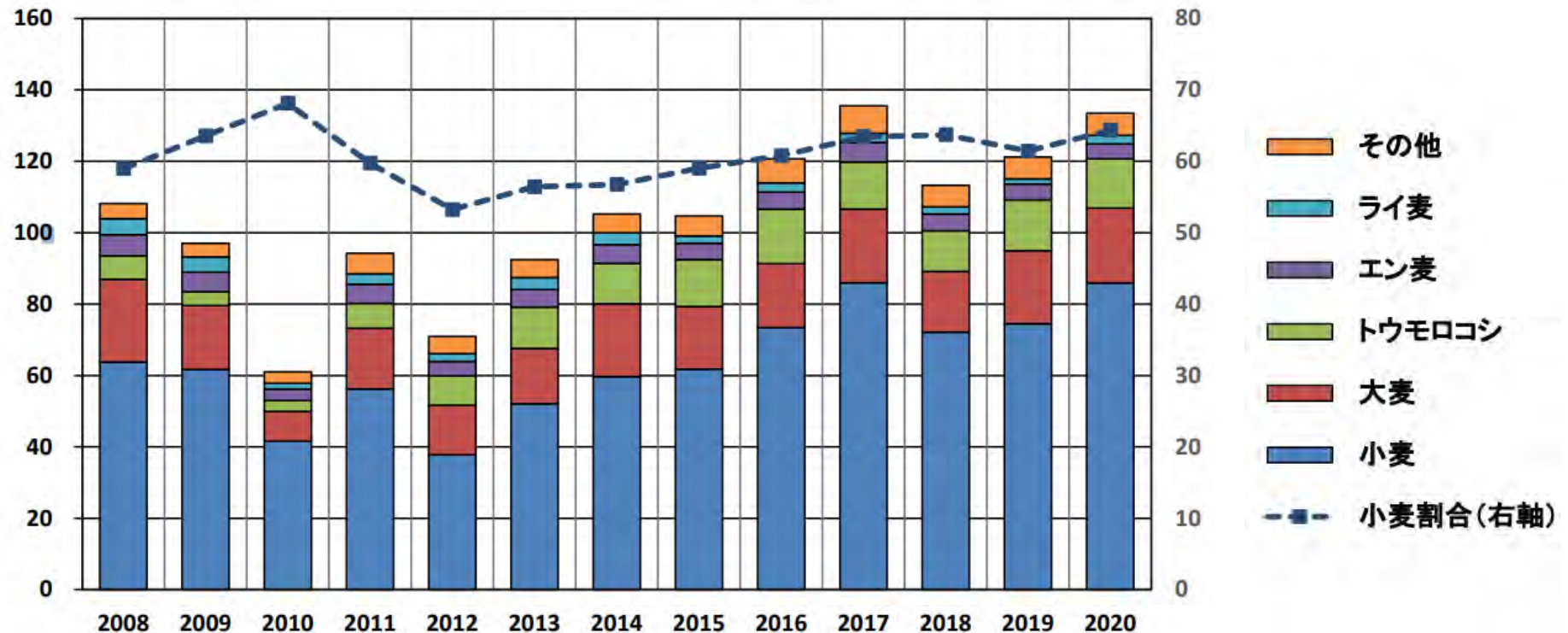
(2) 近年の穀物生産動向

- 2010年、12年には干ばつ等により穀物は凶作。その後は極端な悪天候がない年が続く。
- 穀物収穫量は2014年以降連続して1億トン超え。2020年の133百万トンは2017年に次ぐ史上2位。
- 小麦が穀物収穫量の6割程度を占める。次いで大麦、トウモロコシ。3品目でおおむね9割。

ロシアの穀物収穫量

単位:百万トン

単位: %



資料: 農林水産政策研究所(ロシア連邦統計庁ウェブサイトから作成)。 -13-

2. ロシアの耕種農業：生産・輸出③

ヨーロッパ・ロシア南西部・中央黒土地域：ヴォロネジ州の小麦畑（収穫間近の冬小麦）

2017年7月17日撮影（農林水産政策研究所 長友総括上席研究官）



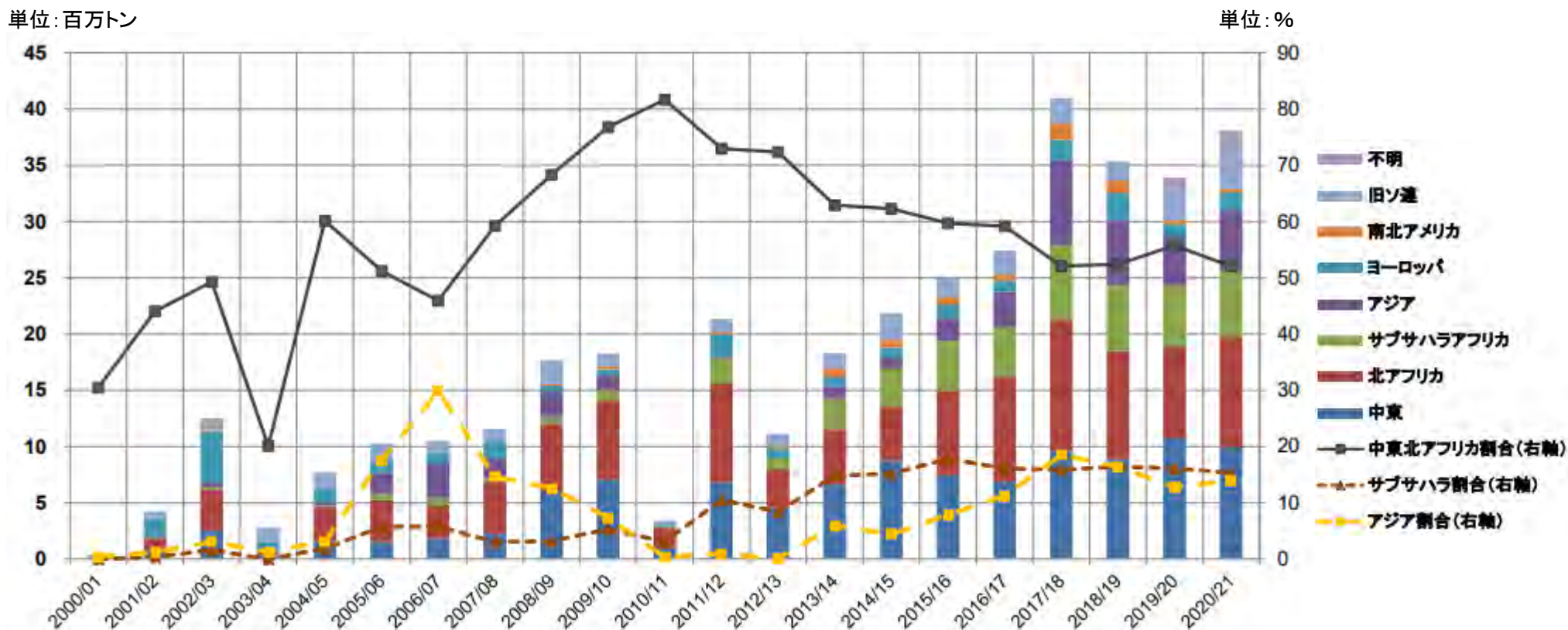
2. ロシアの耕種農業：生産・輸出④

(3) ロシアの小麦輸出：地域別輸出状況

- 2020/21年度(2020年7月～21年6月)の小麦総輸出量は38.1百万トン(ロシア史上2位)
- 最大の輸出先は中東・北アフリカ(エジプト、トルコ等)であり、19.8百万トン(52.0%)
- サブサハラ・アフリカ(ナイジェリア等)への輸出は5.8百万トン(15.3%)、アジア(バングラデシュ、インドネシア、ベトナム等)は5.3百万トン(14.0%)

ロシアにおける小麦輸出量の地域別の推移

単位: 百万トン



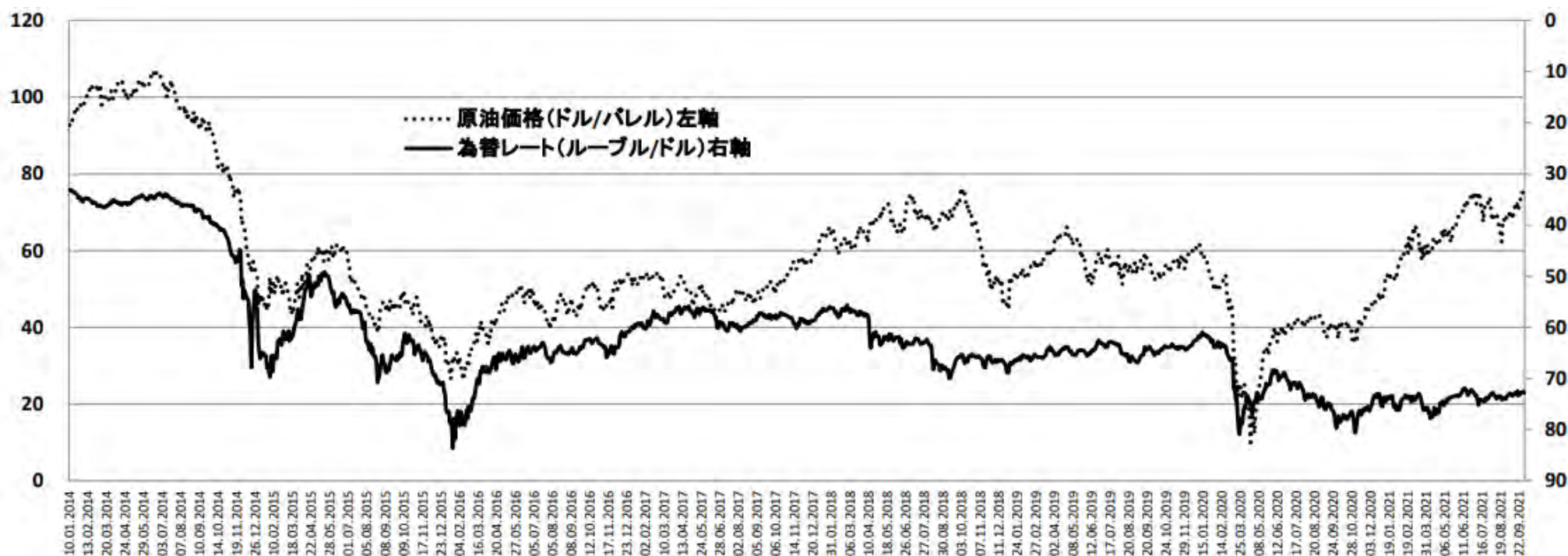
資料: 農林水産政策研究所(ロシア連邦税関庁「通関統計」及び「通関統計データベース」から作成)。

2. ロシアの耕種農業：生産・輸出④

(4) 近年の小麦生産/輸出拡大の背景

- 作付面積増加の要因: 2014年以降続くルーブル安の下で、ロシアの小麦生産・輸出の収益性が高水準となり、輸出向け生産に適した地域で生産拡大意欲が刺激された。
- 単収上昇の要因: 穀物の生産面の改善(肥料等の投入増加、優良な品種・種子の利用拡大、機械装備の充実等)も進んでいるとみられ、天候に大きな問題がない年が続く中で、これらの効果が十分発現した。

原油価格とルーブル相場の推移(2014年～2021年)



資料: 農林水産政策研究所(USEIA [原油価格Cushing, OK Crude Oil Future Contract 1]及びロシア中央銀行[為替レート])から作成。

3. ロシアの農産物貿易政策の変化①

(1) 農林水産物純輸入国からの脱却へ

- ロシアの貿易収支全体は、石油、天然ガス等の輸出を中心として大幅な黒字。2020年の黒字額は1,054億ドル(石油価格の下落が対前年減少の主要因)。
- 農水産物(HS1～24類)の貿易収支は継続的な赤字。背景には、穀物等の低単価の農産物を輸出する一方、食肉、酪農品、酒類、加工食品のような高単価の品目を多く輸入する貿易構造。
 - ←2014年からの対欧米食品輸入禁止措置の発動や大幅なルーブル安によって、農水産物の貿易赤字は大幅に縮小し、輸出促進が政策課題に。
 - ←2020年の赤字額は2億ドルまで縮小。コロナ禍・景気後退による需要減少と穀物等の輸出拡大。

ロシアの貿易構造

(単位：億ドル)

		2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
輸出額	総額	5,167	5,247	5,260	4,974	3,435	2,857	3,573	4,503	4,243	3,371
	農水産物	133	168	163	190	162	171	207	250	248	296
輸入額	総額	3,058	3,173	3,153	2,871	1,827	1,824	2,279	2,387	2,446	2,317
	農水産物	425	407	433	400	266	251	290	298	300	297
差額	総額	2,110	2,075	2,107	2,103	1,608	1,032	1,294	2,116	1,797	1,054
	農水産物	▲ 292	▲ 239	▲ 270	▲ 210	▲ 104	▲ 80	▲ 82	▲ 48	▲ 51	▲ 2

資料：農林水産政策研究所（ロシア連邦税関庁「通関統計」各年版から作成）。

3. ロシアの農産物貿易政策の変化②

(2) 穀物の輸出制限(コロナ禍以前)

- 凶作による供給不足(①、③)や輸出の過熱(②、④、⑤)により、国内の安定供給が懸念される際に発動。
- 2010年の輸出禁止以降は、輸出制限の発動は慎重になり、措置の内容も抑制的。
- 2016年9月23日以降は、輸出関税の仕組み(⑤)を残しつつ関税額無税を継続(2021年6月末までの予定)。

ロシアの穀物輸出制限一覧(コロナ禍以前)

措置	対象品目	関税率等	適用期間	背景
①輸出関税	小麦、ライ麦	25ユーロ/トン	2004.1.16～5.1	2003年の凶作による供給不足
②輸出関税	小麦	10% (最低22ユーロ/トン)	2007.11.12～2008.1.28	国際的な穀物価格の高騰
		40% (最低105ユーロ/トン)	2008.1.29～6.30	
	大麦	30% (最低70ユーロ/トン)	2007.11.12～2008.6.30	
③輸出禁止	小麦、大麦、ライ麦、トウモロコシ等	対象穀物の輸出禁止	2010.8.15～2011.6.30	2010年の凶作による供給不足
④輸出関税	小麦	15% + 7.5ユーロ/トン (最低35ユーロ/トン)	2015.2.1～5.14	ルーブル安による輸出の進展と国内価格の上昇
⑤輸出関税	小麦	課税価格の50% - 5,500ルーブル/トン (最低50ルーブル/トン)	2015.7.1～9.30	
	小麦(種子用等は除く)	課税価格の50% - 6,500ルーブル/トン (最低10ルーブル/トン)	2015.10.1～2016.9.22	

資料: 農林水産政策研究所(各規制の根拠となるロシア連邦政令等から作成)。

注: 小麦はいずれもメスリン(小麦とライ麦の混合物)を含む。

3. ロシアの農産物貿易政策の変化③

(2) 対欧米逆制裁としてのロシアの食品輸入禁止措置

ウクライナ危機に伴う欧米の対ロシア経済制裁に対抗して2014年8月から発動。

① 対象国・地域

〔当初〕 米国、EU加盟国、カナダ、オーストラリア、ノルウェー

〔2015年8月追加〕 アルバニア、モンテネグロ、アイスランド、リヒテンシュタイン

〔2016年1月追加〕 ウクライナ

〔2020年12月追加〕 英国（EU脱退に伴う対応）

② 主な対象品目： 食肉・肉製品、水産物、牛乳・乳製品、野菜、果実 等

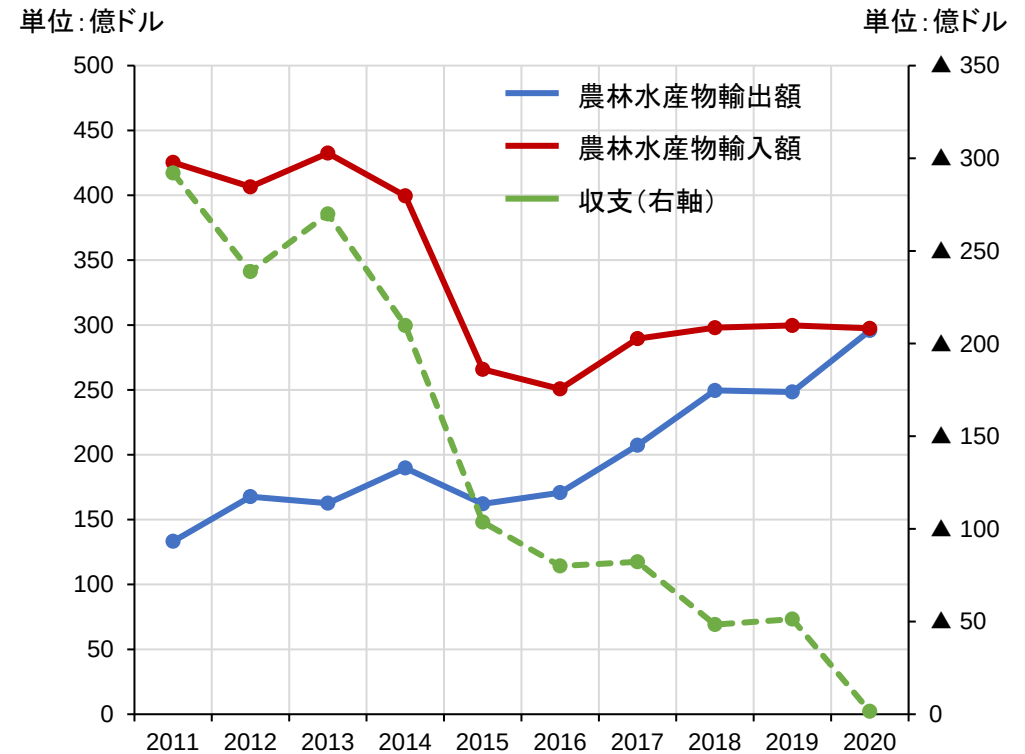
③ 発動期間： 当初2015年8月までの1年間としていたが、欧米の経済制裁延長に対応して累次延長され、現在は2022年12月末日までとされている。

3. ロシアの農産物貿易政策の変化④

(3) プーチン大統領の農産物輸出拡大目標

「2024年までのロシア連邦の国家目標と戦略的課題」(2018年5月7日付けロシア連邦大統領令第204号)

- プーチン大統領が2018年5月の大統領就任に当り任期(第4期:2024年までの6年間)中の課題と目標を示し、政府に対応を指示。
- 対象12分野の一つ「国際協力と輸出」の目標に、「非原料・非エネルギー品目としては2,500億ドル、そのうち機械製造業の生産物では500億ドル、農産複合体の生産物では450億ドルの年間輸出金額の達成」が掲げられた。
- 「農産複合体生産物の輸出額」
(HS1～24類の農水産物の輸出額に近い値)
2017年:216億ドル → 2024年:450億ドル



ロシアの農水産物貿易と収支

資料: 農林水産政策研究所(ロシア連邦税関庁「通関統計」から作成)。

4. コロナ禍とロシア①

(1) COVID-19:ロシアの状況

○2022年1月23日現在の感染状況(WHO)

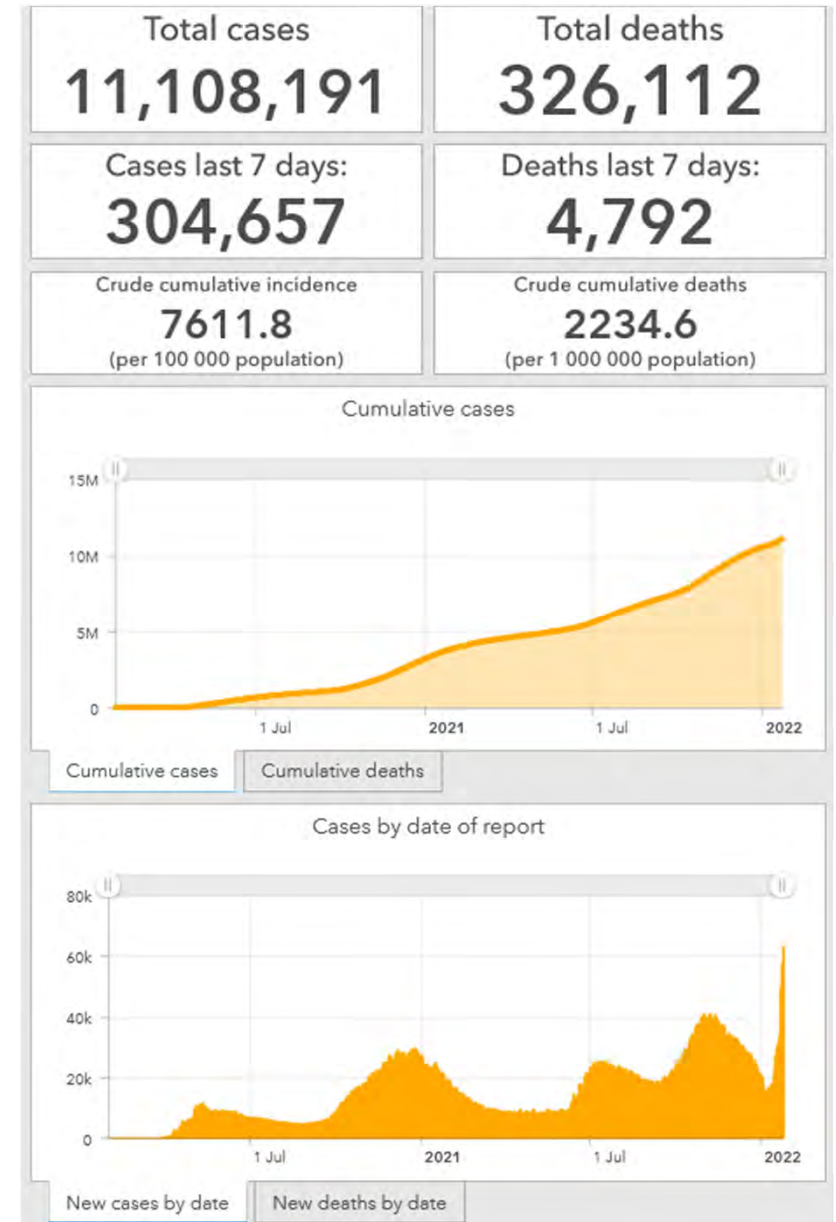
- ・累計感染者数:1,110万8,191人
米、印、伯、英、仏に次ぐ世界6位
- ・累計死者 :32万6,112人
米、伯、印に次ぐ世界3位
- ・直近1週間の感染者数:30万4,657人
- ・直近1週間の死者数:4,792人

○1月21日現在のワクチン接種状況 (стопкоронавирус.рф)

- ・1回接種:8,198万1,007人(総人口比56.1%)
 - ・接種完了:7,805万9,701人(同53.4%)
- (2021年1月1日現在総人口1億4,617万1,015人)

○「非労働日」の決定

- ・第1回:2020年3月28日～5月11日
- ・第2回:2021年10月30日～11月7日



Source: WHO Regional Office for Europe, "COVID-19 situation dashboard for Europe"
[<https://who.maps.arcgis.com/apps/dashboards/ead3c6475654481ca51c248d52ab9c61>]
data as of: 23 January 2022, 10:00 (CET)

4. コロナ禍とロシア②

(2) コロナ禍のロシア経済への影響

○2020年の実質GDP成長率は-3%。20年第2四半期～21年第1四半期までマイナス成長が続く。

← コロナ禍に伴う家計消費や投資の減少(1回目の非労働日:2020年3月28日～5月11日のロックダウン実施等が影響)

← 原油安に伴う輸出額の減少

○国民生活の悪化

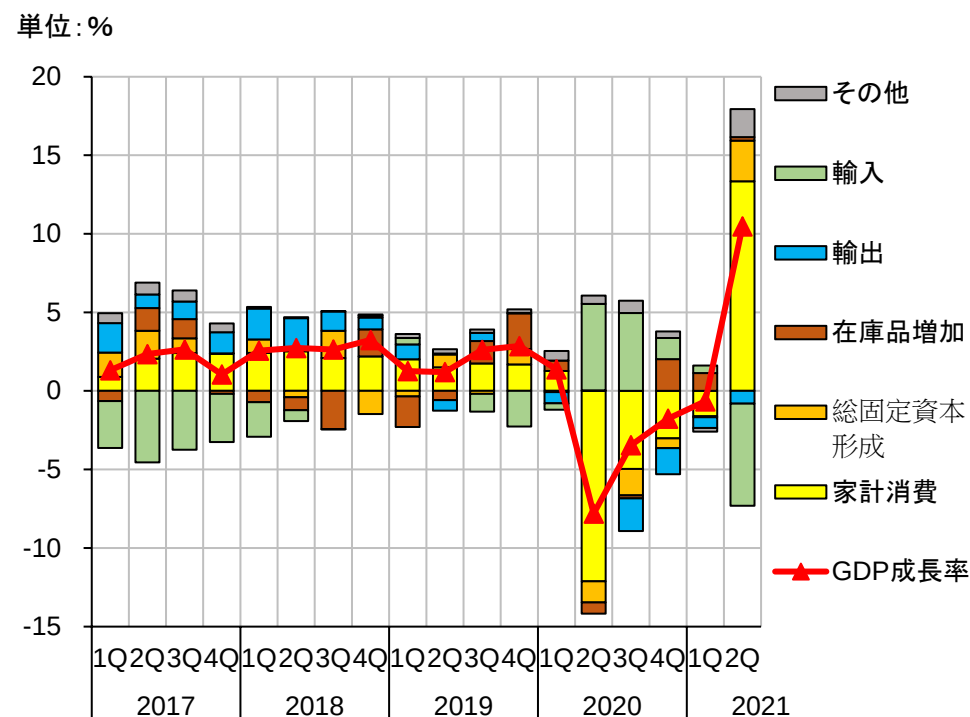
・所得水準の低下: 実質現金所得は、2020年第2～2021年第1四半期の間、対前年同期マイナス(2020年第2四半期は92.9%)

・失業率の上昇:
2020年1-3月4.6% → 7-9月6.4% → 2021年6-8月4.6%

○2020年の農業の成長率*は+0.5%。

← 穀物・油糧種子の豊作と価格上昇が主要因。

(*耕種農業、畜産業、狩猟業及び関連サービス業の総付加価値額の対前年増加率)



ロシアの支出項目別実質GDP成長率寄与度

資料: 農林水産政策研究所(ロシア連邦統計庁ウェブサイトから作成)

4. コロナ禍とロシア③

(3) 社会的重要な品目(食品)の価格高騰と対策(2020年12月)

1. 背景/経緯

- ・社会的重要な品目(食品)の価格高騰を受け、プーチン大統領の指示に基づき連邦政府が措置を決定。
 - コロナ禍で国民生活が苦境にある中、社会的重要な品目の価格高騰は許容できないとの判断。
 - 原因は、ルーブル安と国際価格上昇を背景とした輸出の過熱にあるとして輸出制限を導入。

2. 措置の概要

① 緊急措置

- ・政府と製造・流通・製造業界団体で協定を結び、砂糖と植物油の小売価格を規制。

② 2021年に講じる措置

【砂糖関係】

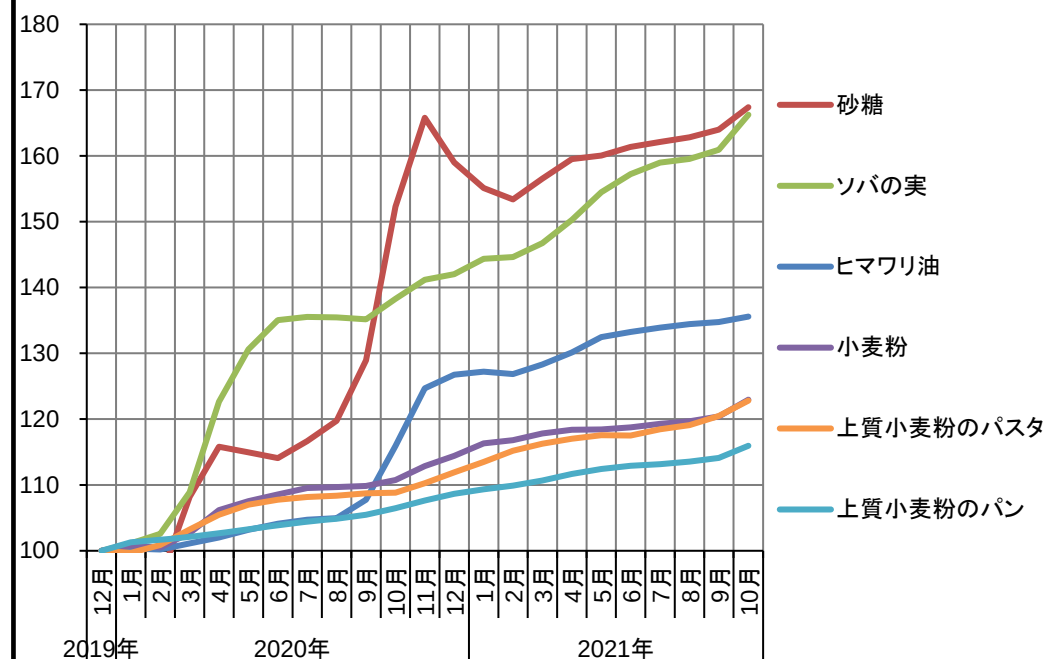
- ・製糖業者に対し原料のテンサイ購入資金に係る低利融資(金利1~5%)を供与。
- ・テンサイ播種面積の拡大。

【ヒマワリ油関係】

- ・ヒマワリ種子の輸出関税を導入。
- ・ヒマワリ油の輸出関税導入を検討。

【パン、小麦粉関係】

- ・穀物の輸出数量枠及び輸出関税を導入。
- ・製粉業者に対して食用小麦の購入費用、製パン業者に対して粉の購入費用の一部を助成。



社会的重要な品目(食品)の消費者価格の動向
(2019年12月:100)

資料:農林水産政策研究所(ロシア連邦統計庁EMISSより作成)。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置①

(1) 穀物の輸出制限(コロナ禍後)

ロシアの穀物輸出制限一覧(コロナ禍後)

措置	対象品目	関税率等		適用期間	背景
⑥ 輸出数量 枠	小麦, ライ麦 大麦, トウモロコシ	対象穀物の総輸出量上限700万トン		2020.4.1～6.30	新型コロナ禍、ルーブル安下の輸出進展・国内価格上昇(輸出と国内安定供給の両立)
⑦ 輸出禁止	ライ麦, 米, ソバ, キビ等	輸出禁止		2020.4.12～6.30	ユーラシア経済連合(EEU)による新型コロナ禍対策の一環
⑧ 輸出関税 割当	小麦, ライ麦, 大麦, トウモロコシ	輸出数量枠	対象穀物の総輸出量1,750万トン	2021.2.15～6.30	新型コロナ禍による景気低迷・所得減少下での国内価格上昇の阻止(国際価格上昇とルーブル安による輸出の加速が背景との判断)
		枠内 輸出 関税	小麦	25ユーロ/トン	
				50ユーロ/トン	
			大麦	無税	
				10ユーロ/トン	
			トウモロコシ	無税	
				25ユーロ/トン	
			ライ麦	無税	
		枠外輸出関税	50%(最低100ユーロ/トン)	2021.2.15～6.30	
⑨ 可変輸出 関税+輸出 関税割当	小麦, ライ麦, 大麦, トウモロコシ	可変輸出関税	輸出関税額[トン当たり] = (指標輸出価格 - 基準輸出価格) × 0.7 *基準輸出価格: 小麦200ドル/トン, 大麦・トウモロコシ185ドル/トン	1) 2021.6.2～6.30 ・ ⑧の輸出数量枠内は可変輸出関税、 枠外は⑧の枠外輸出関税 2) 2021.7.1～2022.2.14 ・ 枠なし、可変輸出関税単独	国際価格高騰の国内への影響を緩和する恒久的措置であり、輸出関税を財源とする国内助成とセット(穀物ダンパー)
		輸出数量枠(⑧の枠が2021.6.30まで継続)			
⑩ 可変輸出 関税+輸出 関税割当	小麦, ライ麦, 大麦, トウモロコシ	可変輸出関税	3段階の可変輸出関税(⑨の改正)	1) 2022.2.15～6.30 ・ 輸出数量枠設定、枠内は3段階の可変輸出関税、枠外は枠外輸出関税 2) 2022.7.1～2023.2.14 ・ 枠なし、3段階の可変輸出関税単独 → 以後毎年繰り返し	⑨の完成形
		輸出数量枠(毎年度2.15～6.30に導入) ・ 2022年の枠は、小麦800万トン、その他3種穀物計300万トン → 以後毎年改訂 ・ 枠外輸出関税は50%(最低100ユーロ/トン)			
⑪ 輸出禁止	ソバ	輸出禁止		2021.6.5～8.31	国内価格上昇

資料: 農林水産政策研究所(各規制の根拠となるロシア連邦政令等から作成)。注: 小麦はいずれもメスリンを含む。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置②

(2) 穀物の輸出制限(コロナ禍後) ※前スライド⑧、⑨、⑩の措置を整理

- コロナ禍で経済が後退し、国民の所得水準が低下する中で、国民生活上不可欠な食品、中でも重要な小麦等の穀物・製品の価格が大幅に上昇したため、内政的に許容できないとして、プーチン大統領が政府に対策を指示。
- 穀物価格高騰の原因は、ルーブル安と国際価格上昇に対応した輸出の加速にあるとして、小麦、トウモロコシ、大麦及びライ麦を対象に輸出規制措置を導入。
- 2020年12月に措置を決定した後、2021年2月にかけて矢継ぎ早に措置の見直しを繰り返し(導入も含め3回の制度変更)。
- 小麦の場合、最も高い50ユーロ/トンの輸出関税が適用された時期には輸出が激減(2020/21年度を通して見れば史上第2位の輸出量)。

ロシアの穀物輸出規制概要: 2021年2月～2023年2月(小麦の場合)

時期		2021.2.15～2.28	3.1～6.1	6.2～6.30	7.1～2022.2.14	2.15～6.30	7.1～2023.2.14
制度		輸出関税割当制度			可変輸出関税制度	輸出関税割当制度	可変輸出関税制度
税率額	数量枠	対象穀物計1,750万トン			(注1)	小麦800万トン(注2)	3段階の可変輸出関税
	枠内	25ユーロ/トン	50ユーロ/トン	(指標輸出価格－200ドル/トン) × 70%			
	枠外	50%(最低100ユーロ/トン)				50%(最低100ユーロ/トン)	

資料: 農林水産政策研究所(各規制の根拠となるロシア連邦政令から作成)。

注1: 図では簡略化したが、2022年1月31日から2月14日は3段階の可変輸出関税が適用される。

注2: 小麦800万トンのほかにライ麦、大麦及びトウモロコシ合計で300万トンの枠が設定される。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置③

【穀物の可変輸出関税】 2021年6月導入当初の仕組み(2021年2月6日政令第117号)

- ① 対象品目:小麦, ライ麦, 大麦及びトウモロコシの4品目。
- ② 適用期間:2021年6月2日から(恒久的な適用を想定)。
- ③ 関税額(率)及び輸出数量枠:ロシアの農業年度(毎年7月～翌年6月)を前提として以下の枠組みを設定。
 - a. 年度前半(7月1日～12月31日):輸出数量枠の設定は想定されていない。可変輸出関税(税額は下記④参照)を適用する。
 - b. 年度後半(1月1日～6月30日):選択肢を残す →輸出数量枠を設定する場合は、枠内輸出には可変輸出関税、枠外輸出には50%(最低100ユーロ/トン)の輸出関税が適用される。輸出数量枠を設定しない場合は可変輸出関税が適用される。
- ④ 可変輸出関税の税額
 - 可変輸出関税のトン当たりの輸出関税額は、連邦農業省が下記の式により毎週算出・公表する。小麦、大麦及びトウモロコシが対象(ライ麦は無税)。
「輸出関税額[トン当たり]=(指標輸出価格－基準輸出価格)×0.7」
 - a. 指標輸出価格:モスクワ証券取引所・全国商品取引所におけるドル建てノヴォロシスク港渡しFOB価格相場に基づき、連邦農業省が毎週算出・公表する値。
 - b. 基準輸出価格:小麦は200ドル/トン、大麦・トウモロコシは185ドル/トン。

※ 可変輸出関税の税額及び指標輸出価格はロシア連邦農業省が下記アドレスにて公表。

<https://mcx.gov.ru/ministry/departments/departament-ekonomiki-investitsiy-i-regulirovaniya-rynkov/industry-information/info-zernovye-kulturny/>

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置④

【穀物の可変輸出関税】 2022年1月末以降適用される改正内容(2021年12月31日政令第2595号)

当初の仕組みから以下の点を見直し。施行は2022年1月31日から。

③ 関税額(率)及び輸出数量枠

b. 年度後半(1月1日～6月30日):

- ・ 小麦、大麦、トウモロコシ及びライ麦について、毎年度2月15日から6月30日までの間は輸出数量枠を導入する。
- ・ 2021/22年度の輸出数量枠は、小麦800万トン＋大麦、トウモロコシ及びライ麦合計300万トン。
- ・ 次年度(2023年2月15日)以降の輸出数量枠の数値については、連邦経済発展省と連邦農業省で合意した案を、枠導入の前年の12月10日までに連邦政府(首相府)に提出する。
- ・ 枠内輸出には可変輸出関税、枠外輸出には50%(最低100ユーロ/トン)の輸出関税が適用される(変更なし)。

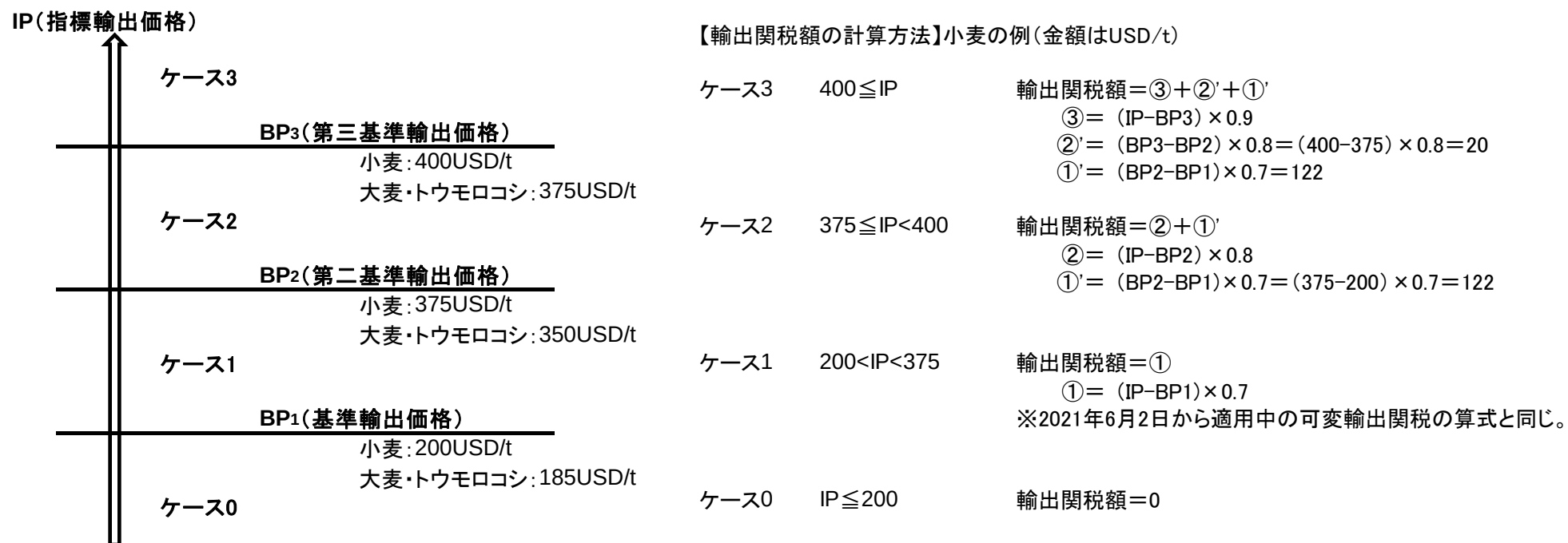
④ 可変輸出関税の税額

・ 穀物の輸出価格が上昇するほど強く輸出を抑制する仕組みとすることを目的として、三段階の基準輸出価格を設定し、指標輸出価格が各段階の基準輸出価格を上回るごとに輸出関税額の算出に用いられる係数が上昇する仕組みを導入。

→ 次頁図解参照

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑤

【穀物の可変輸出関税】 2022年1月末以降適用される輸出関税額算出方式



資料：農林水産政策研究所（2021年12月31日政令2595号から作成）。

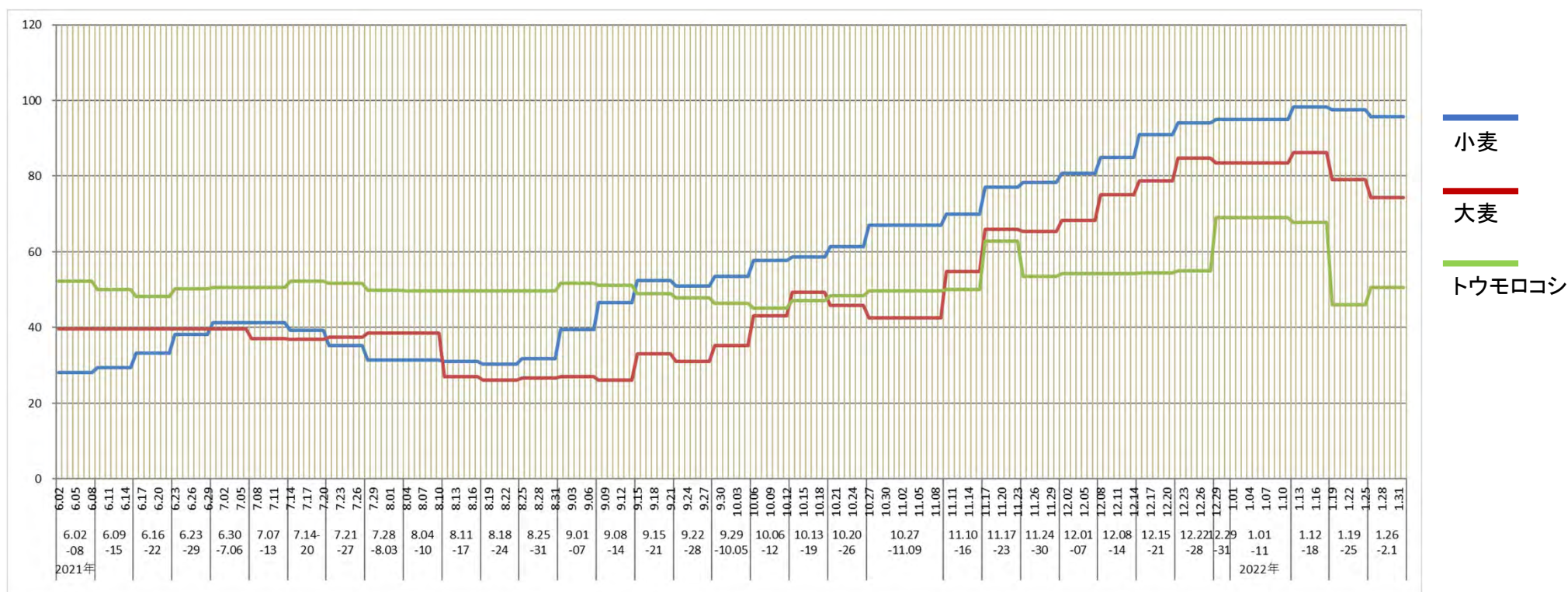
5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑥

【穀物可変輸出関税額の推移】

- 例年、7月からの年度初めは穀物の供給が豊富で、価格が下がるが、今年度は国際価格高騰の影響でロシアの輸出価格も高く、可変輸出関税が課され、税額の上昇が続いた(2022年1月に入って若干低下)。
- 2022年1月26日～2月1日の可変輸出関税額は、小麦:95.8、大麦74.4、トウモロコシ50.6(USD/トン)。
指標輸出価格をベースとして税率に換算すると、小麦:28.4、大麦25.5、トウモロコシ19.7(%)

ロシア穀物可変輸出関税額の推移

単位:USD/トン



資料:農林水産政策研究所(ロシア連邦農業省ウェブサイトから作成)。

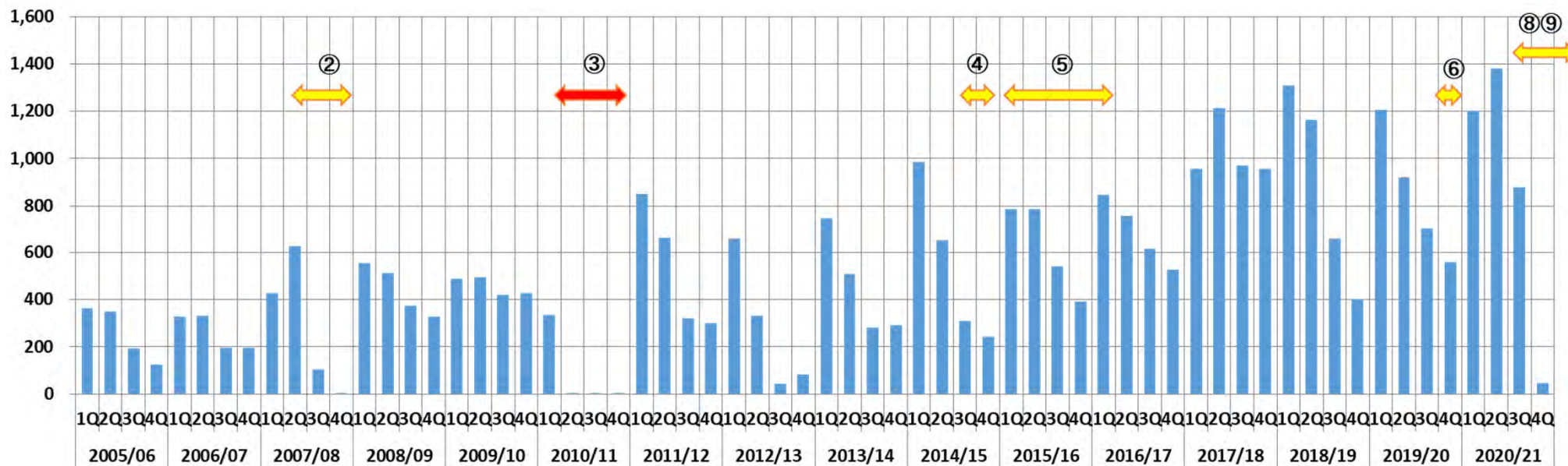
5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑦

【ロシアの小麦輸出量の変動と輸出制限】長期的な動向

- 伝統的な輸出国と比べると、生産量に対して国内需要量が大きく、輸出余力が相対的に小さい中で、天候による生産量の変動があり、もともと輸出量の変動は大きい傾向。
- かつては、輸出制限の発動によって輸出が途切れる時期が発生し、輸出量の変動を増幅。近年は、総じて輸出量が増加し、輸出制限の発動期間中も輸出が続いていたが、小麦の輸出関税が50ユーロ/トンに達した2020/21年度第4四半期は輸出が激減。

ロシアの小麦の輸出量の推移と穀物輸出制限の発動状況

単位: 万トン



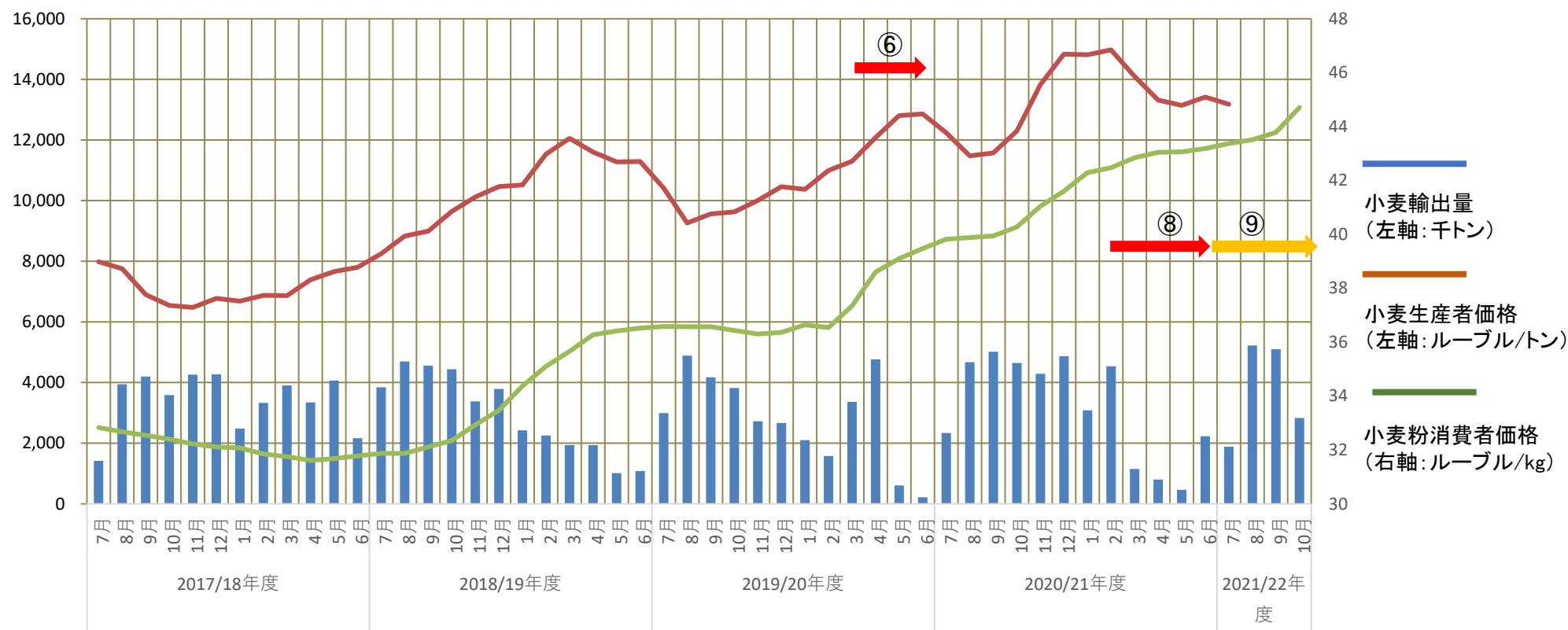
資料: 農林水産政策研究所(ロシア連邦税関庁「通関統計データベース」から作成)。

※ 時期区分は、ロシアの農業年度による。両矢印は穀物輸出制限(丸数字はスライド18の表に対応)

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑧

- 輸出量は、輸出制限導入・強化前の駆け込み増とその後の反動減が顕著（特に、⑥輸出数量枠：2020年4月1日～6月30日、⑧輸出数量枠＋輸出関税：2021年2月15日～6月1日、関税額は2月中25ユーロ/トン、3月1日以降50ユーロ/トン）
- 消費者価格は上昇傾向が続く。

近年のロシアの小麦輸出量と価格動向



資料：農林水産政策研究所（ロシア連邦税関庁、同統計庁EMISSから作成）。矢印は穀物輸出制限。丸数字はロシアの穀物輸出制限一覧の表に対応。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑨

(3) 油糧種子・植物油の輸出制限の強化

【油糧種子】

① 第1の措置(2021年1月/2月～6月末まで)

- ・ 菜種、ヒマワリ種子の輸出関税引上げ(2020年12月10日付け政令2065号)
- ・ 大豆の輸出関税導入(2020年12月31日付け政令2397号)

② 第2の措置(2021年7月～2022年8月末まで)

- ・ 菜種の輸出関税延長(2021年4月6日付け政令547号)
- ・ ヒマワリ種子の輸出関税延長＋引上げ(同上)
- ・ 大豆の輸出関税延長＋引下げ(2021年5月27日付け政令803号)

ロシアの油糧種子輸出関税の強化

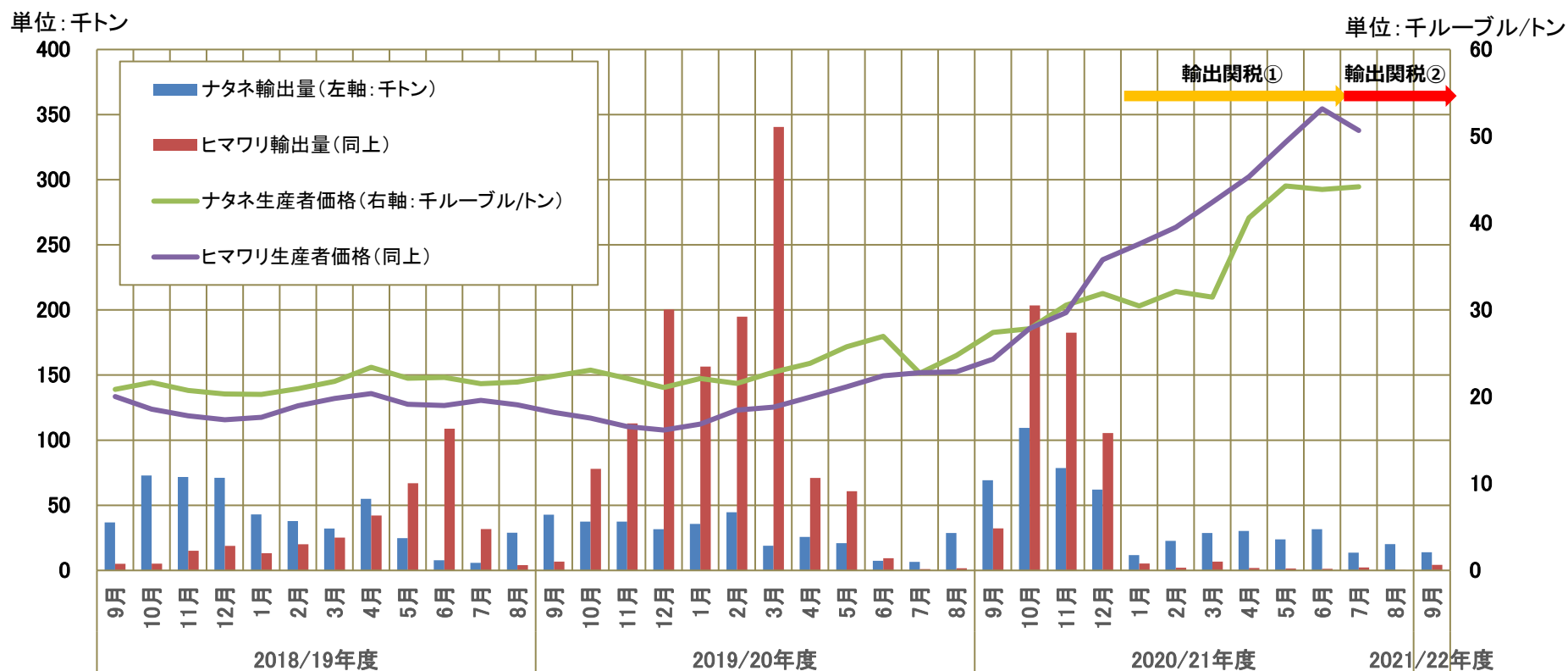
品名	HSコード	措置導入前の輸出 関税率	① 第1の措置		② 第2の措置	
			輸出税率	適用期間	輸出税率	適用期間
菜種	1205 10 900 0	6.5% (最低11.4 ユーロ/トン)	30% (最低165ユーロ/ト ン)	2021年1月9日 ～6月30日	30% (最低165ユーロ/トン)	2021年7月1日 ～22年8月31日
ヒマワリ 種子	1206 00 990 0	6.5% (最低9.75 ユーロ/トン)			50% (最低320ドル/トン)	
大豆	1201 90 000 0	無税	30% (最低165ユーロ/ト ン)	2021年2月1日 ～6月30日	20% (最低100ドル/トン)	2021年7月1日 ～22年8月31日

資料：農林水産政策研究所（各規制の根拠となるロシア連邦政令から作成）。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑩

- ロシアは、ヒマワリ種子を1,382万トン生産、71万トン輸出、菜種を221万トン生産、48万トン輸出（2018/19～2020/21の3年度平均：ロシア連邦統計庁、税関庁）。
- ヒマワリ種子、菜種の輸出は、2020年12月までは高水準。輸出関税が大幅に引き上げられた2020年1月以降は、特にヒマワリ種子の輸出量が激減。
- 油糧種子の生産者価格は、2020年に入ってから騰勢を強め、輸出関税が導入され、輸出が減少した後も上昇が継続。

ロシアのヒマワリ・ナタネの輸出量と生産者価格の推移

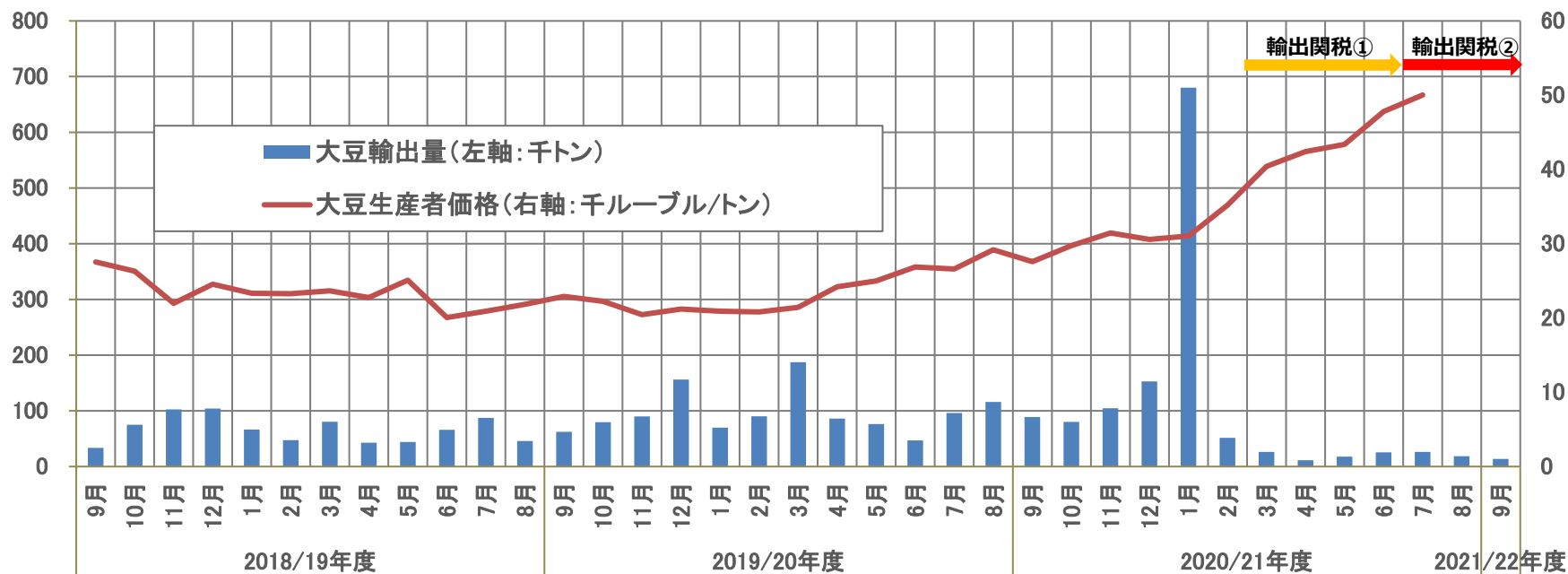


資料：農林水産政策研究所（輸出量はロシア連邦税関庁通関統計データベース、生産者価格（農業組織の値）は連邦統計庁EMISS）。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑪

- ロシアは、大豆を423万トン生産し、108万トンを輸出（2018/19～2020/21の3年度平均：ロシア連邦統計庁、税関庁）。
- ロシアは、国全体では大豆の純輸入国だが、極東地域産の大豆を主に中国に輸出。
- 輸出関税導入直前の2021年1月には駆け込み輸出が行われ、その後、輸出量は減少。同年7月の輸出関税引下げ後も輸出量の増加は見られない。
- 大豆の生産者価格は、2020年に入ってから騰勢を強め、輸出関税が導入され、輸出が減少した後も上昇が継続。

ロシアの大豆の輸出量と生産者価格の推移



資料：農林水産政策研究所（輸出量はロシア連邦税関庁通関統計データベース、生産者価格（農業組織の値）は連邦統計庁EMISS）。

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑫

○ ヒマワリ油に関しては、穀物（小麦等）と類似の可変輸出関税を導入（2021年4月6日付政令546号）

ロシアのヒマワリ油輸出関税の強化（2021年9月以降：可変輸出関税導入）

品名	HSコード	措置導入前 の輸出関税率	可変輸出関税			
			税額算出方式	説明	税額・指標輸出価格	適用期間
ヒマワリ油	1512 11 910 1	無税	下記の式により連邦農業省が毎月15日までに算出・公表し、翌月適用。 輸出関税額〔トン当たり〕 ＝（指標輸出価格－基準輸出価格） × 0.7	Refinitiv SAの"Sunflower Oil NWE Ex-Tank 6 Ports Position 1" を元に連邦農業省が毎月算出・公表。 【基準輸出価格】 1,000ドル/トン	【税額】ドル/トン 2021年9月：169.9 2021年10月：227.2 2021年11月：194.5 2021年12月：276.7 2022年1月：280.8 2022年2月：251.4	2021年9月1日～ 22年8月31日
	1512 11 910 9				【指標輸出価格】ドル/トン 2021年9月：1,242.8 2021年10月：1,324.7 2021年11月：1,277.9 2021年12月：1,395.4 2022年1月：1,401.2 2022年2月：1,359.2	
	1512 19 900 2					
	1512 19 900 9					

資料：農林水産政策研究所（ロシア連邦政令（2021年4月6日付第546号）、ロシア連邦農業省ウェブサイトから作成）。

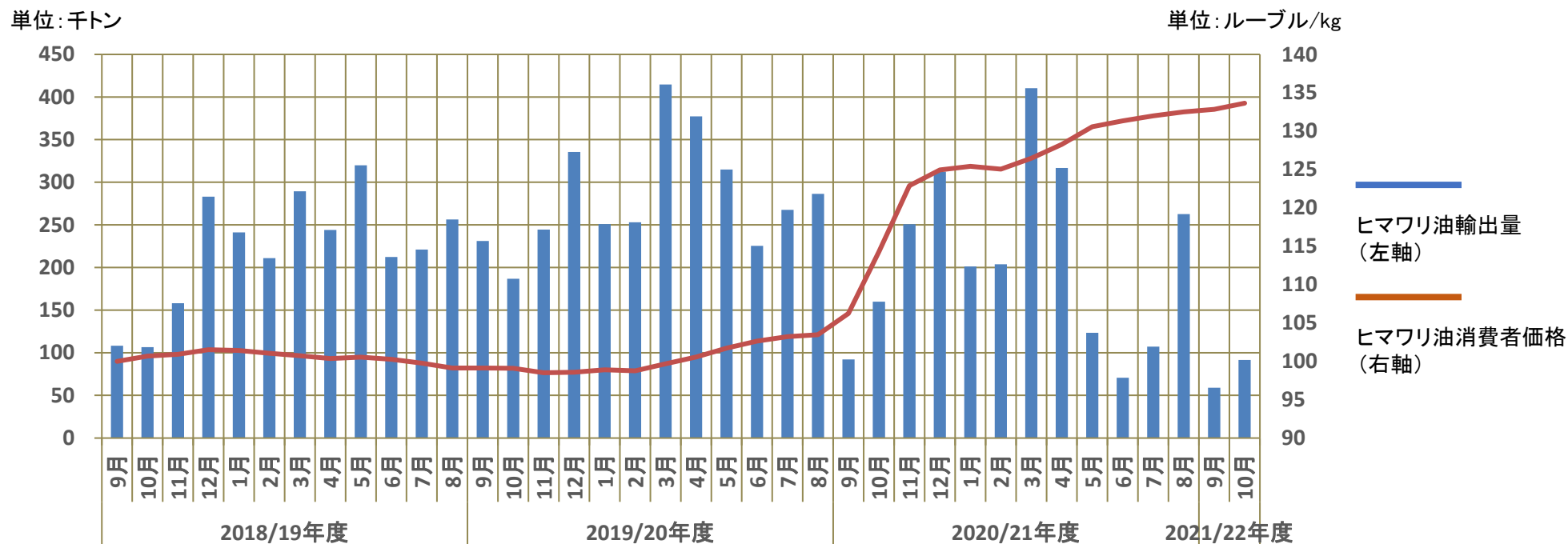
※ 可変輸出関税の税額及び指標輸出価格はロシア連邦農業省が下記アドレスにて公表。

<https://mcx.gov.ru/ministry/departments/departament-ekonomiki-investitsiy-i-regulirovaniya-rynkov/industry-information/info-maslo-podsolnechnoe/>

5. コロナ禍後の農産物輸出制限措置⑬

- ロシアは、ヒマワリ油を525万トン生産し、291万トン輸出（2018/19～2020/21の3年度平均：USDA・PSD Online）。
- 2021年9月から可変輸出関税を導入して輸出を規制。同年8月に急増した輸出量は9月には大幅に減少。
- ヒマワリ油の消費者価格は、2020/21年度に入って騰勢を強め、3割程度上昇。可変輸出関税が導入された2021年9月以降も上昇が継続。

ロシアのヒマワリ油の輸出量と消費者価格の推移



資料：農林水産政策研究所（ロシア連邦税関庁「通関統計データベース及び連邦統計庁EMISSから作成」）。

※ 期間区分は油糧種子の市場年度（9月～翌年8月）に合わせた。

6. まとめ

(1) 農産物輸出促進と食料安全保障の間で揺れ動くロシア

- ・ 石油依存からの脱却は、ロシア経済の重要課題。農産物輸出拡大も方策の一つ。
- ・ 他方、穀物輸出大国となった今も、食料の安定供給(数量・価格)は内政の重要課題。
- ・ 2020年には、コロナ禍の影響でロシア経済が後退し、国民生活が悪化する中で、食品価格高騰対策が課題に。
 - 2021年に入って穀物、油糧種子に輸出規制(輸出関税)を導入。
- ・ 2021年に入ってロシア経済は回復に転じるも、食品価格高騰は継続。
 - 穀物、油糧種子の輸出関税を修正しつつ継続。ヒマワリ油にも輸出関税を導入。

(2) 今後の留意点

- ・ ロシアの穀物、油糧種子等の輸出規制は当分継続。その動向や影響を注視する必要。
- ・ ロシア及びその周辺の政治・経済情勢等も含めて、前広な情報収集が重要。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 1 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--